



**Acronis® True Image™ 2015
Personal**

目次

1	はじめに	3
1.1	Acronis® True Image™ 2015 Personal とは.....	4
1.2	システム要件とサポートされるメディア.....	4
1.2.1	最小システム要件.....	4
1.2.2	サポートされるオペレーティング システム.....	4
1.2.3	サポートされるファイル システム.....	5
1.2.4	サポートされるストレージ メディア.....	5
1.3	Acronis True Image 2015 Personal のインストール.....	5
1.4	Acronis True Image 2015 Personal のアップグレード.....	7
1.5	サポートセンターのホームページ.....	8
2	基本的な概念	9
2.1	基本的な概念.....	9
2.2	ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージの違い.....	11
2.3	完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ.....	12
2.4	バックアップの保存場所の決定.....	14
2.4.1	認証設定.....	15
2.5	Windows との統合.....	15
2.6	ウィザード.....	17
3	データのバックアップ	18
3.1	パーティションとディスクのバックアップ.....	18
3.2	ファイルやフォルダのバックアップ.....	19
3.3	バックアップ オプション.....	20
3.3.1	スケジュール設定.....	22
3.3.2	バックアップ スキーム.....	23
3.3.3	バックアップ処理の通知.....	26
3.3.4	イメージ作成モード.....	27
3.3.5	バックアップの保護.....	28
3.3.6	バックアップ処理前後に実行するコマンド.....	28
3.3.7	バックアップの分割.....	29
3.3.8	バックアップのベリファイ オプション.....	30
3.3.9	バックアップの予備コピー.....	30
3.3.10	リムーバブル メディアの設定.....	31
3.3.11	バックアップのコメント.....	31
3.3.12	エラー処理.....	31
3.3.13	バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定.....	32
3.3.14	コンピュータのシャットダウン.....	33
3.3.15	バックアップ処理のパフォーマンス.....	33
3.4	バックアップの操作.....	34
3.4.1	バックアップ処理メニュー.....	35
3.4.2	バックアップのベリファイ.....	36
3.4.3	バックアップの保存先の分散.....	36
3.4.4	既存のバックアップをリストに追加する.....	38

4	データのリカバリ	39
4.1	ディスクとパーティションのリカバリ	39
4.1.1	クラッシュ後のシステムのリカバリ	39
4.1.2	パーティションとディスクのリカバリ	49
4.1.3	ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームのリカバリについて	50
4.1.4	BIOS での起動順の並び替え	52
4.2	ファイルとフォルダのリカバリ	54
4.3	リカバリ オプション	55
4.3.1	ディスク リカバリ モード	55
4.3.2	リカバリ処理前後に実行するコマンド	55
4.3.3	ベリファイ オプション	56
4.3.4	コンピュータの再起動	56
4.3.5	ファイル リカバリ オプション	57
4.3.6	ファイル上書きオプション	57
4.3.7	リカバリ処理のパフォーマンス	57
4.3.8	リカバリ処理の通知	58
4.4	コンピュータを工場出荷時の設定に復元するには	59
5	ツール	61
5.1	Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ	62
5.2	ブータブル レスキュー メディアの作成	63
5.2.1	Acronis メディア ビルダ	64
5.2.2	必要なときにレスキュー メディアを確実に使用できるようにする	69
5.3	新しいハードディスクの追加	73
5.3.1	ハードディスクの選択	73
5.3.2	初期化方法の選択	74
5.3.3	新しいパーティションの作成	75
5.4	Acronis 容量拡張マネージャ	77
5.5	イメージのマウント	79
5.6	イメージのアンマウント	81
6	トラブルシューティング	83
6.1	Acronis システム レポート	83
6.2	Acronis スマート エラー レポート	84
6.3	カスタム レスキュー CD の作成	85
6.4	Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム	86
7	用語集	88

1 はじめに

セクションの内容

Acronis® True Image™ 2015 Personal とは	4
システム要件とサポートされるメディア	4
Acronis True Image 2015 Personal のインストール	5
Acronis True Image 2015 Personal のアップグレード	7

1.1 Acronis® True Image™ 2015 Personal とは

Acronis True Image 2015 Personal は、コンピュータに保存されているすべての情報を安全に守るための統合ソフトウェア スイートです。オペレーティング システム、アプリケーション、設定、およびすべてのデータのバックアップや、不要になったあらゆる機密データを完全に消去することができます。このソフトウェアを使用すると、指定したファイルとフォルダ、設定値、さらにはハードディスク ドライブ全体や選択したパーティションをバックアップすることができます。

Acronis True Image 2015 Personal には、データの損失、重要なファイルまたはフォルダの誤削除、ハード ディスク全体の故障などの障害や災害が発生した場合にコンピュータ システムをリカバリするのに必要なツールがすべて含まれています。

Acronis True Image 2015 Personal は Acronis 独自のテクノロジーによって、セクタ単位でディスクを正確にバックアップすることができます。バックアップには、すべてのオペレーティング システム、アプリケーション、構成ファイル、個人設定、およびデータが含まれます。

ほとんどの PC ストレージ デバイスにバックアップを保存できます。

Windows スタイルのインターフェイスおよびウィザードであるため、操作が簡単です。簡単なステップをいくつか実行するだけで、あとはすべて Acronis True Image 2015 Personal によって処理されます。システムに障害や災害が発生した場合は、ソフトウェアによりすぐにコンピュータを稼働できる状態に戻せます。

1.2 システム要件とサポートされるメディア

1.2.1 最小システム要件

Acronis True Image 2015 Personal を実行するには次のハードウェアが必要です。

- 1 GHz の Pentium プロセッサ
- 1 GB の RAM
- ハード ディスク上に 1.5 GB の空き領域
- ブータブル メディア作成用の CD-RW/DVD-RW ドライブまたは USB フラッシュ ドライブ
- 1152 x 720 の画面解像度
- マウスまたはその他のポインティング デバイス (推奨)

1.2.2 サポートされるオペレーティング システム

Acronis True Image 2015 Personal は、次のオペレーティング システムでテスト済みです。

- Windows Vista (Vista Home Basic および Vista Home Premium を除くすべてのエディション)
- Windows 7 SP1 (Starter Edition および Home Edition を除くすべてのエディション)
- Windows 8 (全エディション)

- Windows 8.1 (全エディション)

Acronis True Image 2015 Personal では、Intel または AMD ベースの PC オペレーティング システム (Linux® を含む) を実行するコンピュータ上のディスク/パーティションをバックアップしてリカバリするためのブータブル CD-R/DVD-R を作成することもできます (インテル ベースの Apple Macintosh はサポートされていません)。

1.2.3 サポートされるファイル システム

- FAT16/32
- NTFS
- Ext2/Ext3/Ext4 *
- ReiserFS *
- Linux SWAP *

ファイル システムがサポート対象外または破損している場合も、Acronis True Image 2015 Personal ではデータをセクタ単位でコピーできます。

* Ext2/Ext3/Ext4、ReiserFS、および Linux SWAP ファイル システムは、ディスクまたはパーティション バックアップ/リカバリ操作にのみサポートされています。Acronis True Image 2015 Personal では、これらのファイル システムに対してはファイル レベルの処理 (ファイルのバックアップ、リカバリ、検索だけでなく、イメージをマウントして、そのイメージからファイルをリカバリ) は実行できません。これらのファイル システムが採用されているディスクやパーティションへのバックアップを行うこともできません。

1.2.4 サポートされるストレージ メディア

- ハードディスク ドライブ*
- ソリッド ステート ドライブ (SSD)
- ネットワーク上のストレージ デバイス
- CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R (2 層ディスクの DVD+R を含む) 、DVD+RW、DVD-RAM、BD-R、BD-RE
- USB 1.1/2.0/3.0、FireWire (IEEE-1394) および PC カード ストレージ デバイス
- REV® およびその他のリムーバブル メディア

Acronis True Image 2015 Personal では、2 TB を超える大容量ハード ディスク ドライブもサポートされます。オペレーティング システムがこのようなハードウェアをサポートしていない場合でも、このサポートは実現されます。詳細については、「Acronis 容量拡張マネージャ 『77ページ 』」を参照してください。

1.3 Acronis True Image 2015 Personal のインストール

Acronis True Image 2015 Personal のインストールと起動

Acronis True Image 2015 Personal をインストールしてアクティブ化するには、次の手順を実行します。

1. セットアップ ファイルを実行します。
2. 以下をご確認ください。
 - 使用許諾契約の条件。

- Acronis カスタマー エクスペリエンス プログラムの参加条件。
3. 両方の条件に同意される場合は、**[インストール]** をクリックします。
Acronis True Image 2015 Personal がシステム パーティションにインストールされます（通常は C ドライブ）。
 4. インストールが完了したら、**[アプリケーションを開始]** をクリックします。**[Acronis True Image 2015 Personal のアクティブ化]** ウィンドウが開きます。
 5. **[サインイン]** タブで、Acronis のマイアカウントの資格情報を入力し、**[サインイン]** をクリックします。
Acronis のマイアカウントを登録していない場合は、**[アカウントの作成]** タブに移動し、登録フォームを入力して、**[アカウントの作成]** をクリックします。
-
- 注意: 64 桁のプロダクト キーがある場合は、この手順をスキップできます。*
6. プロダクト キーを入力して、**[アクティブ化]** をクリックします。
16 桁のプロダクト キーを使用して Acronis True Image 2015 Personal をアクティブ化するには、インターネット接続が必要です。64 桁のフル プロダクト キーは自動的に取得され、アクティブ化されます。

Acronis True Image 2015 Personal に問題がある場合のリカバリ

Acronis True Image 2015 Personal が動作しなくなったりエラーが発生した場合は、ファイルが破損している可能性があります。このような問題に対処するには、まずプログラムを復旧する必要があります。そのためには、Acronis True Image 2015 Personal インストーラを再度実行します。インストーラによりコンピュータ上の Acronis True Image 2015 Personal が検出され、修復か削除の確認を求められます。

Acronis True Image 2015 Personal の削除

Acronis True Image 2015 Personal コンポーネントを削除する手順は、次のとおりです。

1. インストール済みのプログラムおよびアプリケーションのリストを開きます。
 - **[スタート] → [設定] → [コントロール パネル] → [プログラムの追加と削除]** の順に選択します。
 - Windows Vista をご利用の場合は、**[スタート] → [コントロール パネル] → [プログラムと機能]** の順に選択します。
 - Windows 7 をご利用の場合は、**[スタート] → [コントロール パネル] → [プログラムのアンインストール]** の順に選択します。
 - Windows 8 をご利用の場合は、設定アイコンをクリックし、**[コントロール パネル] → [プログラムのアンインストール]** の順に選択します。
2. 削除するコンポーネントを選択します。
 - **Acronis True Image**
 - **Acronis 初期状態**
3. Windows XP および Windows Vista の場合は **[削除]** をクリックします。Windows 7 の場合は **[アンインストール]** をクリックします。
4. 画面の指示に従います。

削除を完了するために、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

Acronis セキュアゾーンまたは Acronis ノンストップ バックアップを使用した場合は、表示されるウィンドウでゾーンとノンストップ バックアップ ストレージの処理を選択します。

古いバージョンの Acronis True Image OEM からのアップグレード

Acronis True Image OEM が既にインストールされている場合は、新しいバージョンによって古いバージョンが自動的にアップデートされます。新しいバージョンをインストールする前に古いバージョンをアンインストールする必要はありません。

新しいバージョンのプログラムで作成されたバックアップは、前のバージョンのプログラムとは互換性がない可能性があることに注意してください。Acronis True Image 2015 Personal を古いバージョンに戻した場合は、その古いバージョンでバックアップを再度作成する必要があります。同じ理由により、Acronis True Image OEM のアップグレード後は、新たにブータブルメディアを作成することを強くお勧めします。

1.4 Acronis True Image 2015 Personal のアップグレード

Acronis True Image 2015 Personal の機能は、Acronis True Image 2015 と比べて限られています。ソフトウェア インターフェイスでは、ロックされている機能は灰色の文字で表示されるか、🔒 記号が付けられています。

Acronis True Image 2015 Personal を Acronis True Image 2015 にアップグレードすると、これらの機能をすべて使用できるようになります。アップグレードの場合、通常の小売価格より安い、アップグレード特別価格が適用されます。

Acronis True Image 2015 Personal をアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image 2015 Personal を起動します。
2. ロックされた機能をクリックします。たとえば、[ツール] セクションに移動して、[Acronis Universal Restore] をクリックします。



3. 開いたウィンドウで、[製品版を購入] をクリックします。ビルトインストアが開きます。
4. 購入するライセンスを選択し、[今すぐ購入] をクリックします。

5. 支払い情報を指定します。
6. Acronis True Image 2015 をダウンロードし、Acronis True Image 2015 Personal を上書きしてインストールします。
これにより、Acronis True Image 2015 Personal が安全に置き換えられ、既存のバックアップと設定が適切に保持されます。

1.5 サポートセンターのホームページ

Acronis True Image 2015 Personal に関するサポート、および製品のアップデートについては、ハードウェア サプライヤの公式サポート情報を参照してください。

2 基本的な概念

セクションの内容

基本的な概念.....	9
ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージの違い	11
完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ	12
バックアップの保存場所の決定.....	14
Windows との統合	15
ウィザード.....	17

2.1 基本的な概念

ここでは、プログラムの動作のしくみを理解するうえで役立つと思われる、基本的な概念について説明します。

注意: ご使用の Acronis True Image 2015 Personal エディションでは一部の機能が提供されていないことがあります。

バックアップとリカバリ

バックアップとは、元のデータが失われてもそのコピーからリカバリできるように、データのコピーを作成しておくことです。

バックアップの主な目的は 2 つあります。1 つは、障害または災害発生後に状態を復旧することで（「災害復旧」という）、もう 1 つは、誤って削除されたファイル、破損した少数のファイルをリカバリすることです。

Acronis True Image 2015 Personal は、この最初の目的を達成するために、ディスク（またはパーティション）イメージの作成機能を備え、第 2 の目的のために、ファイル レベル バックアップ作成機能を備えています。

バックアップ バージョン

バックアップ バージョンは、それぞれのバックアップ処理中に作成された単独または複数のファイルです。統合機能を使用しない場合、作成されるバージョンの数は、バックアップが実行された回数（この時点での保存回数）と常に同じになります。

つまり、バージョンはそれぞれ特定の時点を表しており、その時点の状態にシステムやデータを復元することができます。言い換えれば、バックアップ バージョンは、完全バックアップおよび増分バックアップを表しています。「完全バックアップ、増分バックアップ 『12 ページ 』」を参照してください。

バックアップ バージョンは、ファイル バージョンと似ています。ファイル バージョンという考えは、「以前のバージョンのファイル」と呼ばれている Windows Vista や Windows 7 の機能を使用しているユーザーにはよく知られています。この機能を使用すると、ファイルを特定の日時における状態に復元できます。バックアップ バージョンを使用すると、同様の方法でデータをリカバリできます。

バックアップ バージョンは、破損したり削除されたりしたファイルを見つけようとする場合に便利です。目的のファイルが格納されたバックアップ バージョンが見つかるまで Acronis

バックアップ エクスプローラ内の各バックアップ バージョンを参照するだけです。さらに、発見されたファイルの異なる保存済みバージョンをリカバリすることもできます。

ディスクのクローン作成

これは、1 つのディスク ドライブの内容全体を別のディスク ドライブに移行/コピーする処理です。たとえば、大容量のディスクを取り付ける場合などに、この機能が必要となる場合があります。この機能を使用すると、同じファイル構造を持つ 2 つのまったく同じドライブが作成されます。「ディスクのクローン作成」ツールを実行すると、1 つのハード ディスクドライブのすべての内容が別のハードディスク ドライブにコピーされます。この処理を利用すると、ハード ディスク ドライブの内容が、オペレーティング システムやインストール済みプログラムも含めてすべて別のドライブに転送されるので、すべてのソフトウェアを再インストールして再設定する必要はなくなります。

Acronis True Image 2015 Personal では、特定のパーティションのみのクローン作成はできません。クローンを作成できるのは、ドライブ全体のみです。

ハード ディスク ドライブの情報をすべて別のドライブに転送するには、他にも、古いハード ディスク全体をバックアップしてから、そのバックアップを新しいディスクにリカバリするという方法があります。

バックアップ ファイルの形式

Acronis True Image 2015 Personal では通常、バックアップ データは独自の TIB 形式で圧縮して保存されます。その結果、必要な保存領域を減らすことができます。

tib ファイルの作成時に、データ ブロックのチェックサム値が計算されて、バックアップ対象のデータに追加されます。このチェックサムの値を使用すると、データの整合性を検証できます。

tib ファイルのバックアップのデータは、Acronis 製品を使用した場合にのみリカバリできます。このリカバリは、Windows またはリカバリ環境で実行できます。

バックアップのベリファイ

バックアップのベリファイ機能を使用すれば、データをリカバリできるかどうかを確認できます。前述のように、バックアップされるデータにはチェックサム値が追加されます。バックアップ ベリファイの実行時に、Acronis True Image 2015 Personal はバックアップ ファイルを開いてチェックサム値を再計算し、保存されているチェックサム値と比較します。比較した値がすべて一致していれば、そのバックアップ ファイルは破損していないので、バックアップからのデータ リカバリはかなり高い確率で成功します。

災害復旧

障害からのリカバリには、通常レスキュー メディアおよびシステム パーティションのバックアップが必要になります。

Acronis True Image 2015 Personal は、システム データの破損、ウイルス、マルウェアなどを原因とする障害からのリカバリを行います。

オペレーティング システムが起動できなかった場合、Acronis True Image 2015 Personal によって、システム パーティションがリカバリされます。メディア ビルダ ツールを使用してレスキュー メディアを作成することができます。

スケジュール設定

作成したバックアップを実際に役立てるには、可能な限り「最新」のバックアップを作成しておく必要があります。つまり、バックアップを定期的に行う必要があります。Acronis True Image 2015 Personal のバックアップは簡単に作成できますが、バックアップを実行し忘れてしまうこともあります。

そのような作業はスケジューラに任せることができます。スケジューラを使用すれば、自動バックアップのスケジュールをあらかじめ設定できます。十分なストレージ領域が存在する限り、データはバックアップされます。

このプログラムの機能を使用する場合、これらの用語と概念を理解しておく役立ちます。

工場出荷時のイメージ

工場出荷時のイメージは、工場出荷時のコンピュータの構成が記録された特別なディスク バックアップです。このバックアップは、通常、コンピュータのハードウェア サプライヤが作成、提供します。

コンピュータの工場出荷時のイメージは Acronis セキュア ゾーン に保存されており、Acronis バックアップのリストから選択できます。工場出荷時のイメージを使用して、工場出荷時の設定にコンピュータを復元するには、Windows から直接、または工場出荷時のブータブル メディアを使用して行います。詳細については、「コンピュータを工場出荷時の設定に復元するには」を参照してください。

2.2 ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージの違い

ファイルとフォルダをバックアップする場合、ファイルとフォルダ ツリーのみが圧縮されて保存されます。

ディスク/パーティションのバックアップは、ファイルとフォルダのバックアップとは異なります。Acronis True Image 2015 Personal では、ディスクまたはパーティションの正確なスナップショットが保存されます。この処理は「ディスク イメージの作成」または「ディスク バックアップの作成」と呼ばれ、作成されたバックアップは一般的に「ディスク/パーティション イメージ」または「ディスク/パーティション バックアップ」と呼ばれます。

ディスク/パーティションのバックアップには、ディスクまたはパーティションに保存されているすべてのデータが含まれます。

1. マスター ブート レコード (MBR) があるハード ディスクのゼロ トラック (MBR ディスク バックアップのみに適用)。
2. 以下を含む、1 つ以上のパーティション
 1. ブート コード。
 2. サービス ファイル、ファイル アロケーション テーブル (FAT)、およびパーティション ブート レコードを含むファイル システム メタ データ。
 3. オペレーティング システム (システム ファイル、レジストリ、ドライバ)、ユーザー データ、およびソフトウェア アプリケーションを含むファイル システム データ。
3. システム予約済みパーティション (存在する場合)。
4. EFI システム パーティション (存在する場合) (GPT ディスク バックアップにのみ適用)。

デフォルトでは、データを含むハード ディスク内のセクタのみが Acronis True Image 2015 Personal によって保存されます。また、Acronis True Image 2015 Personal の場合、Windows XP 以降の pagefile.sys や hiberfil.sys (コンピュータが休止状態になる際に RAM の内容を保持するファイル) はバックアップされません。その結果、イメージ ファイルのサイズが小さくなり、イメージ ファイルの作成とリカバリに要する時間が短縮されます。

このデフォルトの方法は、セクタ単位モードをオンにすることで、変更できます。この場合、Acronis True Image 2015 Personal では、含まれるデータだけではなく、すべてのハード ディスク セクタがコピーされます。

2.3 完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ

注意: 増分バックアップおよび差分バックアップは、ご使用の Acronis True Image 2015 Personal エディションでは使用できない場合があります。

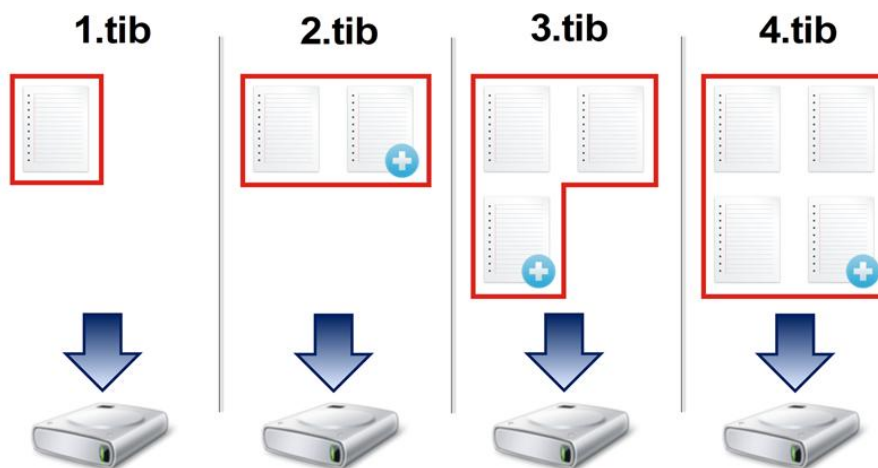
Acronis True Image 2015 Personal には次の 3 つのバックアップ方法が用意されています。

完全バックアップ

完全バックアップ処理 (別名「完全バックアップ バージョン」) の結果には、バックアップ作成時のすべてのデータが含まれます。

例: 毎日、ドキュメントの 1 ページを書き、完全バックアップを使用してバックアップします。True Image は、バックアップを実行するたびにドキュメント全体を保存します。

1.tib、2.tib、3.tib、4.tib: 完全バックアップ バージョン。



追加情報

完全バックアップ バージョンは、増分バックアップや差分バックアップの基になるデータとなります。スタンドアロンのバックアップとしても使用できます。スタンドアロンの完全バックアップは、システムを最初の状態に戻すことが多い場合や、複数のバックアップ バージョンを管理することが望ましくない場合に最適なソリューションです。

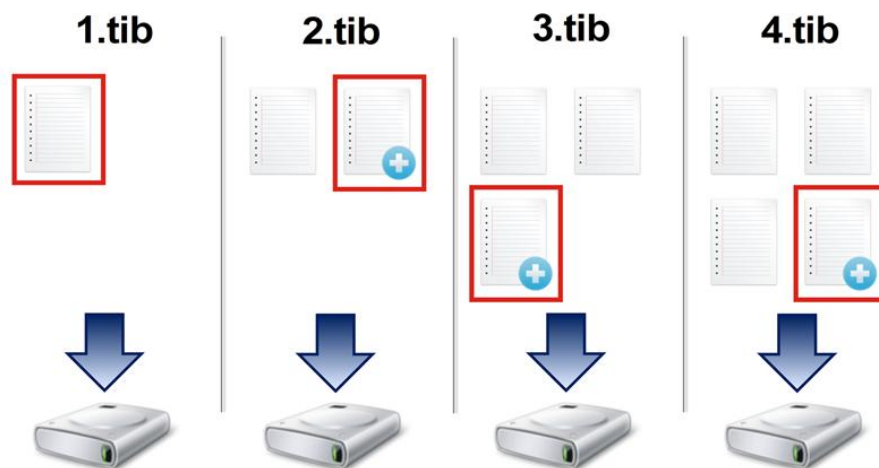
増分バックアップ

増分バックアップ処理（別名「増分バックアップ バージョン」）の結果には、前回のバックアップ以降に変更されたファイルのみが含まれます。

例:毎日、ドキュメントの 1 ページを書き、増分バックアップを使用してバックアップします。True Image は、バックアップを実行するたびに新しいページを保存します。

注意:作成する最初のバックアップ バージョンは必ず完全バックアップである必要があります。

- 1.tib: 完全バックアップ バージョン。
- 2.tib、3.tib、4.tib: 増分バックアップ バージョン。



追加情報

増分バックアップは、頻繁なバックアップと特定の時点に戻す機能が必要な場合に非常に便利です。一般に、増分バックアップ バージョンは完全バージョンや差分バージョンに比べてかなり小さくなります。

一方、増分バージョンでは、リカバリの実行時にプログラムでの処理が増加します。上記の例では、4.tib ファイルから作業全体をリカバリする場合、True Image はすべてのバックアップ バージョンからデータを読み取ることになります。そのため、1 つの増分バックアップ バージョンを失ったり、破損したりすると、それ以降のすべての増分バックアップ バージョンが使用できなくなります。

差分バックアップ

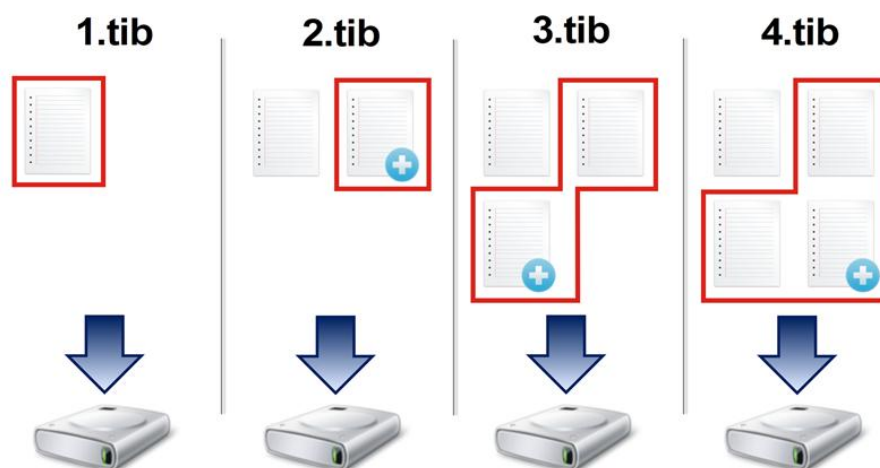
差分バックアップ処理（別名「差分バックアップ バージョン」）の結果には、前回の完全バックアップ以降に変更されたファイルのみが含まれます。

例:毎日、ドキュメントの 1 ページを書き、差分バックアップを使用してバックアップします。True Image は、完全バックアップ バージョンに保存された最初のページ以外のドキュメント全体を保存します。

注意:作成する最初のバックアップ バージョンは必ず完全バックアップである必要があります。

- 1.tib: 完全バックアップ バージョン。

- 2.tib、3.tib、4.tib: 差分バックアップ バージョン。



追加情報

差分バックアップは、前述の 2 つの方法の中間的な方法です。「完全」よりもかかる時間と領域は少ないですが、「増分」よりは多くなります。差分バックアップ バージョンからデータをリカバリする場合、True Image には差分バージョンと最後の完全バージョンのみが必要です。そのため、差分バージョンからのリカバリは、増分バージョンからのリカバリより単純で、信頼性が高くなります。

ディスクを最適化した後に、増分バックアップ、または差分バックアップを作成すると、通常に比べかなり大きなサイズになります。これは、ディスクの最適化プログラムによってディスク上のファイルの位置が変更され、バックアップにこれらの変更が反映されるためです。このため、ディスク最適化後に、完全バックアップを再度作成することをお勧めします。

目的のバックアップ方法を選択するには、通常、カスタム バックアップ スキームを設定する必要があります。詳細については、「カスタム スキーム 『24ページ』」を参照してください。

2.4 バックアップの保存場所の決定

Acronis True Image 2015 Personal では、さまざまなストレージ デバイスがサポートされています。詳細については「サポートされるストレージ メディア 『5ページ』」を参照してください。サポートされている保存場所について、以下で説明します。

ハードディスク ドライブ

現在はハードディスクが安価になっているため、ほとんどの場合、外付けハード ドライブを購入してバックアップを保存する方法が最適です。外部ドライブを使用すると、データをオフサイト（たとえば、仕事場のコンピュータのバックアップを自宅に、またはその逆）で保持できるため、データのセキュリティが強化されます。コンピュータの設定ポートと必要なデータ転送速度に応じて、USB、FireWire、eSATA など、さまざまなインターフェイスを選択できます。多くの場合（特にご使用のコンピュータで USB 3.0 がサポートされている場合）、USB の外付けハードディスク ドライブが最善の選択と言えるでしょう。

デスクトップ PC で USB の外付けハードディスク ドライブを使用する場合は、短いケーブルを使用して背面のコネクタにドライブを接続すれば最も動作の信頼性が高くなります。この方法を使用すると、バックアップ/リカバリ時のデータ転送エラーの可能性が低くなります。

NAS や NDAS などのホーム ファイル サーバー

Gigabit Ethernet ホーム ネットワーク、および専用のファイル サーバーや NAS をお持ちの場合は、（内蔵ドライブと同様に）ファイル サーバーや NAS にバックアップを保存することができます。

NAS、NDAS などの外付けハード ディスク ドライブを使用する場合は、選択したバックアップ ストレージが Acronis True Image 2015 Personal によって認識されるかどうかをチェックする必要があります。これは Windows とレスキュー メディアからの起動時の両方で確認が必要です。

NDAS 対応のストレージ デバイスにアクセスするには、多くの場合 NDAS デバイス ID（20 文字）と書き込みキー（5 文字）を指定する必要があります。書き込みキーを使用すると、NDAS が有効なデバイスを書き込みモード（バックアップの保存など）で使用できます。通常、デバイス ID と書き込みキーは NDAS デバイスの底面のステッカーまたはエンクロージャの内側に記載されています。ステッカーが見つからない場合は、NDAS デバイスの製造元に問い合わせることでこの情報を入手してください。

光学ディスク

DVD-R、DVD+R などの空の光学ディスクは非常に価格が安いので、最も低コストなバックアップ ソリューションではありますが、時間は一番かかります。DVD に直接バックアップする場合は特にそうです。また、複数の DVD でバックアップを行った場合は、データ リカバリの際に何度もディスクを入れ替える必要があります。一方で、ブルーレイ ディスクも使用できます。

ディスクが 4 枚以上になる場合はディスクの入れ替えが頻繁になるため、DVD 以外の方法でバックアップすることを強くお勧めします。DVD 以外に方法がない場合は、すべての DVD をハードディスク上のフォルダにコピーし、そのフォルダからリカバリすることをお勧めします。

2.4.1 認証設定

ネットワークのコンピュータに接続するほとんどの場合では、ネットワーク共有にアクセスするために必要なログイン情報を入力する必要があります。たとえば、バックアップ ストレージを選択する際にこの操作が必要になることがあります。ネットワーク コンピュータの名前を選択すると、**[認証設定]** ウィンドウが自動的に表示されます。

必要に応じて、ユーザー名とパスワードを指定し、**[接続のテスト]** をクリックします。テストが成功した場合は、**[接続]** をクリックします。

2.5 Windows との統合

インストール時に Acronis True Image 2015 Personal は Windows と緊密に統合されます。この統合により、コンピュータの能力を最大限に引き出すことができます。

Acronis True Image 2015 Personal では、次のコンポーネントが統合されます。

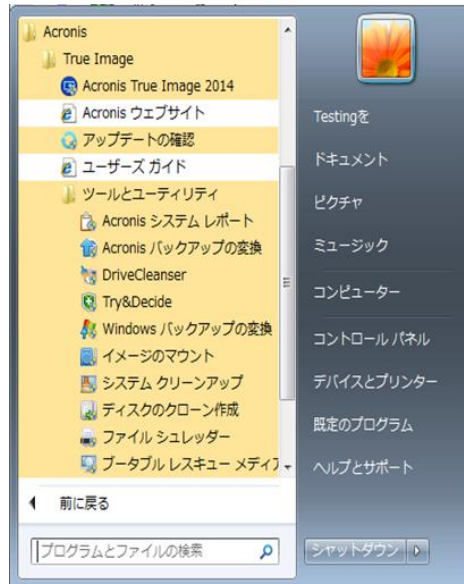
- Windows の **[スタート]** メニューに Acronis のアイテムが表示されます。

- タスクバーに Acronis True Image 2015 Personal ボタンが表示されます。
- ファイルの [プロパティ] ウィンドウに [Acronis リカバリ] タブが表示されます。
- ショートカット メニュー コマンド。

オプションのコンポーネントの詳細については、「統合の設定」を参照してください。

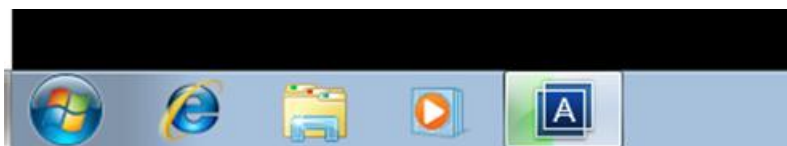
Windows の [スタート] メニュー

[スタート] メニューに、Acronis コマンド、ツール、およびユーティリティが表示されます。これらを使用して True Image 機能にアクセスでき、アプリケーションを起動する必要はありません。



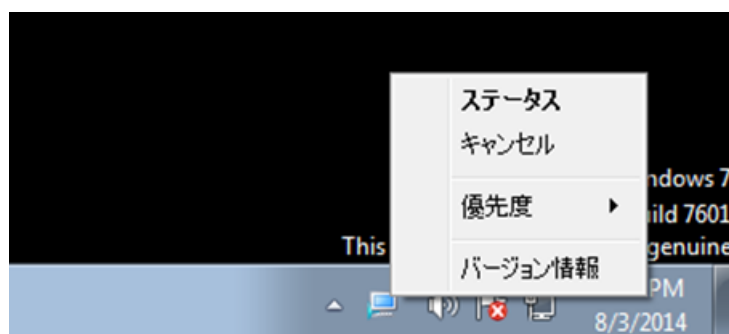
タスクバーの Acronis True Image 2015 Personal ボタン

Windows タスクバーの Acronis True Image 2015 Personal ボタンにより、Acronis True Image 2015 Personal の処理の進行状況と結果を表示することができます。



タスク トレイのアイコン

処理の実行中には、特別なインジケータ アイコンが Windows のタスク トレイに表示されます。このアイコンは、メイン プログラム ウィンドウが開いていなくても表示されます。

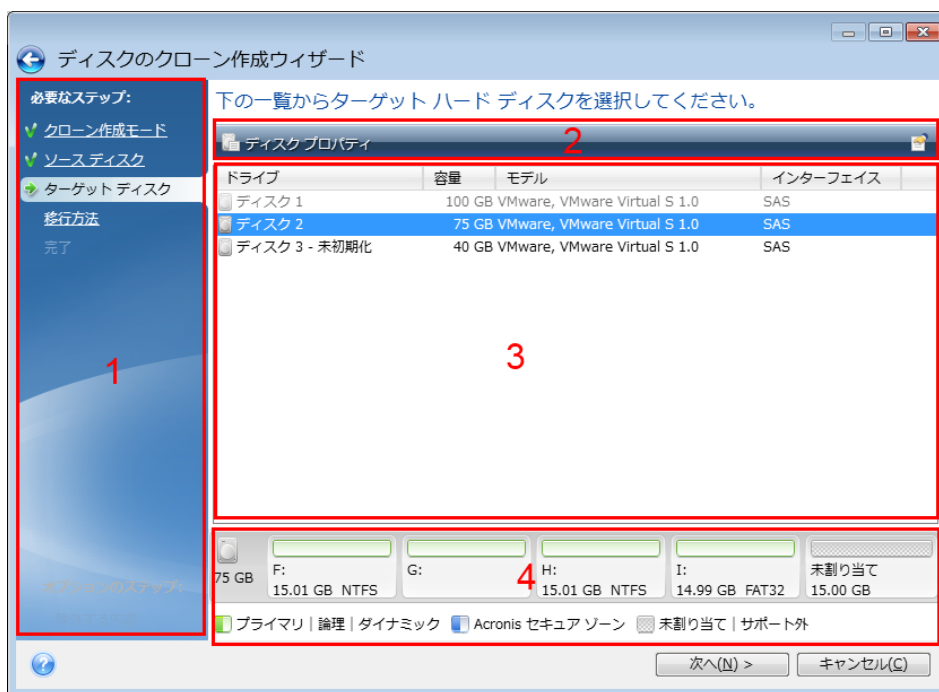


- 処理の進行状況または状態を示すツールのヒントを表示するには、アイコンの上に移動します。
- 状態を表示したり、優先順位を変更したり、現在の処理をキャンセルしたりするには、アイコンを右クリックして、対応するコマンドをクリックします。

2.6 ウィザード

利用可能な Acronis True Image 2015 Personal ツールおよびユーティリティを使用する際、ほとんどの場合ウィザードが表示されるので、指示に従って処理を進めることが可能です。

たとえば、次のスクリーンショットを確認してください。



ウィザード ウィンドウは、通常、次の領域で構成されています。

1. 処理を完了するうえで必要なステップのリスト。完了したステップの横には緑のチェックマークが表示されます。緑の矢印は現在処理中のステップを示します。すべてのステップが完了すると、**[完了]** ステップで概要画面が表示されます。概要を確認し、**[実行]** をクリックして処理を開始します。
2. 領域 3 で選択するオブジェクトを管理するためのボタンが表示されたツールバー。たとえば、次のようにします。
 - **詳細:** 選択したバックアップに関する詳細な情報を提供するウィンドウが表示されます。
 - **プロパティ:** 選択した項目のプロパティ ウィンドウが表示されます。
 - **新しいパーティションの作成:** 新しいパーティションの設定を行えるウィンドウが表示されます。
 - **項目:** 表示する表の列とその表示順序を選択できます。
3. 項目を選択し、設定を変更する主要領域。
4. 領域 3 で選択する項目についての追加情報が表示される領域。

3 データのバックアップ

Acronis True Image 2015 Personal は、IT の専門家をも満足させる洗練されたバックアップ機能を豊富に備えています。それらのバックアップ機能によって、ディスク（パーティション）およびファイルをバックアップできます。最適なバックアップ機能を 1 つ選んで使用することも、すべてのバックアップ機能を使用することも可能です。以降の各セクションでは、これらのバックアップ機能について詳しく説明します。

セクションの内容

パーティションとディスクのバックアップ.....	18
ファイルやフォルダのバックアップ.....	19
バックアップ オプション.....	20
バックアップの操作.....	34

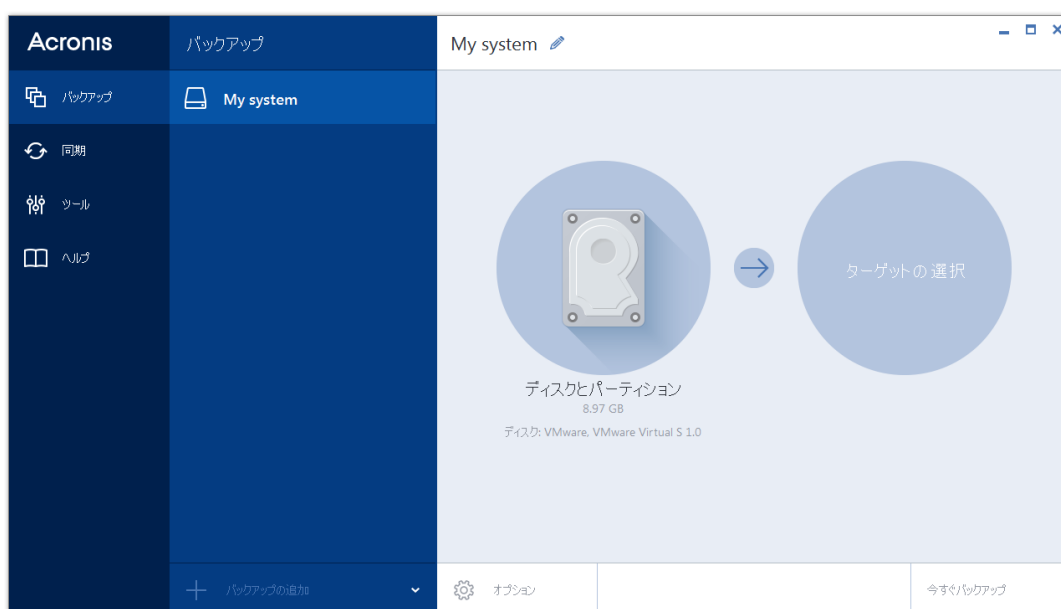
3.1 パーティションとディスクのバックアップ

ファイルのバックアップとは対照的に、ディスクやパーティションのバックアップには、ディスクやパーティションに保存されているすべてのデータが含まれます。この種類のバックアップは通常、システム ディスク全体のシステム パーティションの正確なコピーを作成するために使用されます。このバックアップは、Windows が正しく動作しなかったり起動しない場合に、コンピュータをリカバリすることが可能です。

パーティションまたはディスクをバックアップするには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image 2015 Personal を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. 新しいバックアップを追加するには、バックアップ一覧の下部にあるプラス記号をクリックし、バックアップの名前を入力します。
4. **[バックアップ ソース]** アイコンをクリックし、**[ディスクとパーティション]** を選択します。
5. 表示されたウィンドウで、バックアップするディスクやパーティションの横にあるチェック ボックスをオンにし、**[OK]** をクリックします。
非表示のパーティションを表示するには、**[パーティションの完全な一覧]** をクリックします。

ダイナミック ディスクをバックアップするには、パーティション モードのみを使用できます。



6. **[バックアップの保存先]** アイコンをクリックし、バックアップの保存先を選択します。
 - **外付けドライブ:** 外付けドライブがコンピュータに接続されている場合は、リストからそのドライブを選択できます。
 - **参照:** フォルダ ツリーから保存先を選択します。

システム パーティションのバックアップをダイナミック ディスクに保存することは避けるようにしてください。システム パーティションは **Linux** 環境でリカバリされるからです。**Linux** と **Windows** では、ダイナミック ディスクの動作が異なります。その結果、リカバリ中に問題が発生する可能性があります。

7. (オプションの手順) バックアップのオプションを設定するには、**[オプション]** をクリックします。詳細については、「バックアップ オプション 『20ページ』」を参照してください。
8. 次のいずれかを実行します。
 - 今すぐバックアップを実行するには、**[バックアップの開始]** をクリックします。
 - 後で、あるいはスケジュールに基づいてバックアップを実行するには、**[バックアップの開始]** ボタンの右側にある矢印をクリックし、**[後で実行]** をクリックします。

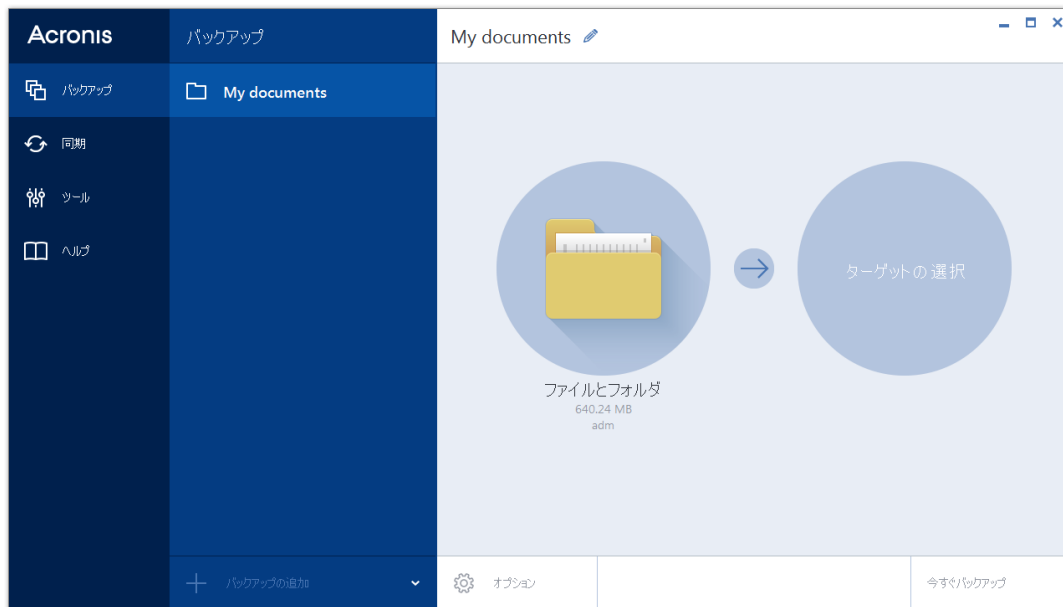
3.2 ファイルやフォルダのバックアップ

ドキュメント、写真、音楽のファイル、ビデオのファイルなどのファイルを保護するために、ファイルを含むパーティション全体をバックアップする必要はありません。特定のファイルやフォルダをバックアップできます。

ファイルやフォルダをバックアップするには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image 2015 Personal を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. 新しいバックアップを追加するには、バックアップ一覧の下部にあるプラス記号をクリックし、バックアップの名前を入力します。
4. **[バックアップ ソース]** アイコンをクリックし、**[ファイルとフォルダ]** を選択します。

5. 表示されたウィンドウで、バックアップするファイルやフォルダの横にあるチェックボックスをオンにし、**[OK]** をクリックします。

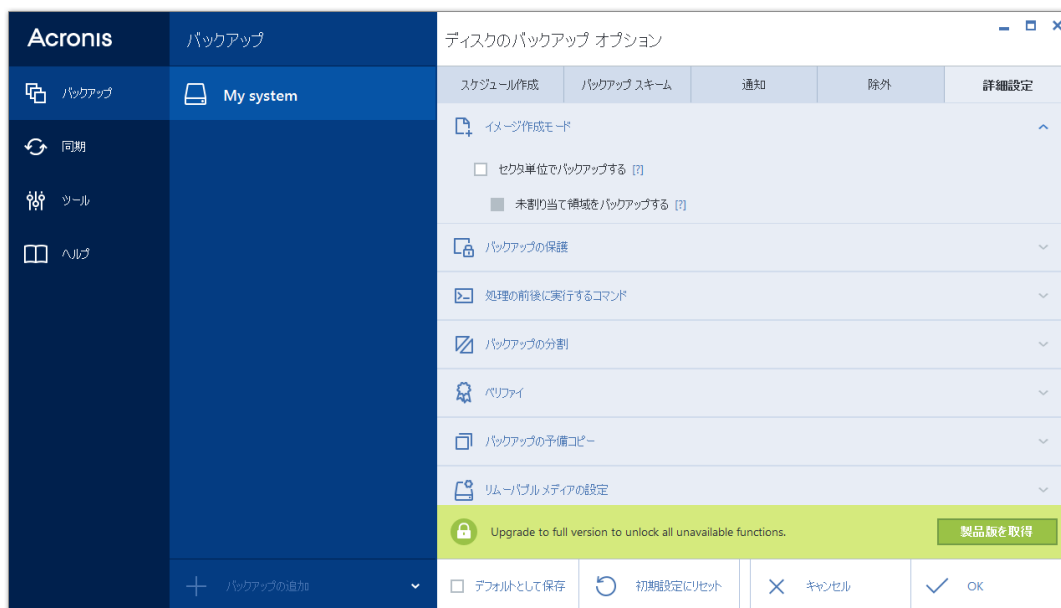


6. **[バックアップの保存先]** アイコンをクリックし、バックアップの保存先を選択します。
- **外付けドライブ:** 外付けドライブがコンピュータに接続されている場合は、リストからそのドライブを選択できます。
 - **参照:** フォルダ ツリーから保存先を選択します。
7. (オプションの手順) バックアップのオプションを設定するには、**[オプション]** をクリックします。詳細については、「バックアップ オプション 『20ページ』」を参照してください。
8. 次のいずれかを実行します。
- 今すぐバックアップを実行するには、**[バックアップの開始]** をクリックします。
 - 後で、あるいはスケジュールに基づいてバックアップを実行するには、**[バックアップの開始]** ボタンの右側にある下向き矢印をクリックし、**[後で実行]** をクリックします。

3.3 バックアップ オプション

[ディスク バックアップ オプション]、**[ファイル バックアップ オプション]**、**[電子メールのバックアップ オプション]**、**[ノンストップ バックアップ オプション]**、および **[オンラインバックアップのオプション]** のウィンドウで、それぞれ、ディスクとパーティション、ファイル、電子メール、ノンストップ、およびオンラインのバックアップ処理のオプションを設定できます。オプションのウィンドウを開くには、該当するリンクをクリックします。

アプリケーションをインストールすると、すべてのオプションは初期値に設定されます。これらのオプションは、現在のバックアップ処理のためだけに変更することも、今後のすべてのバックアップ向けに変更することも可能です。**[設定をデフォルトとして保存する]** チェックボックスをオンにすると、変更した設定が今後のバックアップ作業すべてにデフォルトで適用されます。



それぞれのバックアップのオプションは完全に独立しているため、これらは個別に設定する必要がある点にご注意ください。

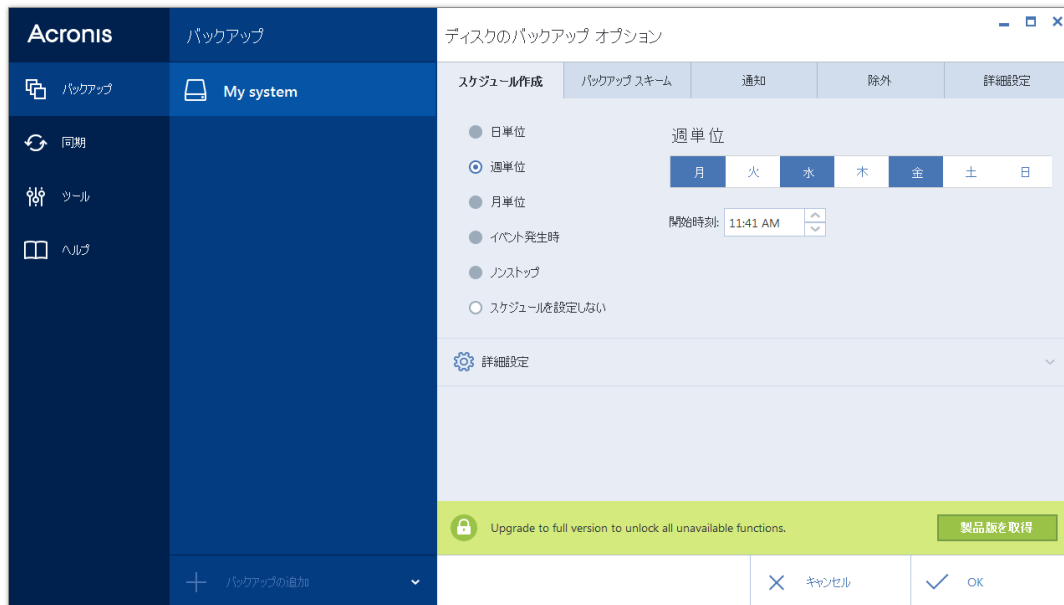
製品の初回インストール後に変更したオプションをすべてリセットする場合は、**[初期設定にリセット]** ボタンをクリックします。

セクションの内容

スケジュール設定.....	22
バックアップ スキーム.....	23
バックアップ処理の通知.....	26
イメージ作成モード.....	27
バックアップの保護.....	28
バックアップ処理前後に実行するコマンド.....	28
バックアップの分割.....	29
バックアップのベリファイ オプション.....	30
バックアップの予備コピー.....	30
リムーバブル メディアの設定.....	31
バックアップのコメント.....	31
エラー処理.....	31
バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定.....	32
コンピュータのシャットダウン.....	33
バックアップ処理のパフォーマンス.....	33

3.3.1 スケジュール設定

【スケジュール】タブを使用すると、バックアップを指定し、スケジュール設定をベリファイできます。



バックアップおよびベリファイ実行の間隔を、次のいずれかから選択して設定できます。

- **【週単位】** 『23ページ』: 処理は 1 週間に 1 回、または 1 週間に複数回、指定した曜日に実行されます。
- **【スケジュールを設定しない】**: 現在の処理に対してスケジューラがオフになります。この場合、バックアップやベリファイはそれぞれ、メイン ウィンドウで **【今すぐバックアップ】** または **【ベリファイ】** をクリックした場合にのみ実行されます。

詳細設定

【詳細設定】をクリックすると、バックアップおよびベリファイの次の追加設定を指定できます。

- スケジュールされた処理の実行を、コンピュータが使用中でない状態（スクリーンセーバーが表示される、またはコンピュータがロックされている状態）になるまで延期するには、**【コンピュータのアイドル時にのみバックアップを実行】** チェックボックスをオンにします。ベリファイのスケジュールを設定すると、チェックボックスが **【コンピュータのアイドル時にのみベリファイを実行する】** に変化します。
- スリープ/休止状態のコンピュータを起動して、スケジュールされた処理を実行するには、**【スリープ/休止状態のコンピュータを起動】** チェックボックスをオンにします。
- スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合、処理は実行されません。実行されなかった処理は、次のシステム起動時に強制的に実行することができます。そのように設定するには、**【システム起動時に遅延して実行（分単位）】** チェックボックスをオンにします。

さらに、システムを起動して一定時間後にバックアップを開始するために、時間遅延を設定できます。たとえば、システム起動の 20 分後にバックアップを開始するには、該当するボックスに「20」と入力します。

- USB フラッシュ ドライブへのバックアップ、または USB フラッシュ ドライブに存在するバックアップのベリファイを設定すると、もう 1 つのチェックボックス、**[現在のターゲット デバイスが接続されている場合に実行]** が表示されます。チェックボックスをオンにすると、スケジュールした時刻に USB フラッシュ ドライブが接続されていなかったために実行されなかった処理を、USB フラッシュ ドライブが接続されたときに実行することができます。
- リムーバブル メディア（たとえば、USB フラッシュ ドライブ）またはリモート ストレージ（たとえば、ネットワーク フォルダまたは NAS）にあるデータを定期的にバックアップする場合、**[現在のソース デバイスが接続されている場合に実行]** チェックボックスをオンにすることをお勧めします。バックアップの予定時間に、外部のストレージ デバイスが利用できないことも多いため、この設定は便利です。この場合、チェックボックスをオンにすると、デバイスが接続または取り付けられた時点で、予定されていたバックアップ処理が開始されます。
- **[HDD アラーム発生時にバックアップを実行]**（Acronis Drive Monitor がインストールされている場合に使用可能）：有効にすると、バックアップ元に含まれているいずれかのハード ディスクで考えられる問題が発生し、Acronis Drive Monitor のアラームがオンになるとすぐにバックアップが実行されます。Acronis Drive Monitor は、ハード ドライブの S.M.A.R.T. レポート、Windows のログ、および独自のスクリプト情報に基づいた、ハード ドライブの状態監視ユーティリティです。

3.3.1.1 週単位の実行パラメータ

週単位の処理の実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **曜日**
処理の名前をクリックして、処理を実行する日を選択します。
- **開始時刻**
処理の開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。

[詳細設定] の説明については、「スケジュール設定 『22ページ 』」を参照してください。

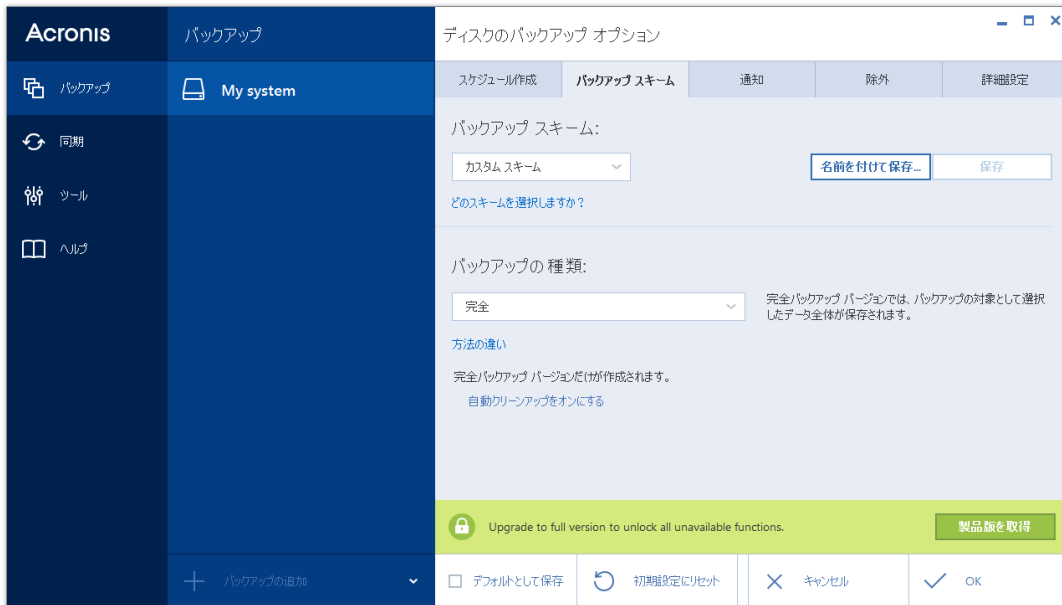
3.3.2 バックアップ スキーム

バックアップ スキームとスケジューラを使用して、バックアップ戦略を設定できます。このスキームを使用することで、バックアップ ストレージ領域の使用を最適化し、データ ストレージの信頼性を向上させ、使用しなくなったバックアップ バージョンを自動的に削除することができます。

バックアップ スキームでは、以下のパラメータを定義します。

- バックアップ バージョン作成の際に使用するバックアップ方法
- 別の方法で作成したバックアップ バージョンのシーケンス

■ バージョンのクリーンアップ ルール



Acronis True Image 2015 Personal で選択可能なバックアップ スキームは次のとおりです。

- **単一バージョン** 『24ページ』：最小限のバックアップ ストレージを使用する場合にこのスキームを選択します。
- **カスタム** 『24ページ』：バックアップ スキームを手動で設定する場合は、この項目を選択します。

3.3.2.1 単一バージョン スキーム

このスキームでは完全なバックアップ バージョンが作成されます。このバージョンは、指定したスケジュール時間や手動バックアップの実行時に上書きされます。

ディスク バックアップのバックアップ スケジューラ設定: 週単位

結果: 単一で最新の完全バックアップ バージョンが作成されます。

必要なストレージ領域: 最小

3.3.2.2 カスタム スキーム

Acronis True Image 2015 Personal を使用すると、独自のバックアップ スキームを作成できます。事前定義されたバックアップ スキームに基づいてスキームを作成することもできます。事前定義されたスキームを選択して自身の要件に合わせて変更し、その変更後のスキームを新しいものとして保存します。

既存の事前定義されたバックアップ スキームは、上書きできません。

したがって、まず該当のボックスでバックアップ方法を 1 つ選択してください。

- **完全** 『12ページ』
完全バックアップ バージョンのみを作成する場合は、この方法を選択します。

自動クリーンアップのルール

使用しなくなったバックアップ バージョンを自動的に削除するには、以下のクリーンアップ ルールのうちの 1 つを設定します。

- **[次の期間が経過したバージョンを削除する [定義した期間]]** (完全バックアップの場合のみ使用可能) : バックアップ バージョンの保存期間を限定する場合は、このオプションを選択します。指定した期間を超過したバージョンは、すべて自動的に削除されます。
- **[最長保存期間: [n] バージョン (新しい順)]** (完全バックアップの場合のみ使用可能) : バックアップ バージョンの最大数を制限する場合は、このオプションを選択します。バージョン数が指定値を超えると、最も古いバックアップ バージョンが自動的に削除されます。
- **[バックアップのサイズを次のサイズ以下に保つ [定義したサイズ]]**: バックアップの最大サイズを制限する場合は、このオプションを選択します。新しいバックアップ バージョンが作成された後に、バックアップの合計サイズが、指定した値を超えているかどうかを確認されます。指定した値を超えている場合は、古いバックアップ バージョンが削除されます。

最初のバックアップ バージョンのオプション

バックアップの最初のバージョンは多くの場合、最も重要なバージョンの 1 つです。このバージョンには、初期のデータ状態 (最近インストールした Windows のシステム パーティションなど) や、その他の安定したデータ状態 (ウイルス チェック完了後のデータなど) が保存されるためです。

[バックアップの最初のバージョンは削除しない]: 初期のデータ状態を維持する場合は、このチェックボックスをオンにします。最初の完全バックアップ バージョンが 2 つ作成されます。最初のバージョンは自動クリーンアップから除外され、手動で削除するまで保存されます。

このチェックボックスをオンにすると、**[最長保存期間: [n] バージョン (新しい順)]** チェックボックスが、**[最長保存期間: 1+[n] バージョン (新しい順)]** に変わります。

カスタム バックアップ スキームの管理

既存のバックアップ スキームに何らかの変更を加えた場合、変更したスキームを新しいものとして保存できます。その場合、そのバックアップ スキームに新しい名前を指定する必要があります。

- 既存のカスタム スキームを上書きすることもできます。
- 既存の事前定義されたバックアップ スキームは、上書きできません。
- スキーム名には、その OS でファイル名に使用できるすべての文字 (記号) を使用できます。バックアップ スキーム名の最大長は、255 文字です。
- カスタム バックアップ スキームは、最高 16 個まで作成できます。

カスタム バックアップ スキームを作成した後は、バックアップを設定するときに他の既存のバックアップ スキームと同様に使用できます。

また、カスタム バックアップ スキームを保存しないで使用することもできます。その場合は、作成したときのバックアップでのみ使用され、他のバックアップには使用できません。

カスタム バックアップ スキームがなくなってきた場合は、削除できます。バックアップ スキームを削除するには、バックアップ スキームのリストで削除するスキームを選択し、**[削除]** をクリックして、確認ウィンドウで再度 **[スキームの削除]** をクリックします。

3.3.3 バックアップ処理の通知

バックアップまたはリカバリの処理には 1 時間以上かかる場合があります。Acronis True Image 2015 Personal では、この処理の終了時に電子メールの通知を受け取ることができます。また、処理中に発行されたメッセージや、処理完了後の詳細な処理ログも送信されます。

デフォルトでは、すべての通知は無効になっています。

空きディスク領域のしきい値

バックアップ ストレージの空き領域が指定したしきい値より少なくなったときに、通知を受け取ることができます。バックアップの開始後、選択したバックアップの場所の空き領域がその時点で既に指定値より少ないことが検出された場合、Acronis True Image 2015 Personal では実際のバックアップ処理は開始されず、対応する通知メッセージが直ちに表示されます。メッセージには 3 つの選択肢が示されます。メッセージを無視してバックアップを続行するか、バックアップを保存する別の場所を参照するか、バックアップをキャンセルするかのいずれかを選択してください。

バックアップの実行中に空き領域が指定値より少なくなった場合も、同じメッセージが表示され、同様に選択する必要があります。

空きディスク領域のしきい値を設定する手順は、次のとおりです。

- **[ディスクの空き領域が不十分なときに通知メッセージを表示する]** チェックボックスをオンにします。
- **[サイズ]** ボックスでしきい値を入力または選択し、単位を選択します。

Acronis True Image 2015 Personal では、次のストレージ デバイスの空き領域を監視できます。

- ローカル ハード ドライブ
- USB カードおよびドライブ
- ネットワーク共有 (SMB/NFS)

[エラー処理] 設定で **[処理中にメッセージやダイアログを表示しない (サイレント モード)]** チェックボックスがオンになっている場合、メッセージは表示されません。

FTP サーバーと CD/DVD ドライブについては、このオプションを有効にすることはできません。

電子メールによる通知

メール通知の送信に使用するメール アカウントを指定することができます。

メール通知を設定するには:

1. **[処理状態に関する電子メール通知を送信する]** チェックボックスを選択します。
2. 電子メールを設定します。
 - **[宛先]** フィールドに電子メール アドレスを入力します。複数の電子メール アドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
 - 送信メール サーバー (SMTP) を **[送信メール サーバー (SMTP)]** フィールドに入力します。

- 送信メール サーバーのポート番号を設定します。デフォルトの場合、ポート番号は 25 に設定されます。
 - 必要に応じて、**[SMTP 認証]** チェック ボックスを選択し、対応するフィールドにユーザー名とパスワードを入力します。
3. 設定が正しいかどうかをチェックするには、**[テスト メッセージを送信する]** ボタンをクリックします。

テスト メッセージの送信に失敗した場合は、以下を実行します。

1. **[拡張設定を表示]** をクリックします。
2. 追加の電子メール設定を行います。
 - **[差出人]** フィールドに電子メール送信者のアドレスを入力します。指定するアドレスが不明な場合は、たとえば、*aaa@bbb.com* のような標準形式で任意のアドレスを入力します。
 - 必要に応じて、**[件名]** フィールドのメッセージの件名を変更します。
 - **[受信メール サーバーにログオンする]** チェック ボックスをオンにします。
 - 受信メール サーバー (POP3) を **[POP3 サーバー]** フィールドに入力します。
 - 受信メール サーバーのポート番号を設定します。デフォルトの場合、ポート番号は 110 に設定されます。
3. **[テスト メッセージを送信する]** ボタンをもう一度クリックします。

その他の通知設定

- 処理の完了に関する通知を送信するには、**[処理が正常に完了したら通知を送信する]** チェック ボックスをオンにします。
- 処理の失敗に関する通知を送信するには、**[処理が失敗したら通知を送信する]** チェック ボックスをオンにします。
- 処理メッセージを添付して通知を送信するには、**[ユーザーの操作が必要な場合に通知を送信する]** チェック ボックスをオンにします。
- 処理の詳細なログを添付して通知を送信するには、**[完全なログを通知に含める]** チェック ボックスをオンにします。

3.3.4 イメージ作成モード

これらのパラメータを使用して、データが含まれるセクタと、パーティションまたはハードディスク全体のコピーを作成できます。たとえば、True Image がサポートしていないオペレーティング システムが含まれているパーティションまたはディスクをバックアップする場合に便利なことがあります。このモードでは、より多くの処理時間がかかり、通常より大きいイメージ ファイルが作成されます。

- セクタ単位のイメージを作成するには、**[セクタ単位でバックアップする]** チェック ボックスをオンにします。
- ディスクのすべての未割り当ての領域をバックアップに含めるには、**[未割り当て領域をバックアップする]** チェック ボックスをオンにします。

このチェック ボックスは、**[セクタ単位でバックアップする]** チェック ボックスがオンの場合にのみ使用できます。

3.3.5 バックアップの保護

バックアップ ファイルをパスワードで保護することができます。デフォルトでは、バックアップはパスワードで保護されません。

既に存在するバックアップについてパスワードを設定または変更することはできません。

バックアップを保護する手順は、次のとおりです。

1. バックアップ用のパスワードを **[パスワード]** フィールドに入力します。パスワードはできる限り想像しにくいものにするため、8 文字以上の、アルファベット（大文字と小文字の両方を使用することが望ましい）と数字を含むものにしてください。

パスワードを取得することはできません。バックアップの保護に指定したパスワードは記憶してください。

2. **[確認]** フィールドに、先に入力したパスワードをもう一度入力します。
3. （任意の手順）機密データの安全性を高めるため、業界標準の強力な AES（Advanced Encryption Standard）暗号化アルゴリズムを使用してバックアップを暗号化することもできます。AES には、パフォーマンスと保護強度に応じて、キーの長さが 3 種類あり（128、192、256 ビット）、いずれかを選択できます。

ほとんどの場合は、暗号キーの長さは 128 ビットで十分です。キーが長いほど、データのセキュリティは向上します。ただし、192 ビットや 256 ビットの長さのキーを使用すると、バックアップ処理の速度が大幅に低下します。

AES 暗号を使用する場合は、以下のキーのいずれかを選択します。

- **[AES 128]:** 128 ビット暗号キーを使用します。
- **[AES 192]:** 192 ビット暗号キーを使用します。
- **[AES 256]:** 256 ビット暗号キーを使用します。

バックアップを暗号化せず、パスワードによる保護のみを行う場合は、**[暗号化しない]** を選択します。

4. バックアップの設定値を指定したら、**[OK]** をクリックします。

パスワードで保護されたバックアップにアクセスするには

True Image は、バックアップを変更するたびにパスワードを要求します。

- バックアップからデータをリカバリします
- 設定の編集
- 削除
- マウント
- 移動

バックアップにアクセスするには、正しいパスワードを指定する必要があります。

3.3.6 バックアップ処理前後に実行するコマンド

バックアップ処理の前後に自動的に実行するコマンド（またはバッチ ファイル）を指定することができます。

たとえば、バックアップを開始する前に特定の Windows プロセスを開始/停止することや、バックアップ対象のデータを調べることができます。

コマンド (バッチ ファイル) を指定する手順は、次のとおりです。

- バックアップ処理の開始前に実行するコマンドを **【処理前に実行するコマンド】** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**【編集】** ボタンをクリックします。
- バックアップ処理の終了後に実行するコマンドを **【処理後に実行するコマンド】** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**【編集】** ボタンをクリックします。

ユーザーの入力を必要とする対話型のコマンド (pause など) は実行しないでください。これらのコマンドは、サポートされていません。

3.3.6.1 バックアップ用ユーザー コマンドの編集

バックアップ処理の前または後に実行するユーザー コマンドを指定することができます。

- コマンドを **【コマンド】** フィールドに入力するか、一覧から選択します。**【...】** をクリックすると、バッチ ファイルを選択できます。
- **【作業ディレクトリ】** フィールドに、コマンド実行のためのパスを入力するか、入力済みのパスの一覧から選択します。
- コマンド実行引数を **【引数】** フィールドに入力するか、一覧から選択します。

【コマンドの実行が完了するまで処理を行わない】 パラメータを無効にすると (デフォルトでは有効)、コマンド実行と並行してバックアップ処理を実行できます。

【ユーザー コマンドが失敗したら処理を中止する】 パラメータを有効にした場合は (デフォルトでは有効)、コマンド実行でエラーが発生すると処理が中止されます。

入力したコマンドをテストするには、**【コマンドのテスト】** ボタンをクリックします。

3.3.7 バックアップの分割

Acronis True Image 2015 Personal では、既存のバックアップを分割することはできません。バックアップの分割は作成時のみ可能です。

サイズの大きいバックアップを、元のバックアップを構成するいくつかのファイルに分割することができます。また、リムーバブル メディアに書き込めるようにバックアップを分割することもできます。

デフォルトの設定は **【自動】** です。この設定を使用すると、Acronis True Image 2015 Personal は次のように動作します。

ハードディスクにバックアップする場合:

- 選択したディスクに十分な空き領域があり、予想ファイル サイズがファイル システムの許容範囲内である場合は、1 つのバックアップ ファイルを作成します。
- ストレージディスクに十分な空き領域があっても、予想ファイル サイズがファイル システムの許容範囲を超える場合、プログラムは自動的にイメージを複数のファイルに分割します。

- ハードディスクに、イメージを保存するだけの十分な空き領域がない場合、プログラムは警告を表示し、問題への対処方法の入力を求めます。空き領域を増やして続行するか、別のディスクを選択することができます。

CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、および BD-R/RE にバックアップする場合:

- 前のディスクがいっぱいになると、Acronis True Image 2015 Personal によって新しいディスクを挿入するように指示されます。

また、ドロップダウン リストからファイル サイズを選択することもできます。バックアップは、指定したサイズの複数のファイルに分割されます。後で CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、または BD-R/RE にバックアップを書き込むためにハードディスクにバックアップを保存する場合には、この機能が役立ちます。

CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、および BD-R/RE に直接イメージを作成すると、ハードディスクに作成するよりも大幅に時間がかかる場合があります。

3.3.8 バックアップのベリファイ オプション

[作成後にバックアップをベリファイする] で、追加の検証設定を指定できます。

このオプションを有効にすると、バックアップの直後に、最近作成または追加したバックアップ バージョンの整合性がチェックされます。重大なデータのバックアップ、またはディスク/パーティションのバックアップを設定するときには、バックアップを使用して消失したデータを確実にリカバリできるように、このオプションを有効にすることをお勧めします。

標準ベリファイ

バックアップが正常な状態であることを確認するために、バックアップのベリファイをスケジュールすることも可能です。デフォルトでは、標準ベリファイは次の設定でオンになります。

- 間隔: 週 1 回
- 日付: バックアップが開始された日
- 時間: バックアップが開始された時間 + 15 分
- 詳細設定: **[コンピュータのアイドル時にのみベリファイを実行]** チェックボックスがオン

デフォルト設定を変更して、独自のスケジュールを指定することもできます。詳細については、「スケジュール設定 『22ページ』」を参照してください。

3.3.9 バックアップの予備コピー

バックアップの予備コピーを作成して、ファイル システムまたはネットワーク ドライブに保存できます。

予備コピーを作成する手順は、次のとおりです。

- **[バックアップの予備コピーを作成する]** チェックボックスをオンにします。
- **[場所の設定...]** をクリックし、バックアップ コピーの場所を指定します。

すべてのバックアップ オプション (バックアップの圧縮、バックアップの分割など) がソース バックアップから継承されます。

予備コピーには、バックアップとして選択したすべてのデータが常に含まれます。つまり、予備コピーを作成する場合は常にソース データの完全バックアップが作成されます。

また、通常のバックアップと予備コピーは、両方同時ではなくどちらか一方しか実行できないので、利便性とデータ セキュリティが向上するかわりに、バックアップにかかる時間が増えます。

3.3.10 リムーバブル メディアの設定

次の設定を使用できます。

- **リムーバブル メディアにバックアップを作成する際に最初のメディアの挿入を求める**
リムーバブル メディアにバックアップする際に、[最初のメディアを挿入してください] というメッセージを表示するかどうかを選択できます。デフォルトの設定では、メッセージ ボックスの [OK] がクリックされるまでプログラムの実行が停止するので、ユーザーがその場にいなければリムーバブル メディアへのバックアップはできません。したがって、リムーバブル メディアへのバックアップをスケジュールする場合は、応答を要求するメッセージ表示を無効にする必要があります。こうしておくで、リムーバブル メディアが利用可能 (CD-R/RW が挿入されているなど) であれば、バックアップを無人で実行できます。

他の Acronis 製品がコンピュータにインストールされている場合は、それらのプログラムのコンポーネントのブータブル版も同様に利用できます。

3.3.11 バックアップのコメント

このオプションを使用すると、バックアップに対してコメントを追加できます。バックアップのコメントは、ブータブル メディアを使用してデータをリカバリするときなど、あとで必要なバックアップを検索するときに役立つことがあります。

バックアップにコメントがない場合、コメント領域にコメントを入力します。コメントが既に存在している場合は、**[編集]** をクリックするとそのコメントを編集できます。

3.3.12 エラー処理

バックアップの実行中にエラーが発生した場合は、バックアップ処理が中止されてメッセージが表示され、エラーへの処理に関するユーザーからの応答を待つ状態になります。エラーへの処理方法を設定しておくで、バックアップ処理は中止されず、設定した規則に従ってエラーが対処されて、処理は継続されます。

以下のエラー処理方法を設定することができます。

- **[処理中にメッセージやダイアログを表示しない (サイレント モード)]**: この設定を有効にすると、バックアップ処理中のエラーが無視されます。バックアップ処理を制御できない場合に便利です。バックアップ プロセスの終了後にすべての処理の詳細ログを表示できます。
- **[不良セクタを無視する]**: このオプションは、ディスクとパーティションのバックアップの場合のみ使用できます。このオプションを有効にすると、ハード ディスク上に不良セクタがある場合でもバックアップを正常に完了できます。

たとえば次のような場合など、ハード ディスクが故障しかかっている場合に、このチェック ボックスをオンにすることをお勧めします。

- ハード ディスク ドライブの動作中にかなり大きなクリック音や摩擦音が発生している場合。
- S.M.A.R.T. システムによってハード ディスク ドライブの問題が検出され、可能な限り早くドライブをバックアップするよう促された場合。

このチェック ボックスをオフのままにした場合、ドライブ上に不良セクタがあると考えられるためにバックアップが失敗することがあります。

- **[Acronis セキュア ゾーンに十分な空き領域がない場合、最も古いバックアップを削除する]** (デフォルトの設定は有効) : スケジュールに従った Acronis セキュア ゾーンへの無人バックアップを計画する場合は、このチェック ボックスをオンにしておくことをお勧めします。オンにしないと、バックアップ中に Acronis セキュア ゾーン が満杯の場合に、True Image のバックアップが中断され、ユーザーの操作が必要になります。このメッセージは、**[処理中にメッセージやダイアログを表示しない (サイレント モード)]** 設定が有効な場合にも表示されます。
- **[バックアップが失敗した場合は再試行する]**: このオプションを指定すると、何らかの理由でバックアップが失敗したときにバックアップが自動的に再試行されます。試行回数および試行間隔を指定できます。バックアップが繰り返しエラーで中断される場合は、バックアップは作成されません。

データを **USB フラッシュ ドライブ**または **USB ハード ディスク ドライブ**にバックアップしたときは、このオプションを利用できません。

3.3.13 バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定

ファイルのバックアップに関するセキュリティ設定を指定することができます (これらの設定が関係するのはファイル/フォルダのバックアップだけです)。

- **[バックアップにファイルのセキュリティ設定を保持する]**: このオプションを選択すると、バックアップ ファイルのすべてのセキュリティ プロパティ (グループまたはユーザーに割り当てられる許可) が、将来のリカバリに備えて保存されます。

デフォルトでは、ファイルとフォルダは元の Windows セキュリティ設定 (ファイルの **[プロパティ]->[セキュリティ]** で設定される、各ユーザーまたはユーザー グループに与えられる書き込み、読み取り、実行などの許可) と共にバックアップに保存されます。セキュリティで保護されたファイルまたはフォルダをコンピュータ上でリカバリしようとしているユーザーに、アクセス許可が与えられていない場合は、そのファイルの読み取りや変更ができなくなる可能性があります。

このような問題を回避するため、バックアップの際にファイルのセキュリティ設定を保存するのを無効にすることができます。このようにすれば、リカバリされたファイル/フォルダのアクセス許可は常に、リカバリ先のフォルダ (親フォルダ、ルートにリカバリされる場合は親ディスク) から継承されます。

または、ファイルのセキュリティ設定をリカバリ時に無効化できます。これは、ファイルのセキュリティ設定がバックアップに保存されている場合でも可能です。結果は同じになります。

- **[暗号化されたファイルを暗号解除された状態でバックアップに格納する]** (デフォルト設定は [無効]) : バックアップに暗号化ファイルが含まれており、リカバリ後にそのファイルをすべてのユーザーからアクセス可能にしたい場合は、このオプションをオンにします。オフにすると、ファイル/フォルダを暗号化したユーザーのみがそのファイル/フォル

ダを読むことができます。暗号化されたファイルを別のコンピュータにリカバリする場合にも、暗号化解除が役立つことがあります。

Windows XP 以降のオペレーティング システムで利用可能な暗号化機能を使用しない場合は、このオプションは無視してください。ファイル/フォルダの暗号化を設定するには、**[プロパティ]->[全般]->[詳細設定]->[内容を暗号化してデータをセキュリティで保護する]** の順に選択します。

これらのオプションは、ファイルやフォルダのバックアップのみに関係します。また、これらは zip バックアップには利用できません。

3.3.14 コンピュータのシャットダウン

設定するバックアップ処理に時間がかかることがわかっている場合は、**[バックアップの完了後にコンピュータをシャットダウンする]** チェック ボックスをオンにすることをお勧めします。これにより、処理が完了するまで待つ必要がなくなります。プログラムはバックアップを実行し、自動的にコンピュータの電源を切ります。

このオプションは、バックアップのスケジュールを設定する場合にも便利です。たとえば、すべての作業を保存するには、平日の夕方に毎日バックアップを実行できます。バックアップのスケジュールを設定して、チェック ボックスをオンにします。この設定の場合、仕事が完了したら、そのままコンピュータから離れることができます。なぜなら、重要なデータがバックアップされ、コンピュータの電源が切られることがわかっているからです。

3.3.15 バックアップ処理のパフォーマンス

[パフォーマンス] タブでは、以下の設定を行うことができます。

圧縮レベル

バックアップの圧縮レベルを選択することができます。

- **[なし]**- データが圧縮されずにコピーされるため、バックアップ ファイルのサイズは非常に大きくなります。
- **[標準]**- 推奨されるデータ圧縮レベルです（デフォルト設定）。
- **[高]**- バックアップ ファイルが高い圧縮レベルで圧縮されるため、バックアップの作成に要する時間が長くなります。
- **[最大]**- バックアップは最大圧縮レベルで圧縮されるため、バックアップの作成に要する時間が最も長くなります。

最適なデータ圧縮レベルは、バックアップに保存されるファイルの種類によって異なります。たとえば、.jpg、.pdf、.mp3 など、既に圧縮されたファイルを含むバックアップは、最大圧縮レベルで圧縮してもバックアップ サイズが大幅に縮小されることはありません。

処理の優先順位

バックアップ処理やリカバリ処理の優先度を変更すると、（優先度の上げ下げによって）バックアップの処理速度を速くしたり遅くしたりできますが、実行中の他のプログラムのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性もあります。システムで実行中のどの処理に対しても、優先順位に応じて、その処理に割り当てられる CPU の使用時間とシステム リソースが決定されます。処理の優先度を下げることによって、他の CPU タスクが使用できるリソースが増えま

す。バックアップやリカバリの優先度を上げると、同時に実行している他の処理からリソースを取得するため、バックアップ処理の速度が向上します。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

処理の優先度は、次のいずれかに設定することができます。

- **[低]** (デフォルトで有効) - バックアップ処理やリカバリ処理の速度は低下しますが、他のプログラムのパフォーマンスは向上します。
- **[標準]** - バックアップ処理やリカバリ処理に、他の処理と同じ優先度が割り当てられます。
- **[高]** - バックアップ処理やリカバリ処理の速度は向上しますが、他のプログラムのパフォーマンスは低下します。このオプションを選択すると、Acronis True Image 2015 Personal による CPU 使用率が 100% になる場合があるので注意してください。

ネットワーク接続速度の上限

ネットワーク ドライブまたは FTP にデータをバックアップすると、True Image が使用する接続がコンピュータのその他のネットワーク接続に及ぼす影響を軽減することができます。速度の低下を気にすることなくインターネットやネットワーク リソースを使用できる接続速度を設定します。

接続速度を下げる手順は、次のとおりです。

- **[転送速度の上限]** チェック ボックスをオンにして、適切な値と単位 (キロビット/秒またはメガビット/秒) を指定します。

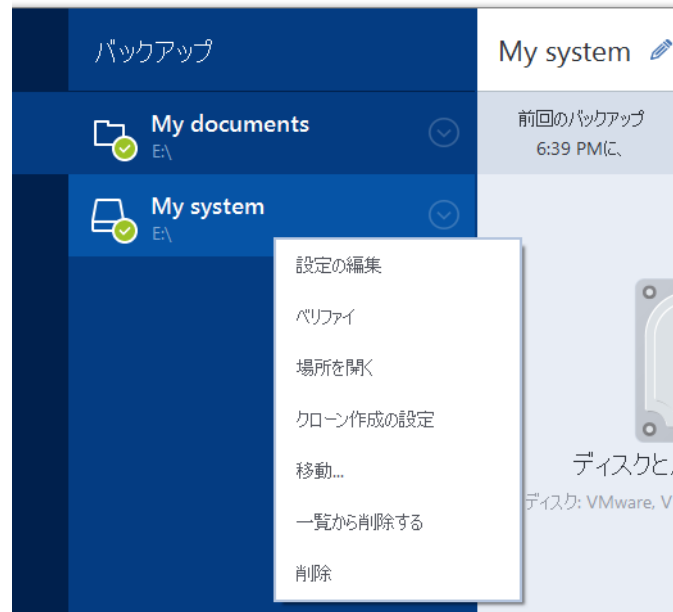
3.4 バックアップの操作

セクションの内容

バックアップ処理メニュー.....	35
バックアップのベリファイ.....	36
バックアップの保存先の分散.....	36
既存のバックアップをリストに追加する.....	38

3.4.1 バックアップ処理メニュー

バックアップ処理メニューからは、選択したバックアップに関して実行できるその他の操作に簡単にアクセスできます。



バックアップ処理メニューには次の項目が含まれる場合があります。

- **[設定の編集]** - 現在のバックアップ設定を編集できます。
- **[再設定]** (バックアップ リストに手動で追加したバックアップの場合) - 以前のバージョンの True Image によって作成されたバックアップの設定が行えます。この項目は、別のコンピュータで作成し、設定をインポートせずにバックアップ リストに追加したバックアップでも表示されます。
バックアップの設定がない場合、**[今すぐバックアップ]** をクリックしてバックアップを更新することはできません。また、バックアップの設定を編集することも、設定のクローンを作成することもできません。
- **[再設定]** (オンライン バックアップの場合) - 選択したオンライン バックアップを現在のコンピュータにバインドできます。そのためには、この項目をクリックし、バックアップの設定を再度行います。1 台のコンピュータでアクティブにできるのは、1 つのオンライン バックアップのみです。
- **[ベリファイ]** - バックアップのベリファイを開始します。
- **[クリーンアップ]** (ノンストップ バックアップでのみ使用できます) - **[クリーンアップ]** ダイアログ ボックスを開きます。このダイアログ ボックスで、不要になったバックアップ バージョンを削除できます。バックアップ チェーンが破損することはありません。
- **[場所を開く]** - バックアップ ファイルが格納されているフォルダを開きます。
- **[設定のクローン作成]** - 初期のバックアップ設定を持つ、**(1) [最初のバックアップの名前]** という名前の新しい空のバックアップ ボックスを作成します。設定を変更して保存し、クローンのバックアップ ボックスで **[今すぐバックアップ]** をクリックします。
- **[移動]** - すべてのバックアップ ファイルを他の保存先に移動します。後続のバックアップ バージョンは新しい場所に保存されます。

バックアップ設定を編集してバックアップの保存先を変更した場合は、新しいバックアップ バージョンのみが新しい場所に保存されます。以前のバックアップ バージョンは、元の場所に残ります。

- **[一覧から削除する]**-[マイ バックアップ] 領域に表示されているバックアップ リストから現在のバックアップを削除します。この操作によって、削除されたバックアップのスケジュール設定が無効になります（スケジュールが設定されていた場合）が、バックアップ ファイルは削除されません。
- **[削除]**- バックアップの種類に応じて、そのロケーションからバックアップを完全に消去したり、バックアップを完全に消去またはバックアップ ボックスのみを削除するかどうかを選択することができます。バックアップ ボックスを削除する場合、バックアップ ファイルはそのロケーションに残り、後でバックアップをリストに追加することができます。バックアップを完全に削除した場合、削除を元に戻すことはできません。

3.4.2 バックアップのベリファイ

バックアップからデータをリカバリできるかどうかを確認するベリファイ処理です。

Windows でのバックアップのベリファイ

バックアップ全体をベリファイする手順は、次のとおりです。

1. Acronis True Image 2015 Personal を起動し、サイドバーの **[バックアップ]** をクリックします。
2. バックアップの一覧からベリファイするバックアップを選択して、**[操作]** をクリックし、**[ベリファイ]** をクリックします。

スタンドアロン バージョンの True Image でのバックアップのベリファイ (ブータブル メディア)

特定のバックアップ バージョンまたはバックアップ全体をベリファイする手順は、次のとおりです。

1. **[リカバリする]** タブで、ベリファイするバージョンを含むバックアップを見つけます。バックアップがリストに表示されていない場合、**[バックアップの参照]** をクリックし、バックアップのパスを指定します。True Image がこのバックアップをリストに追加します。
2. バックアップまたは特定のバージョンを右クリックし、**[ベリファイ]** をクリックします。これで、**ベリファイ ウィザード**が開きます。
3. **[実行]** をクリックします。

3.4.3 バックアップの保存先の分散

注意: ご使用の Acronis True Image 2015 Personal エディションではこの機能は提供されていないことがあります。

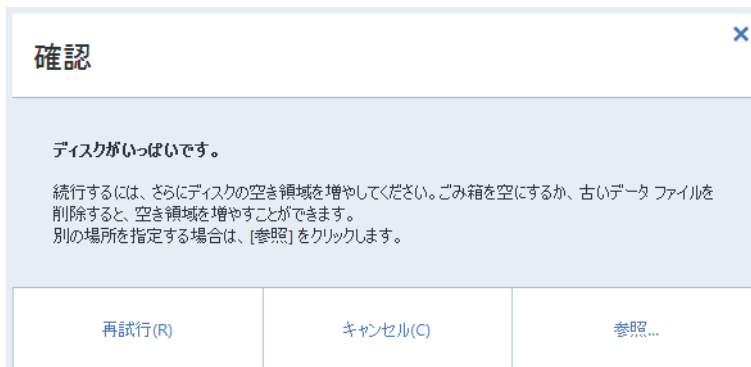
Acronis True Image 2015 Personal では、バックアップの保存先を選択することができます。完全および増分のバックアップ バージョンをそれぞれ別の場所（ネットワーク共有、CD/DVD、USB スティック、ローカルの内蔵ハードディスクまたは外付けのハードディスク ドライブなど）に保存することもできます。

選択したバックアップの設定を編集するときにバックアップの保存先を変更して、バックアップ バージョンをそれぞれ別の場所に保存することができます。たとえば、最初の完全バック

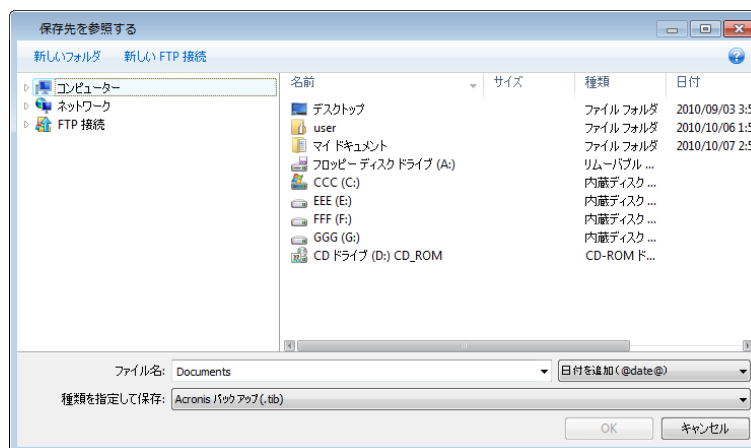
クアッブを外付けの USB ハード ドライブに保存した後に、バックアップの設定を編集して、バックアップの保存先を USB スティックに変更することができます。後続の増分バックアップは、USB スティックに書き込まれます。

同じ「バックアップ チェーン」に属するバックアップ バージョンの一部だけを Acronis セキュア ゾーン に保存することはできません。Acronis セキュア ゾーン に保存されたバックアップ バージョンは、バックアップ自動統合時に自動的に削除されてしまう可能性があるためです。その結果、バックアップのつながりが壊れてしまいます。

この機能の便利な点として、バックアップを「その場で」分割できることが挙げられます。たとえば、ハードディスクへのバックアップを実行しているときに、バックアップ先のハードディスクの空き領域が不足しているためバックアップを完了できないことが判明したとします。ディスクがいっぱいであることを警告するメッセージが表示されます。



バックアップを完了するには、そのディスクの領域の一部を解放してから **[再試行]** をクリックするか、別のストレージ ドライブを選択します。後者の場合は、確認ウィンドウの **[参照...]** をクリックします。**[保存先を参照する]** ウィンドウが表示されます。



左ペインには、このコンピュータから利用可能なストレージの場所が表示されます。適切な場所を選択した後に、残りのバックアップ対象データを保存するファイルの名前を指定します。名前は手動で入力することも（たとえば「tail_end.tib」など）、行の右にあるボタンをクリックして自動的に生成することもできます。その後で **[OK]** をクリックすると、Acronis True Image 2015 Personal によるバックアップが最後まで実行されます。

同一の「バックアップ チェーン」に属するバックアップ バージョンが異なる場所に分散して保存されている場合は、データ リカバリ時に、過去のバックアップ バージョンの場所を指定するための画面が表示されることがあります。この画面は、選択されたバックアップ バ

ージョンの中にリカバリ対象のファイルが含まれていない（または一部しか含まれていない）場合にのみ表示されます。また、この画面は、分割されたバックアップを即座にリカバリする場合にも表示されます。

3.4.4 既存のバックアップをリストに追加する

Acronis True Image バックアップを過去の製品バージョンで作成したり、他のコンピュータからコピーした場合、**Acronis True Image 2015 Personal** を起動するたびに、このようなバックアップに対してコンピュータがスキャンされたり、自動的にバックアップ リストに追加されたりします。

リストに表示されないバックアップについては、手動で追加することができます。

バックアップを手動で追加するには:

1. **[バックアップ]** セクションの **[バックアップの追加]** をクリックして、**[既存のバックアップを追加]** をクリックします。ウィンドウが開き、コンピュータ上に存在するバックアップを参照できます。
2. バックアップ バージョン（.tib ファイル）を選択し、**[追加]** をクリックします。バックアップ全体がリストに追加されます。

4 データのリカバリ

セクションの内容

ディスクとパーティションのリカバリ	39
ファイルとフォルダのリカバリ	54
リカバリ オプション	55
コンピュータを工場出荷時の設定に復元するには	59

4.1 ディスクとパーティションのリカバリ

セクションの内容

クラッシュ後のシステムのリカバリ	39
パーティションとディスクのリカバリ	49
ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームのリカバリについて	50
BIOS での起動順の並び替え	52

4.1.1 クラッシュ後のシステムのリカバリ

コンピュータが起動に失敗した場合、「クラッシュの原因を特定する 『39ページ』」で説明されているヒントを参考にして、まず原因を特定することをお勧めします。クラッシュがオペレーティング システムの破損によって発生した場合は、バックアップを使用してシステムをリカバリします。「リカバリの準備 『40ページ』」を参照して準備を完了し、「システムのリカバリ」の手順に進みます。

4.1.1.1 異常停止の原因を特定する

システムが異常停止する原因には、2 つの基本的な要因があります。

■ ハードウェア障害

この場合は、ハードウェア メーカーのサービス センターに問い合わせることをお勧めします。その前に、いくつかの検査を実行することもできます。ケーブル、コネクタ、外付けデバイスの電源などを確認します。その後、コンピュータを再起動してください。ハードウェアに問題がある場合は、**Power-On Self Test (POST)** を通じて障害が通知されます。

POST によってハードウェア障害が見つからなかった場合、BIOS を開始して、システムのハード ディスク ドライブが認識されているかどうかを確認します。BIOS を開始するには、POST シーケンス中に必要なキーの組み合わせ (**Del** キー、**F1** キー、**Ctrl+Alt+Esc** キー、**Ctrl+Esc** キーなど。ご使用の BIOS によります) を押します。通常は起動テスト中に、必要なキーの組み合わせを示すメッセージが表示されます。このキーの組み合わせを押すと、セットアップ メニューが表示されます。ハード ディスク自動検出ユーティリティを選択します。通常は、「**Standard CMOS Setup**」または「**Advanced CMOS setup**」の下に表示されています。ユーティリティによってシステム ドライブが検出されなかった場合、システム ドライブに障害が発生しているため、ドライブを交換する必要があります。

■ オペレーティング システムの損傷 (**Windows** を起動できない場合)

POST によって、システムのハード ディスク ドライブが正常に検出された場合、異常停止の原因は、ウイルス、マルウェア、または起動に必要なシステム ファイルの破損が考えられます。この場合は、システム ディスクまたはシステム パーティションのバックア

ップを使用してシステムをリカバリしてください。詳細については、「システムのリカバリ 『41ページ 』」を参照してください。

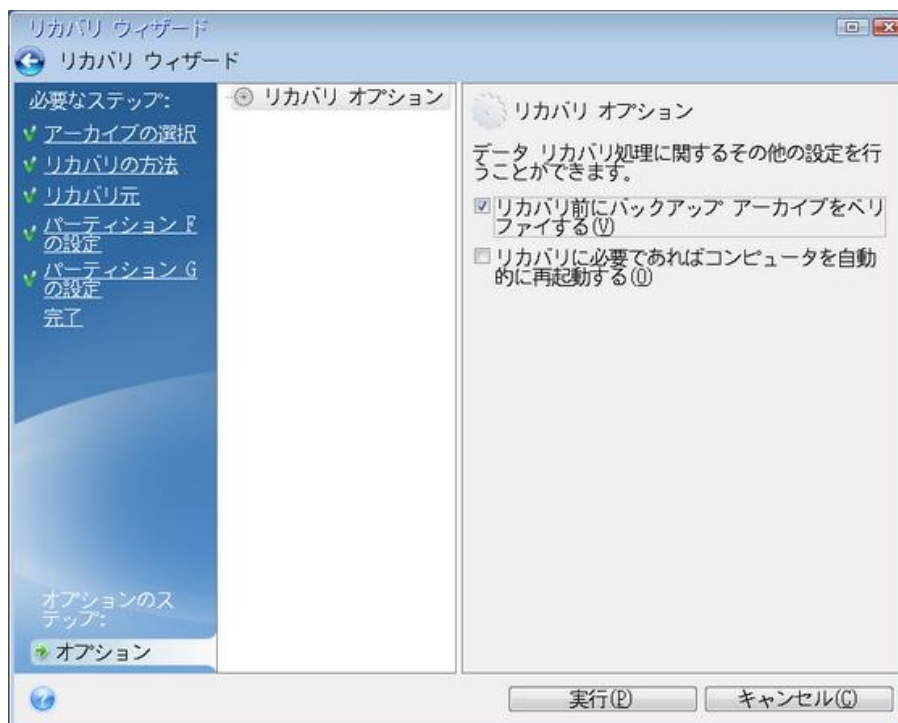
4.1.1.2 リカバリの準備

リカバリの前に以下の操作を実行することをお勧めします。

- ウィルスまたはマルウェア攻撃のためにクラッシュが発生したことが疑われる場合、コンピュータがウイルスに感染しているかどうかスキャンします。
- ブータブル メディアの配下に予備のハード ディスク ドライブがある場合は、予備のハード ディスク ドライブへのテスト リカバリを試します。
- ブータブル メディアの配下でイメージの検証を実行します。Windows での検証中に読み取ることができるバックアップを、Linux 環境でも常に読み取れるとは限りません。

ブータブル メディアでは、バックアップをベリファイする方法が 2 つあります。

- バックアップを手動でベリファイするには、[リカバリ] タブでバックアップを右クリックし、[ベリファイ] を選択します。
- リカバリの前に自動的にバックアップをベリファイするには、リカバリ ウィザードの [オプション] 手順で、[リカバリ前にバックアップ アーカイブをベリファイする] チェック ボックスをオンにします。



- ハード ディスク ドライブのすべてのパーティションに一意的な名前 (ラベル) を割り当てます。これにより、バックアップを含むディスクを見つけることが容易になります。

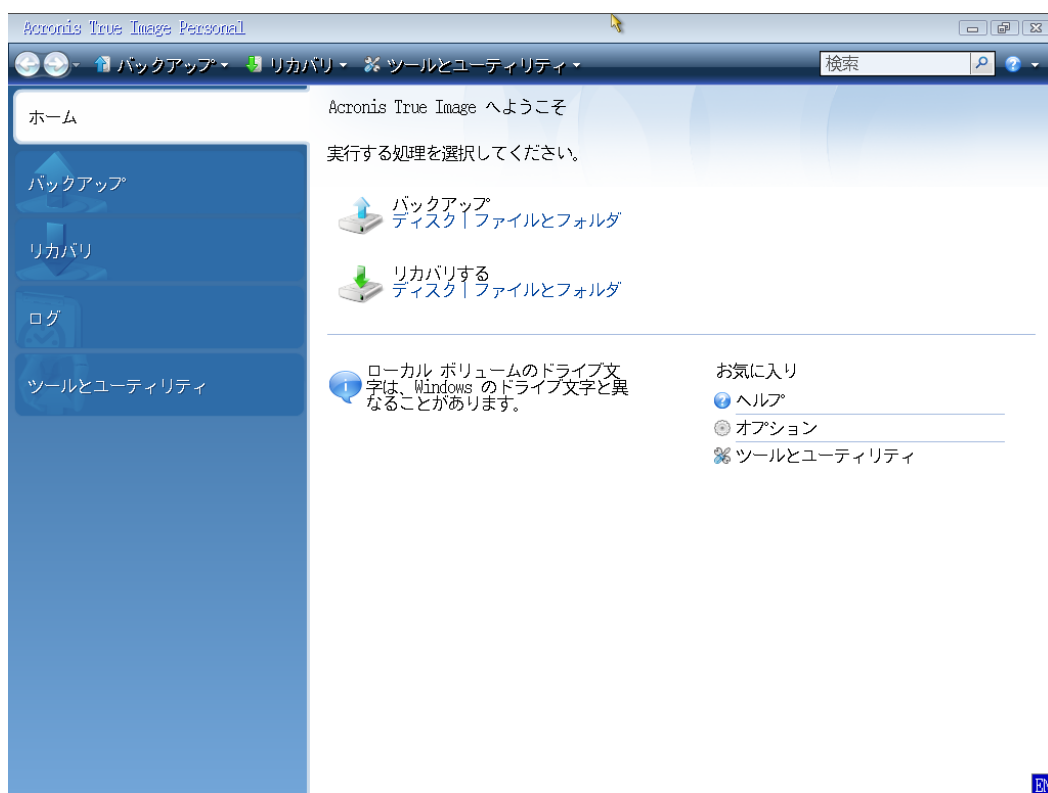
Acronis True Image 2015 のレスキュー メディアを使用すると、Windows でのドライブの識別方法とは異なるディスク ドライブ文字が作成されることがあります。たとえば、スタンドアロン版の Acronis True Image 2015 の D: ディスクが、Windows の E: ディスクに対応していることもあります。

4.1.1.3 同じディスクへのシステムのリカバリ

始める前に、「リカバリの準備 『40ページ』」で説明している手順を実行することをお勧めします。

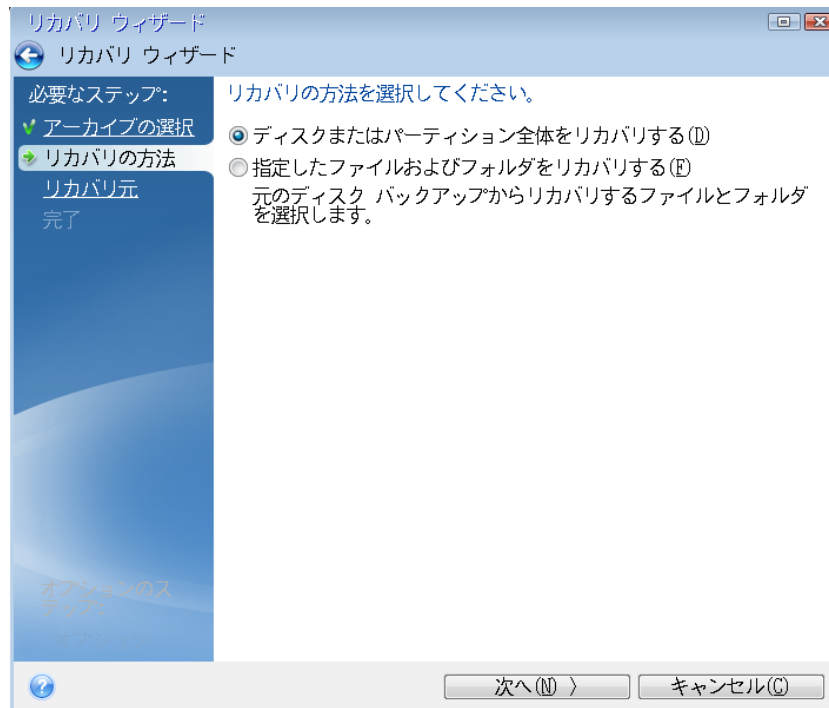
システムをリカバリする手順は、次のとおりです。

1. リカバリに使用するバックアップが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。
2. BIOS で起動順序を設定して、レスキュー メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並べ替え 『52ページ』」を参照してください。
3. レスキュー メディアから起動して、**[True Image]** を選択します。
4. **[ホーム]** 画面で、**[リカバリ]** の下にある **[マイ ディスク]** を選択します。



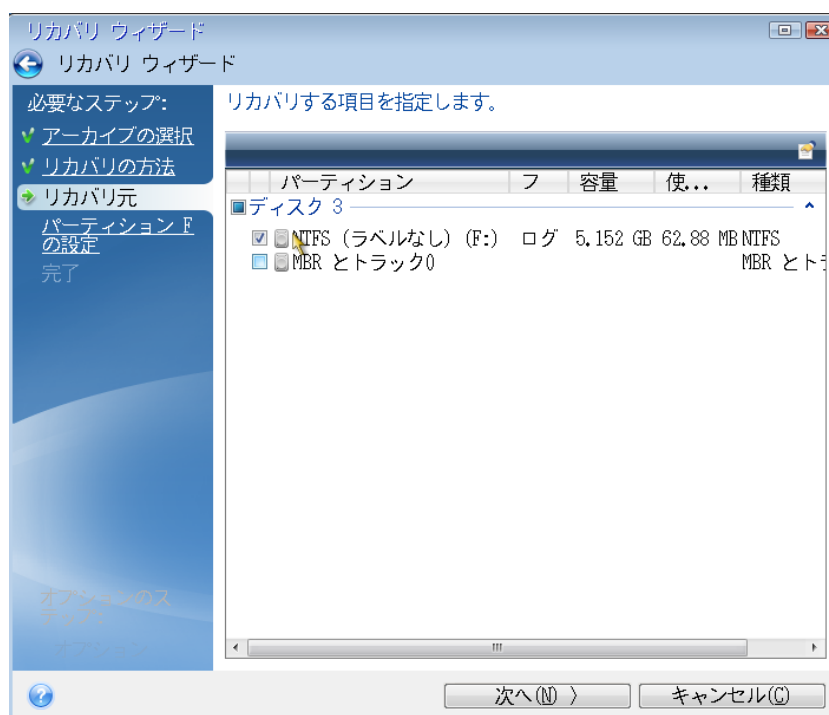
5. リカバリに使用するシステム ディスクまたはパーティション バックアップを選択します。
バックアップが表示されない場合には、**[参照]** をクリックし、バックアップのパスを手動で指定します。

6. **[リカバリの方法]** ステップで **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。

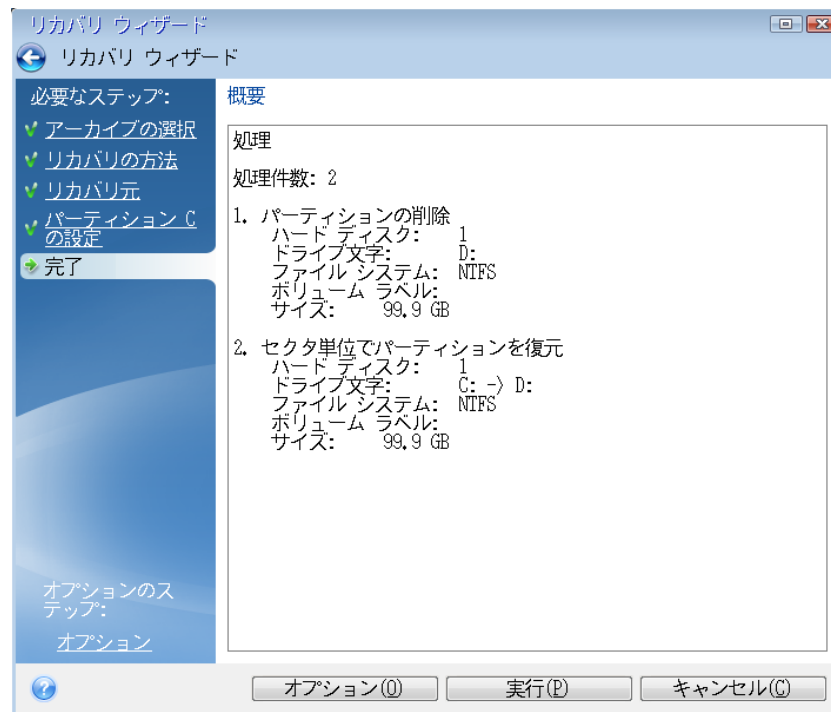


7. **[リカバリ元]** 画面で、システム パーティション (通常は C) を選択します。システム パーティションの文字が異なる場合は、**[フラグ]** 列を使用してパーティションを選択します。**[プライマリ]** および **[アクティブ]** フラグが設定されている必要があります。

*Windows 7 の場合、システム予約済みパーティションには、**[プライマリ]**、**[アクティブ]** フラグが設定されます。システム予約済みパーティションとシステム パーティションの両方をリカバリするために選択する必要があります。*



8. [パーティション C の設定] (または、異なる場合は実際のシステム パーティションの文字) の手順で、デフォルトの設定を確認し、正しい場合は **[次へ]** をクリックします。正しくない場合は、必要に応じて設定を変更した後、**[次へ]** をクリックします。容量が異なる新しいハードディスクにリカバリする場合は設定を変更する必要があります。
9. **[完了]** の画面で処理の概要を確認します。パーティションのサイズを変更していない場合は、**[パーティションの削除]** 項目と **[パーティションのリカバリ]** 項目のサイズが一致している必要があります。概要を確認して、**[実行]** をクリックします。



10. 処理が終了したら、Acronis True Image 2015 Personal のスタンドアロン版を終了し、レスキュー メディアを取り出して、リカバリされたシステム パーティションから起動します。必要な状態まで Windows をリカバリしたことを確認してから、元の起動順序を復元します。

ブータブル メディア配下の新しいディスクへのシステムのリカバリ

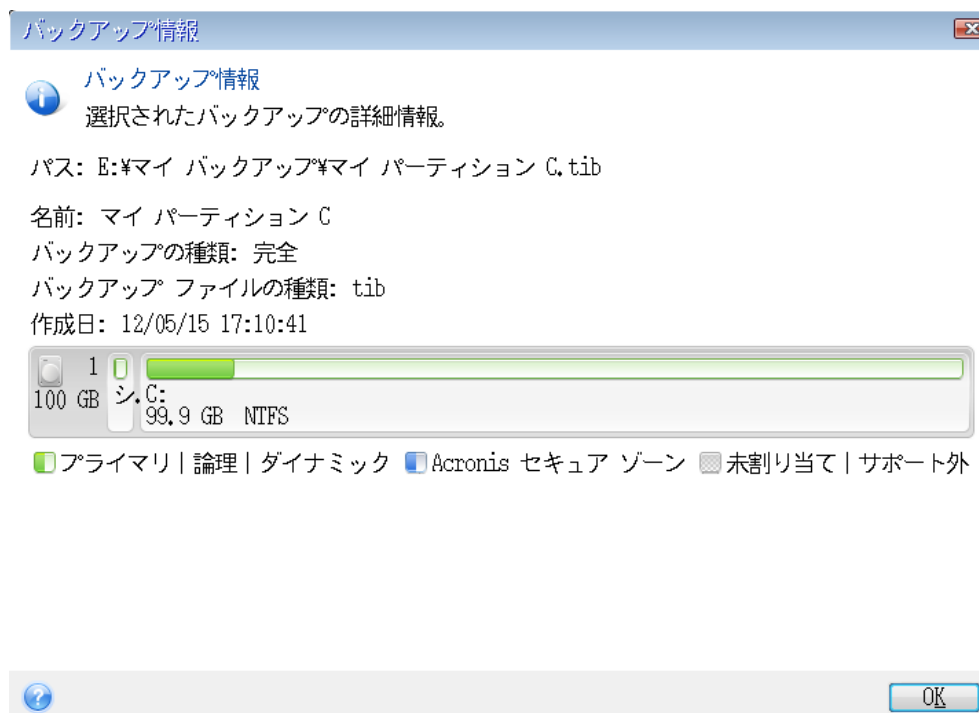
始める前に、「リカバリの準備 『40ページ』」で説明している準備作業を実行することをお勧めします。新しいディスクのフォーマットは、リカバリ処理の中で実行されるので、実行する必要はありません。

警告:古いハード ディスク ドライブと新しいハード ディスク ドライブは同じコントローラ モード (IDE、AHCI など) で動作する必要があります。モードが異なる場合、新しいハード ディスク ドライブからコンピュータが起動しなくなります。

新しいディスクにシステムをリカバリするには、以下を実行します。

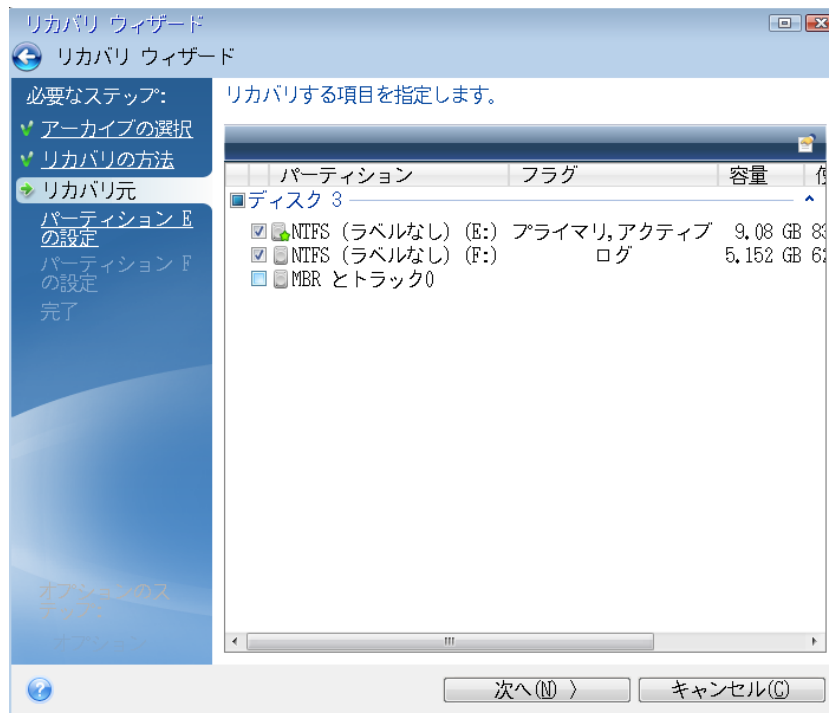
1. 新しいハード ディスク ドライブはコンピュータ内の同じ場所に取り付け、元のドライブで使用したものと同一ケーブルおよびコネクタを使用します。難しい場合には、新しいドライブを使用する場所に取り付けてください。
2. リカバリに使用するバックアップが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。

3. BIOS で起動順序を設定して、レスキュー メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並べ替え 『52ページ』」を参照してください。
4. レスキュー メディアから起動して、**[True Image]** を選択します。
5. **[ホーム]** 画面で、**[リカバリ]** の下にある **[マイ ディスク]** を選択します。
6. リカバリに使用するシステム ディスクまたはパーティション バックアップを選択します。バックアップが表示されない場合には、**[参照]** をクリックし、バックアップのパスを手動で指定します。
7. 隠しパーティション (システム予約パーティション、PC の製造元が作成した隠しパーティションなど) がある場合は、ウィザードのツールバーの **[詳細]** をクリックします。隠しパーティションの場所とサイズは新しいディスクで同じにする必要があるため、それらのパラメータを控えておいてください。



8. **[リカバリの方法]** ステップで **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。

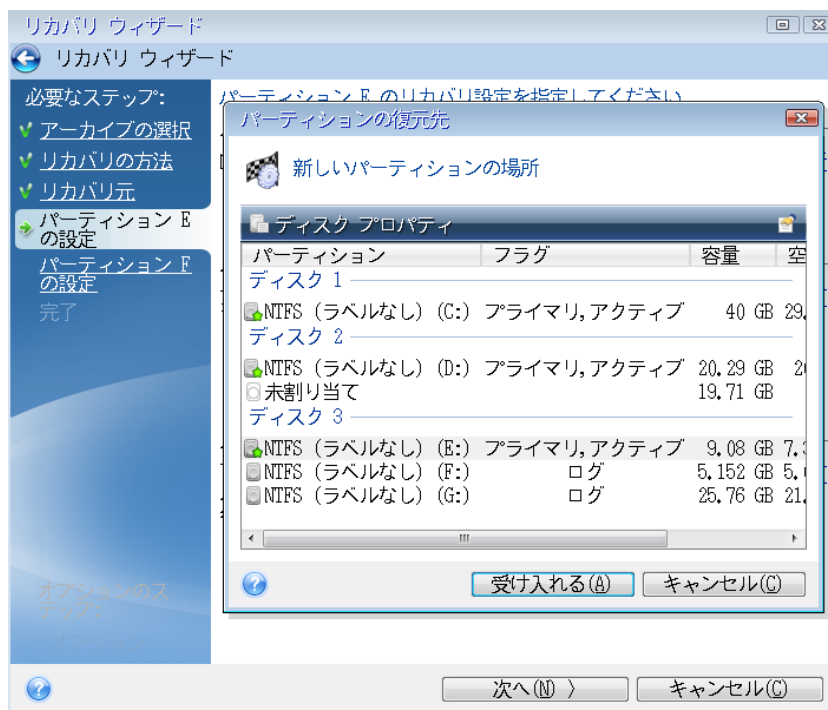
9. **[リカバリ元]** の手順で、リカバリするパーティションのチェック ボックスをオンにします。**[MBR とトラック 0]** チェック ボックスはオンにしないでください。



パーティションを選択すると、該当する [パーティションの設定...] の手順が表示されます。これらの手順は、ドライブ文字のないパーティション (隠しパーティションには通常、ドライブ文字はありません) から開始します。次に、パーティションのドライブ文字の昇順に進みます。この順序は変更できません。この順序は、ハードディスク上のパーティションの物理的順序とは異なる場合があります。

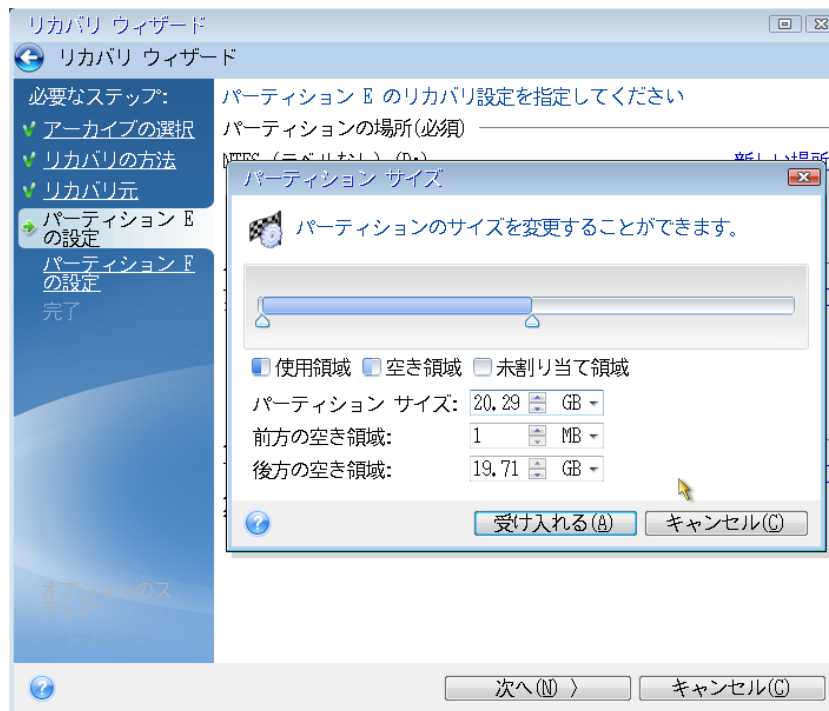
10. 隠しパーティションの設定の手順 (通常は「パーティション 1-1 の設定」という名前) で、次の設定を指定します。

- **[場所]**。 **[新しい場所]** をクリックし、割り当てられた名前または容量によって新しいディスクを選択し、 **[確定]** をクリックします。



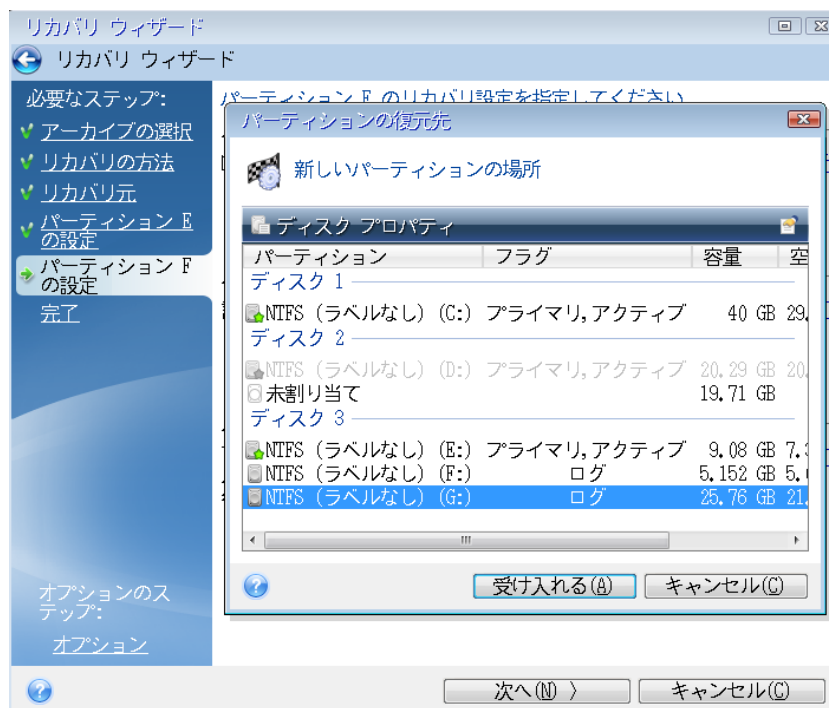
- **[種類]**。パーティションの種類を確認し、必要に応じて変更します。システム予約済みパーティション（存在する場合）がプライマリパーティションであり、アクティブに設定されていることを確認します。

- **[サイズ]**。[パーティション サイズ] の領域で **[デフォルトを変更]** をクリックします。デフォルトでは、新しいディスク全体がパーティションに使用されます。[パーティション サイズ] フィールドに正しいサイズを入力します（この値は **[リカバリ元]** の手順で確認できます）。次に、必要に応じて、[バックアップ情報] ウィンドウに表示されていた場所と同じ場所に、このパーティションをドラッグします。**[確定]** をクリックします。

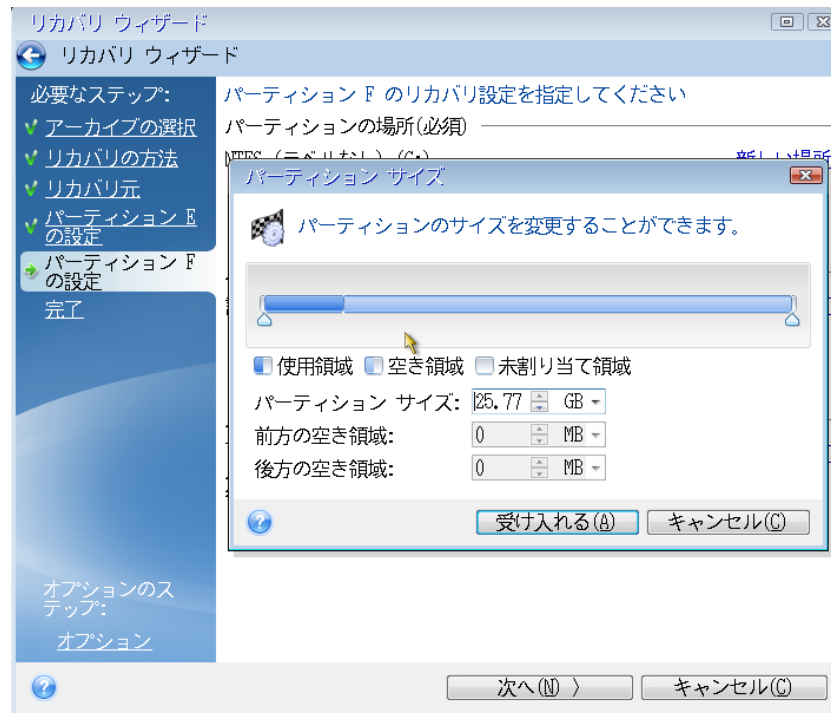


11. **[パーティション C の設定]** の手順で、2 番目のパーティションの設定を指定します。このパーティションは、ここではシステム パーティションです。

- **[新しい場所]** をクリックしてから、パーティションを配置するディスク上の未割り当て領域を選択します。



- パーティションの種類を必要に応じて変更します。システム パーティションは、プライマリにする必要があります。
- パーティションのサイズを指定します。デフォルトでは元のサイズと同じです。通常、このパーティションの後ろには空き領域はないため、新しいディスク上の未割り当て領域のすべてを 2 番目のパーティションに割り当てます。**【確定】** をクリックしてから **【次へ】** をクリックします。



12. 実行する処理の概要を注意深く確認して、**【実行】** をクリックします。

PC の製造元が作成した隠しパーティションが元のディスクに含まれている場合は、MBR のリカバリに進んでください。PC の製造元は、隠しパーティションへのアクセスを提供するために、Windows の MBR やトラック 0 上のセクタを変更している可能性があるため、MBR をリカバリする必要があります。

1. 同じバックアップをもう一度選択します。右クリックして、ショートカット メニューで **【リカバリする】** を選択します。[リカバリの方法] で **【ディスクとパーティション全体をリカバリする】** を選択してから、**【MBR とトラック 0】** チェックボックスをオンにします。
2. 次の手順で MBR のリカバリ先のディスクを選択し、**【次へ】** をクリックしてから **【実行】** をクリックします。MBR のリカバリが完了したら、Acronis True Image 2015 Personal のスタンドアロン版を終了します。

リカバリ完了時

コンピュータを起動する前に、古いドライブがあれば取り外してください。Windows の起動中に新しいドライブと古いドライブの両方が認識された場合、Windows の起動に問題が生じます。古いドライブを容量の大きい新しいドライブにアップグレードする場合は、初回起動前に古いドライブを取り外してください。

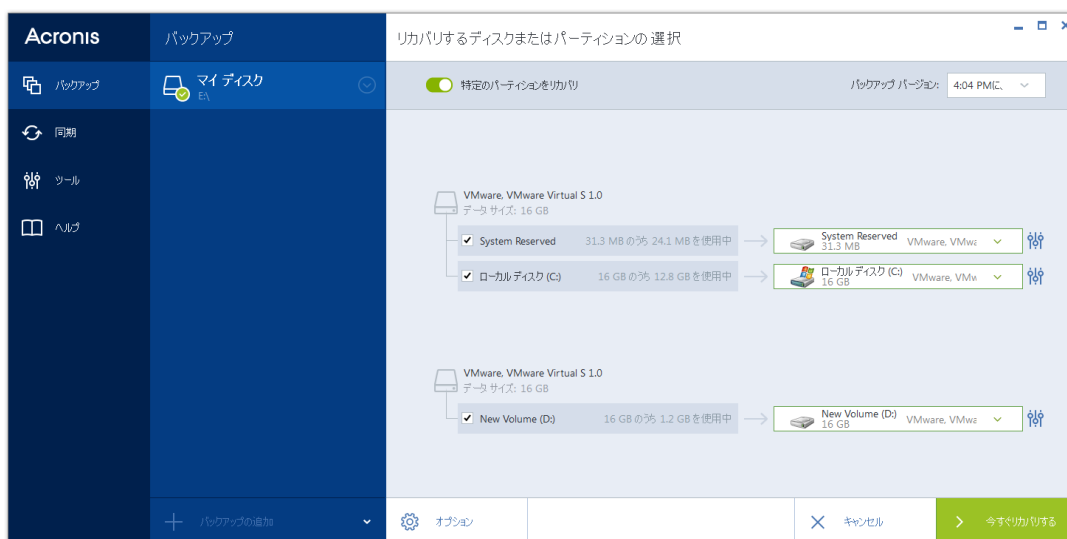
レスキュー メディアを取り外し、コンピュータで Windows を起動します。新しいハードウェア (ハード ドライブ) が見つかったため Windows を再起動する必要があると表示される場合があります。システムが正常に動作することを確認してから、元の起動順序に戻します。

4.1.2 パーティションとディスクのリカバリ

ローカル ストレージまたはネットワーク ストレージにあるバックアップからディスクをリカバリすることができます。

パーティションやディスクをリカバリするには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image 2015 Personal を起動します。
2. **[バックアップ]** セクションで、リカバリするパーティションまたはディスクが含まれているバックアップを選択し、**[ディスクをリカバリ]** をクリックします。
3. **[バックアップ バージョン]** の一覧で、リカバリするバックアップ バージョンをバックアップの日付と時刻で選択します。



4. リカバリするディスクを選択します。
別々のパーティションをリカバリする必要がある場合は、**[特定のパーティションをリカバリ]** をクリックし、リカバリするパーティションを選択します。
5. パーティション名の下にあるリカバリ先のフィールドで、リカバリ先パーティションを選択します。適切ではないパーティションは赤い文字で表示されます。リカバリ先のパーティション上のデータは、リカバリされるデータおよびファイル システムによって置き換えられるので、すべて失われます。

元のパーティションにリカバリする場合は、パーティション領域に少なくとも 5% の空き領域が必要です。その領域がない場合、**[今すぐリカバリ]** ボタンは使用できません。

6. (オプションの手順) ディスク リカバリ処理に追加パラメータを設定する場合には、**[オプション]** をクリックします。
7. 選択し終わったら、**[今すぐリカバリ]** をクリックしてリカバリを開始します。

MBR をリカバリする必要性について

リカバリ後に Windows が起動しない場合は、マスター ブート レコード (MBR) をリカバリすることをお勧めします。MBR をリカバリするには、**[MBR を表示する]** をクリックし、**[MBR]** チェックボックスをオンにします。

4.1.3 ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームのリカバリについて

ダイナミック ボリュームのリカバリ

ローカル ハード ドライブの次のロケーションへダイナミック ボリュームをリカバリすることができます。

- **ダイナミック ボリューム**

ダイナミック ディスクにリカバリする際に、手動でダイナミック ボリュームのサイズを変更することはサポートされていません。リカバリ中にダイナミック ボリュームのサイズを変更する必要がある場合は、ベーシック ディスクにリカバリする必要があります。

- **元の場所 (同じダイナミック ボリュームへ)**
ターゲット ボリュームの種類は変更されません。
- **別のダイナミック ディスクまたはボリューム**
ターゲット ボリュームの種類は変更されません。たとえば、ダイナミック ストライプ ボリュームをダイナミック スパン ボリュームにリカバリすると、ターゲット ボリュームはスパンのままです。
- **ダイナミック グループの未割り当て領域**
リカバリしたボリュームの種類は、バックアップでの種類と同じになります。
- **ベーシック ボリュームまたはディスク**
ターゲット ボリュームはベーシックのままです。
- **ベアメタル リカバリ**
ダイナミック ボリュームを新しい未フォーマット ディスクに「ベアメタル リカバリ」を行うと、リカバリされたボリュームはベーシックになります。リカバリされたボリュームをダイナミックのままにしておきたい場合は、ターゲット ディスクをダイナミックとして準備 (パーティションが設定され、フォーマットされている) する必要があります。これは、Windows Disk Management スナップインなどの、サードパーティのツールを使用して行うことができます。

ベーシック ボリュームおよびディスクのリカバリ

- ベーシック ボリュームをダイナミック グループの未割り当て領域にリカバリすると、リカバリされたボリュームはダイナミックになります。
- ベーシック ディスクを 2 つのディスクから構成されるダイナミック グループのダイナミック ディスクにリカバリすると、リカバリされたディスクはベーシックのままです。リカバリの実行先のダイナミック ディスクは「見つからない」状態となり、2 つ目のディスク上のスパン/ストライプ ダイナミック ボリュームは「エラー」になります。

リカバリ後のパーティションのスタイル

ターゲット ディスクのパーティションのスタイルは、ご使用のコンピュータが UEFI をサポートしているかどうか、およびシステムが BIOS 起動であるか、UEFI 起動であるかどうかによって異なります。以下の表を参照してください。

	システムは BIOS 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)	システムは UEFI 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)
ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしていない	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは MBR のままとなり、ターゲット ディスクは BIOS 起動が可能となります。	処理完了後、パーティション スタイルは GPT に変換されます。お使いのオペレーティング システムではサポートされていないため、UEFI 起動はできません。
ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしている	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは MBR のままとなり、ターゲット ディスクは BIOS 起動が可能となります。	ターゲットのパーティションが GPT スタイルに変換され、ターゲット ディスクの UEFI 起動が可能になります。「UEFI システムへのリカバリの例 『51ページ』」を参照してください。
ソース ディスクは GPT であり、OS は UEFI をサポートしている	処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなります。お使いのオペレーティング システムは GPT からの BIOS 起動をサポートしていないため、システムは BIOS から起動できなくなります。	処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなり、オペレーティング システムは UEFI 起動が可能となります。

リカバリ処理の例

「UEFI システムへのリカバリの例 『51ページ』」を参照してください。

4.1.3.1 UEFI システムへのリカバリの例

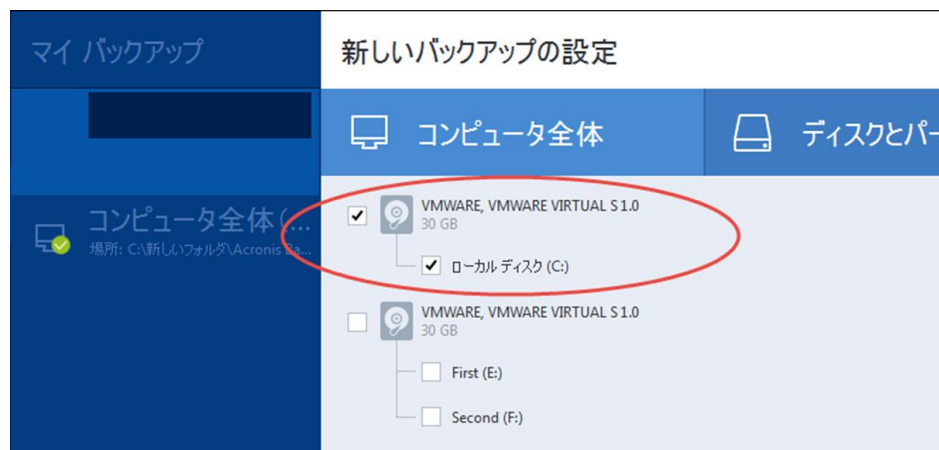
次に、以下の条件でシステムを転送する例を挙げます。

- ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしている。
- ターゲット システムは UEFI 起動である。
- 古いハード ディスク ドライブと新しいハード ディスク ドライブは同じコントローラ モード (IDE、AHCI など) で動作する。

手順を開始する前に、以下があることを確認してください。

- **ブータブル レスキュー メディア**
詳細については、「ブータブル レスキュー メディアの作成」を参照してください。
- **ディスク モードで作成されたシステム ディスクのバックアップ**

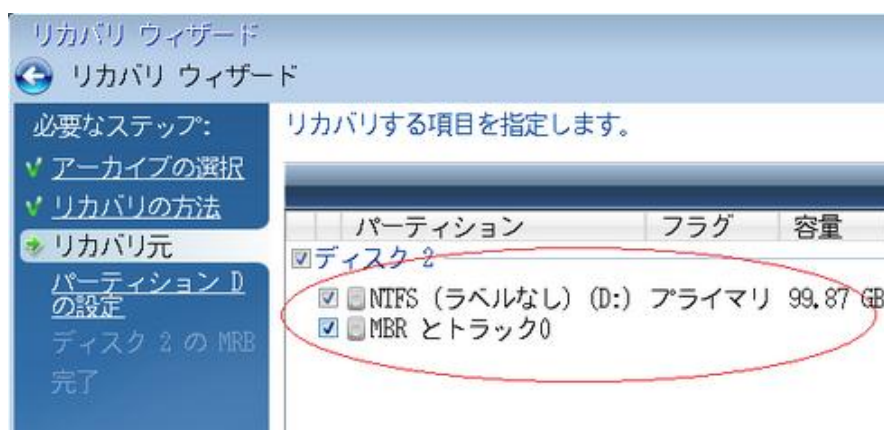
このバックアップを作成するには、ディスク モードに切り替え、システム パーティションがあるハード ドライブを選択します。詳細については、「ディスクとパーティションのバックアップ」を参照してください。



MBR ディスクから UEFI 起動のコンピュータにシステムを転送する手順は、次のとおりです。

1. レスキュー メディアから UEFI モードで起動して、[True Image] を選択します。
2. リカバリ ウィザードを実行して、「システムのリカバリ 『41ページ』」で説明されている指示に従います。
3. [リカバリ元] で、ディスク名の横にあるチェック ボックスをオンにして、システム ディスク全体を選択します。

下の例では、[ディスク 1] のチェック ボックスをオンにします。



4. [完了] で、[実行] をクリックします。

操作が完了すると、リカバリ先ディスクは、UEFI 起動が可能ないように GPT スタイルに変換されます。

リカバリ後は、UEFI モードでコンピュータを起動してください。システム ディスクの起動モードを UEFI のブート マネージャのユーザー インターフェイスで変更する必要がある場合があります。

4.1.4 BIOS での起動順の並び替え

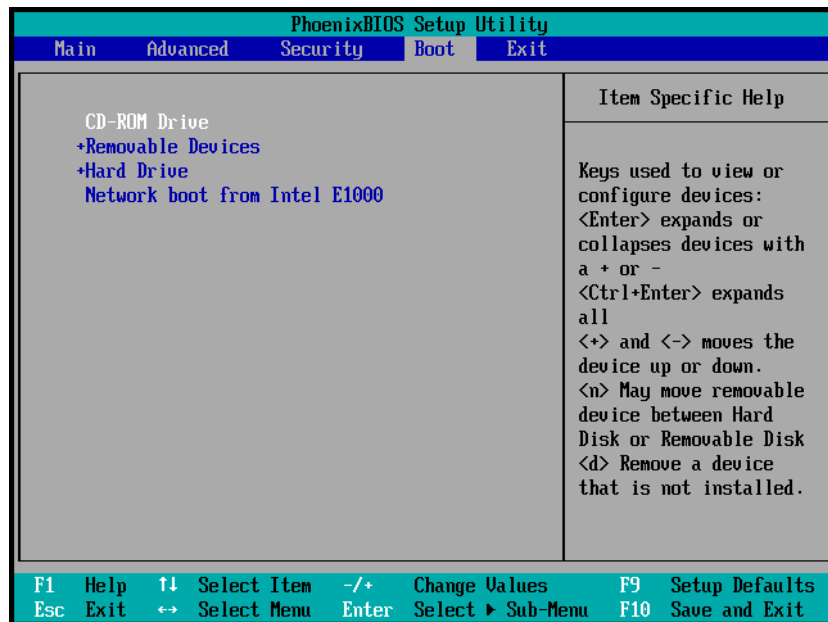
Acronis ブータブル レスキュー メディアからコンピュータを起動するためには、そのメディアが最初の起動デバイスとなるように、BIOS で起動順序を割り当てる必要があります。

Acronis ブータブル メディアから起動する手順は、次のとおりです。

1. USB フラッシュ ドライブをブータブル メディアとして使用している場合は、USB フラッシュ ドライブを USB ポートに接続します。
2. コンピュータの電源を入れます。Power-On Self Test (POST) の実行中、BIOS に移るために押す必要があるキーの組み合わせが表示されます。
3. キーの組み合わせを押します (たとえば、**Del** キー、**F1** キー、**Ctrl+Alt+Esc** キー、**Ctrl+Esc** キー)。BIOS セットアップ ユーティリティが起動します。BIOS ごとに表示、項目のセット、名称などが異なります。

マザーボードの中には、いわゆるブートメニューが用意されているものもあります。ブートメニューは、特定のキーまたはキーの組み合わせ、たとえば **F12** キーなどを押すと開きます。ブートメニューを使用すれば、BIOS 設定を変更することなく、ブータブル デバイスのリストからブート デバイスを選択できます。

4. CD または DVD をブータブル メディアとして使用している場合は、CD または DVD を CD ドライブまたは DVD ドライブに挿入します。
5. レスキュー メディア (CD、DVD、または USB ドライブ) を最初の起動デバイスにします。
 1. キーボードの矢印キーを使用してブート順序の設定に移動します。
 2. ブータブル メディアのデバイスの上にマウス ポインタを置き、リスト内の最初の項目にします。通常は、プラス記号キーとマイナス記号キーを使用して順序を変更できます。



6. BIOS を終了して変更内容を保存します。コンピュータが Acronis ブータブル メディアから起動します。

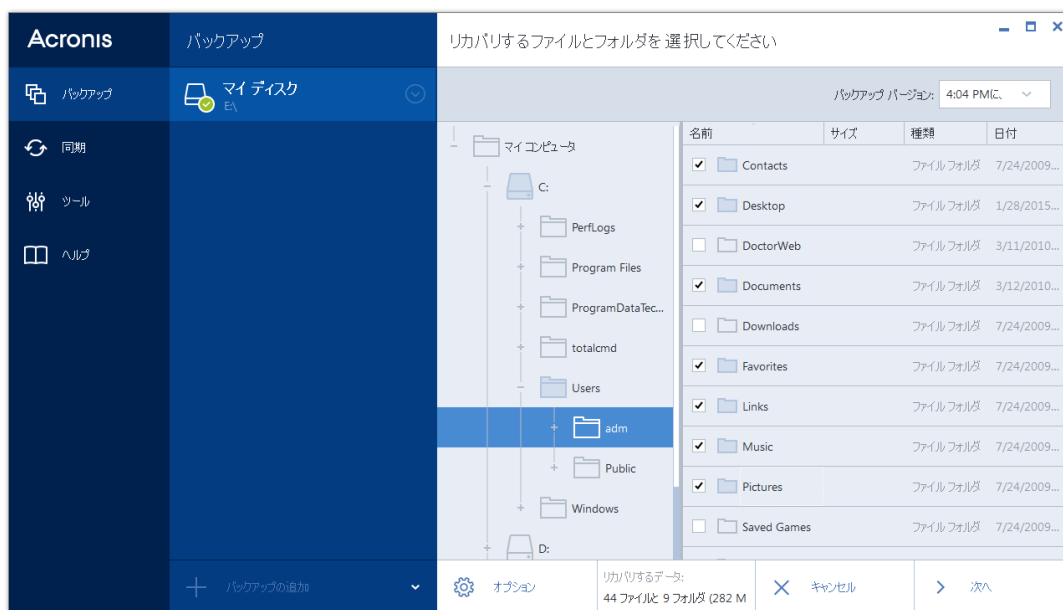
コンピュータが最初のデバイスからの起動に失敗した場合は、起動するまで、2 台目以降のデバイスからの起動が試みられます。

4.2 ファイルとフォルダのリカバリ

ファイル レベルとディスク レベルのバックアップからファイルやフォルダをリカバリできます。

ファイルやフォルダをリカバリする手順は、次のとおりです。

1. Acronis True Image 2015 Personal を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. バックアップ リストから、リカバリするファイルやフォルダが格納されているバックアップを選択します。
4. 右側のパネルで、**[ファイルのリカバリ]** をクリックします。
5. バックアップのバージョン (特定の日付および時刻におけるデータの状態) を選択します。
6. リカバリするファイルやフォルダを選択し、**[次へ]** をクリックします。



7. 選択したファイルまたはフォルダをリカバリするコンピュータ上のリカバリ先を選択します。元の場所にデータをリカバリすることができます。また、必要に応じて新しい場所を選択することもできます。新しい場所を選択するには、**[参照]** ボタンをクリックします。

新しいロケーションを選択した場合、デフォルトでは、元の絶対パスはリカバリせずに、選択した項目がリカバリされます。項目をフォルダ構造全体と共にリカバリすることもできます。その場合は、**[元のフォルダ構造を維持する]** チェック ボックスをオンにします。

8. 必要に応じて、リカバリ処理のオプション (リカバリ処理の優先度、ファイルレベルのセキュリティ設定など) を選択します。オプションを設定するには、**[オプション]** をクリックします。ここで設定するオプションは、現在のリカバリ処理にのみ適用されます。
9. リカバリ処理を開始するには、**[今すぐリカバリする]** ボタンをクリックします。

[キャンセル] をクリックすると、リカバリは中止されます。リカバリを中止してもリカバリ先のフォルダが変更される場合があります。

Windows エクスプローラでのファイルのリカバリ

Windows エクスプローラから直接ファイルとフォルダをリカバリする手順は、次のとおりです。

1. 対応する .tib ファイルをダブルクリックし、リカバリするファイルまたはフォルダまで移動して参照します。
2. ファイルまたはフォルダをハード ディスクにコピーします。

注意: コピーしたファイルの「圧縮」属性と「暗号化」属性は失われます。これらの属性を維持したい場合は、バックアップをリカバリすることをお勧めします。

4.3 リカバリ オプション

[ディスク リカバリ オプション]、[ファイル リカバリ オプション] のウィンドウで、それぞれ、ディスクとパーティションおよびファイルのリカバリ処理のオプションを設定できます。アプリケーションをインストールすると、すべてのオプションは初期値に設定されます。それらのオプションは、現在のリカバリ処理用のみに、または、その後のすべてのリカバリ処理用に変更できます。[設定をデフォルトとして保存する] チェックボックスをオンにすると、変更した設定が今後のリカバリ作業すべてにデフォルトで適用されます。

ディスク リカバリ オプションとファイル リカバリ オプションは完全に独立しており、個別に設定する必要があるので注意してください。

製品のインストール後に変更したオプションをすべて初期値にリセットする場合は、[初期設定にリセット] ボタンをクリックします。

セクションの内容

ディスク リカバリ モード.....	55
リカバリ処理前後に実行するコマンド.....	55
ベリファイ オプション.....	56
コンピュータの再起動.....	56
ファイル リカバリ オプション.....	57
ファイル上書きオプション.....	57
リカバリ処理のパフォーマンス.....	57
リカバリ処理の通知.....	58

4.3.1 ディスク リカバリ モード

このオプションを使用して、イメージ バックアップのディスク リカバリ モードを選択できます。

- [セクタ単位のリカバリ]- ディスクまたはパーティションの使用済みセクタと未使用セクタの両方をリカバリする場合にこのチェックボックスをオンにします。このオプションが有効になるのは、セクタ単位バックアップのリカバリを選択した場合のみです。

4.3.2 リカバリ処理前後に実行するコマンド

リカバリ処理の前後に自動的に実行するコマンド（またはバッチ ファイル）を指定することができます。

たとえば、リカバリを開始する前に特定の Windows プロセスを開始/停止することや、リカバリ対象データのウィルスの有無を調べることができます。

コマンド (バッチ ファイル) を指定する手順は、次のとおりです。

- リカバリ処理の開始前に実行するコマンドを **[処理前に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。
- リカバリ処理の終了後に実行するコマンドを **[処理後に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。

ユーザーの入力を必要とする対話型のコマンド (pause など) は実行しないでください。これらのコマンドは、サポートされていません。

4.3.2.1 リカバリ用ユーザー コマンドの編集

リカバリの前または後に実行するコマンドを指定することができます。

- **[コマンド]** フィールドにコマンドを入力するか、一覧から選択します。[...] をクリックすると、バッチ ファイルを選択できます。
- **[作業ディレクトリ]** フィールドに、コマンド実行のためのパスを入力するか、入力済みのパスの一覧から選択します。
- コマンド実行引数を **[引数]** フィールドに入力するか、一覧から選択します。

[コマンドの実行が完了するまで処理を行わない] (デフォルトでは有効) パラメータを無効にすると、コマンド実行と同時にリカバリ処理を実行できます。

[ユーザー コマンドが失敗したら処理を中止する] パラメータを有効にした場合は (デフォルトでは有効)、コマンド実行でエラーが発生すると処理が中止されます。

入力したコマンドをテストするには、**[コマンドのテスト]** ボタンをクリックします。

4.3.3 ベリファイ オプション

- **[リカバリ前にバックアップをベリファイする]:** リカバリ前にバックアップの整合性を確認するには、このオプションを有効にします。
- **[リカバリ後にファイル システムをチェックする]:** 復元されたパーティションでファイル システムの整合性を確認するには、このオプションを有効にします。

確認できるのは FAT16/32 および NTFS ファイル システムのみです。

システム パーティションを元の場所にリカバリする場合のように、リカバリ中に再起動が必要な場合は、ファイル システムはチェックされません。

4.3.4 コンピュータの再起動

リカバリが必要な場合に自動的にコンピュータを再起動させるには、**[リカバリに必要なであればコンピュータを自動的に再起動する]** チェックボックスをオンにします。このオプションは、オペレーティング システムによってロックされているパーティションをリカバリする必要がある場合に使用します。

4.3.5 ファイル リカバリ オプション

次のファイル リカバリ オプションを選択できます。

- **[元のセキュリティ設定でファイルをリカバリする]:** バックアップ時にファイルのセキュリティ設定を保存してある場合（「バックアップ用ファイル レベルのセキュリティ設定 『32ページ』」を参照してください）は、ファイルの元のセキュリティ設定をリカバリするか、リカバリ先のフォルダのセキュリティ設定をファイルに継承させるかを選択できます。このオプションは、ファイルまたはフォルダのバックアップからファイルをリカバリする場合にのみ有効です。
- **[リカバリされたファイルに現在の日時を設定する]-** ファイルの日付/時刻をバックアップからリカバリするか、現在の日付/時刻を割り当てるかを選択することができます。デフォルトでは、バックアップの日付と時刻が割り当てられます。

4.3.6 ファイル上書きオプション

バックアップにあるファイルと同じファイル名が復元先フォルダで見つかった場合の処理を選択します。

このオプションは、ファイルレベルのバックアップからデータを復元する場合にのみ使用できます。

[既存のファイルを上書きする] チェックボックスをオンにすると、ハードディスクにあるファイルよりバックアップにあるファイルの方が無条件で優先されますが、デフォルト設定では、新しいファイルやフォルダは上書きから保護されます。これらのファイルやフォルダも上書きする場合は、該当するチェックボックスをオフにします。

一部のファイルは上書きする必要がない場合:

- **[隠しファイルと隠しフォルダ]** チェックボックスをオン/オフすることで、すべての隠しファイルと隠しフォルダの上書きを有効または無効にします。
- **[システム ファイルとシステム フォルダ]** チェックボックスをオン/オフすることで、すべてのシステム ファイルとシステム フォルダの上書きを有効または無効にします。
- **[新しいファイルとフォルダ]** チェックボックスをオン/オフすることで、すべての新しいファイルとフォルダの上書きを有効または無効にします。
- **[特定のファイルやフォルダを追加する]** をクリックして、上書きしたくないカスタム ファイルとカスタム フォルダの一覧を管理します。
 - 特定のファイルの上書きを無効にするには、**[追加]** ボタンをクリックして、除外の条件を作成します。
 - 条件の指定には、一般的な Windows のワイルドカード文字を使用できます。たとえば、拡張子 **.exe** を持つすべてのファイルを保護するには、***.exe** を追加します。**My???.exe** を追加すると、「my」で始まり 5 文字で構成される名前が付いた拡張子 **.exe** のファイルがすべて保護されます。

たとえば誤って追加した条件を削除するには、その条件の右にある **[削除]** アイコンをクリックします。

4.3.7 リカバリ処理のパフォーマンス

[パフォーマンス] タブでは、以下の設定を行うことができます。

処理の優先順位

バックアップ処理やリカバリ処理の優先度を変更すると、（優先度の上げ下げによって）バックアップの処理速度を速くしたり遅くしたりできますが、実行中の他のプログラムのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性もあります。システムで実行中のどの処理に対しても、優先順位に応じて、その処理に割り当てられる CPU の使用時間とシステム リソースが決定されます。処理の優先度を下げることによって、他の CPU タスクが使用できるリソースが増えます。バックアップやリカバリの優先度を上げると、同時に実行している他の処理からリソースを取得するため、バックアップ処理の速度が向上します。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

処理の優先度は、次のいずれかに設定することができます。

- **[低]** (デフォルトで有効) - バックアップ処理やリカバリ処理の速度は低下しますが、他のプログラムのパフォーマンスは向上します。
- **[標準]** - バックアップ処理やリカバリ処理に、他の処理と同じ優先度が割り当てられます。
- **[高]** - バックアップ処理やリカバリ処理の速度は向上しますが、他のプログラムのパフォーマンスは低下します。このオプションを選択すると、Acronis True Image 2015 Personal による CPU 使用率が 100% になる場合があるので注意してください。

4.3.8 リカバリ処理の通知

空きディスク領域のしきい値

バックアップ ストレージの空き領域が指定したしきい値より少なくなったときに、通知を受け取ることができます。バックアップの開始後、選択したバックアップの場所の空き領域がその時点で既に指定値より少ないことが検出された場合、Acronis True Image 2015 Personal では実際のバックアップ処理は開始されず、対応する通知メッセージが直ちに表示されます。メッセージには 3 つの選択肢が示されます。メッセージを無視してバックアップを続行するか、バックアップを保存する別の場所を参照するか、バックアップをキャンセルするかのいずれかを選択してください。

バックアップの実行中に空き領域が指定値より少なくなった場合も、同じメッセージが表示され、同様に選択する必要があります。

空きディスク領域のしきい値を設定する手順は、次のとおりです。

- **[ディスクの空き領域が不十分なときに通知メッセージを表示する]** チェックボックスをオンにします。
- **[サイズ]** ボックスでしきい値を入力または選択し、単位を選択します。

Acronis True Image 2015 Personal では、次のストレージ デバイスの空き領域を監視できます。

- ローカル ハード ドライブ
- USB カードおよびドライブ
- ネットワーク共有 (SMB/NFS)

[エラー処理] 設定で **[処理中にメッセージやダイアログを表示しない (サイレント モード)]** チェックボックスがオンになっている場合、メッセージは表示されません。

FTP サーバーと **CD/DVD** ドライブについては、このオプションを有効にすることはできません。

4.4 コンピュータを工場出荷時の設定に復元するには

新品のコンピュータに工場出荷時の構成のバックアップがバンドルされていた場合、Acronis True Image 2015 Personal はこのバックアップでリカバリし、このコンピュータを工場出荷時の設定に戻すことができます。システムは、購入時の状態に戻ります。

注意: 復元すると、Acronis セキュア ゾーン内のバックアップすべてを含め、コンピュータ上の個人データやプログラムはすべて消去されます。

コンピュータに工場出荷時の構成を復元できるかどうかをチェックする方法

Acronis True Image 2015 Personal で、コンピュータを工場出荷時の設定に戻す方法は次の 3 通りです。

- 直接、Windows で。この場合、Acronis True Image 2015 Personal の標準リカバリ機能を使用します。
- Acronis スタートアップ リカバリ マネージャから起動する。
- 工場出荷時の設定を含むブータブル メディアから起動する。

工場出荷時の環境設定がコンピュータの Acronis セキュア ゾーンにバックアップされている場合には、Windows から、または Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用して初期状態にリカバリできます。このバックアップは、通常、コンピュータをエンド ユーザーに提供したハードウェア サプライヤが作成し、Acronis セキュア ゾーンに保存しています。

工場出荷時の設定を含むブータブル メディアからリカバリする場合、このメディアには工場出荷時のイメージ構成がバックアップされています。

Windows で工場出荷時の設定を復元するには

Windows で工場出荷時の構成を復元するには、Acronis True Image 2015 Personal の標準リカバリ機能を使用します。

コンピュータを工場出荷時の設定に復元する手順は次のとおりです。

1. Acronis True Image 2015 Personal を起動します。
2. **[バックアップとリカバリ]** タブをクリックします。
3. バックアップのリストで、「**初期状態**」という名前のバックアップを選択します。
4. **[リカバリする]** をクリックします。
5. **[再起動]** をクリックします。

この処理は、コンピュータの再起動後も継続されます。処理の完了後、コンピュータには、初期状態の Windows がロードされます。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用して工場出荷時の設定を復元するには

コンピュータを工場出荷時の設定に復元する手順は次のとおりです。

1. コンピュータの電源をオンにします。
2. プロンプトが表示されたら、**F11** を押して、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを実行します。
3. **[リカバリする]** を選択します。

バックアップが複数のバージョンから構成されている場合、リカバリするバージョンを選択します。

4. **[はい]** をクリックして処理を確定します。

処理が完了すると、コンピュータは再起動されるか、または電源がオフになります。次回、コンピュータを起動すると、初期状態の Windows がロードされます。

工場出荷時の設定を含むブータブル メディアから工場出荷時の設定を復元するには

ここで説明する手順は、ユーザー自身が作成した、またはハードウェア サプライヤから新品のコンピュータとともに提供された工場出荷時の設定を含むブータブル メディアが対象です。

工場出荷時の設定を含むブータブル メディアの作成手順については、「工場出荷時の設定を含むブータブル メディアの作成」を参照してください。

コンピュータを工場出荷時の設定に復元する手順は次のとおりです。

1. 工場出荷時の設定を含むブータブル メディアを使用して、コンピュータを起動します。
2. **[リカバリする]** を選択します。
3. **[はい]** をクリックして処理を確定します。

処理が完了すると、コンピュータは再起動されるか、または電源がオフになります。次回、コンピュータを起動すると、初期状態の Windows がロードされます。

5 ツール

Acronis のツールとユーティリティには、保護ツール、マウント ツール、クローン ディスク ユーティリティ、セキュリティおよびプライバシー ユーティリティ、ディスク管理ユーティリティがあります。

保護ツール

- **Acronis Universal Restore メディア**

異なるハードウェアの構成でコンピュータのイメージをリカバリする場合、プログラムでデフォルト フォルダにあるデバイス ドライバの一部を検出できないことがあります。特に、ターゲット ハードウェアが特定の大容量記憶装置コントローラを含む場合に検出できないことがあります。

このツールは、Acronis True Image 2015 Personal の [ツール] タブにあります。無い場合は、Acronis のマイ アカウントからダウンロードしてください。詳細については、<https://kb.acronis.com/ati2015/aur> を参照してください。

- **Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ**

コンピュータ起動時にオペレーティング システムを読み込まずに Acronis True Image 2015 Personal を起動することができます (オペレーティング システムが起動する前に F11 キーを押します)。

- **レスキュー メディア ビルダ**

コンピュータにインストールされている Acronis 製品 (または指定したコンポーネント) が収録されたブータブル レスキュー メディアを作成することができます。

- **Acronis セキュア ゾーン**

ディスク上の安全な専用パーティションにバックアップを保存することができます。

セキュリティとプライバシー

- **Acronis DriveCleanser**

Acronis DriveCleanser は、ハード ディスクのデータを確実に消去するためのユーティリティです。

- **システムのクリーンアップ**

システム クリーンアップ ユーティリティを使用すると、一般的なシステム タスクに関連するコンポーネント (フォルダ、ファイル、レジストリ セクションなど) を消去することができます。これらの Windows コンポーネントには、ユーザーによるコンピュータの操作履歴が保持されているため、個人情報を保護するためにもこれらを完全に消去する必要があります。

ディスクの管理

- **新しいディスクの追加**

新しいディスクの追加ウィザードを使用すると、コンピュータに新しいハードディスク ドライブを容易に追加できます。パーティションを作成しフォーマットして、このハードディスク ドライブを使用できるようにします。

イメージのマウント

- **イメージのマウント**

作成済みのイメージを参照できるようになります。パーティション イメージに一時的なドライブ文字を割り当てて、通常の論理ドライブとしてアクセスすることができます。

- **イメージのアンマウント**

イメージを参照するために作成した一時的な論理ドライブのマウントを解除できます。

5.1 Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ

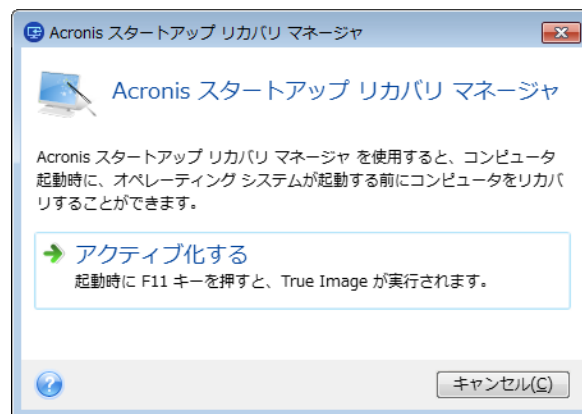
動作

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用すると、オペレーティング システムを読み込まずに Acronis True Image 2015 Personal を起動することができます。この機能を利用すれば、オペレーティング システムが起動しなくなったときでも、Acronis True Image 2015 Personal を使用して、破損したパーティションをリカバリすることができます。Acronis のリムーバブル メディアからコンピュータを起動する場合とは異なり、Acronis True Image 2015 Personal の起動時には独立したメディアやネットワーク接続は必要ありません。

アクティブ化する方法

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化するには

1. Acronis True Image 2015 Personal を起動します。
2. [ツールとユーティリティ] タブで、[Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ] をクリックします。
3. 表示されたウィンドウで、[アクティブ化する] をクリックします。



使用方法

障害が発生した場合は、コンピュータの電源を入れて、「Press F11 for Acronis Startup Recovery Manager」というメッセージが表示されたら F11 キーを押します。スタンドアロン版の Acronis True Image 2015 Personal が起動します。このスタンドアロン版と完全版との違いはごくわずかです。

追加情報

スタンドアロンの Acronis True Image 2015 Personal で使用されるドライブ文字は、Windows のドライブ文字とは異なることがあります。たとえば、スタンドアロン版の Acronis True Image 2015 Personal の D: ディスクが、Windows の E: ディスクに対応していることもあります。ディスクのラベル、パーティション サイズ、ファイル システム、ドライブの性能、メ

ーカー、およびモデル番号に関する情報を参照することによって、ディスクおよびパーティションを正しく特定することができます。

Try&Decide がオンの場合、以前にアクティブ化した Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用することはできません。Try モードでコンピュータを再起動すると、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを再び利用できるようになります。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャの、他のローダーに対する影響

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化すると、MBR (マスター ブート レコード) がスタートアップ リカバリ マネージャのブート コードで上書きされます。サードパーティ製のブート マネージャがインストールされている場合は、スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化した後に、そのブート マネージャを再度アクティブ化する必要があります。Linux のローダー (LiLo、GRUB など) を使用している場合は、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化する前に、ローダーを MBR ではなく、Linux の root (または boot) パーティションのブート レコードにインストールすることをお勧めします。

UEFI ブート メカニズムは BIOS のものと異なります。任意の OS ローダーまたはその他のブート プログラムは、対応するローダーへのパスを定義する、独自のブート変数を持ちます。すべてのローダーは、EFI システム パーティションと呼ばれる特別なパーティションに保存されます。UEFI ブート システムで、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化すると、独自のブート変数が書き込まれ、ブート順序が変更されます。この変数は変数のリストに追加されますが、リスト内の変数自体は変更されません。すべてのローダーは独立しており、相互に影響しないため、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャのアクティブ化の前後で、特に変更は必要ありません。

5.2 ブータブル レスキュー メディアの作成

緊急用起動メディアを使用して、ベアメタル システムまたは異常終了したコンピュータで Acronis True Image 2015 Personal を起動できます。Windows 以外のコンピュータのハードディスクをバックアップすることもできます。セクタ単位モードでディスクをイメージ作成することにより、すべてのデータをバックアップにコピーします。これには、スタンドアロン版の Acronis True Image 2015 Personal がインストールされたブータブル メディアが必要です。

ブータブル メディアの取得方法

- パッケージ版の製品のインストール用 CD を使用します。
 - Acronis メディア ビルダでメディアをブータブルにします。
 - 空の CD
 - 空の DVD
 - USB フラッシュ ドライブ
- 注意: データが保存されていても、そのデータが変更されることはありません。
- .iso イメージ ファイルを作成し、後で CD または DVD に書き込みます。
 - Acronis プラグインを含む WinPE ベースのメディアを作成します。

5.2.1 Acronis メディア ビルダ

Acronis メディア ビルダでは、USB フラッシュ ドライブまたは空の CD/DVD をブータブル にすることができます。Windows が起動できない場合は、ブータブル メディアを使用して スタンドアロン版の True Image を実行し、コンピュータをリカバリします。

以下のさまざまなタイプのブータブル メディアを作成できます。

- **Acronis ブータブル レスキュー メディア**
通常は、このタイプを選択してください。
- **工場出荷時の設定を含むブータブル メディア**
この機能は、コンピュータの Acronis セキュア ゾーン に、このコンピュータの工場出荷時の構成がバックアップされている場合のみ使用可能です。このバックアップは、通常、コンピュータをエンド ユーザーに提供したハードウェア サプライヤが作成し、Acronis セキュア ゾーン に保存しています。
工場出荷時の設定を含むブータブル メディアは特別な種類のレスキュー ブータブル メディアで、コンピュータの工場出荷時の構成がバックアップされています。このメディアを使用して、コンピュータを工場出荷時の設定に戻すことができます。ただし、これによりコンピュータ上の個人データやプログラムはすべて消去されます。
工場出荷時の設定を含むブータブル メディアは、新品のコンピュータに付属している場合があります。ただし、ハードウェア サプライヤによってメディアが提供されていない場合や、何らかの理由でメディアがないという場合は、緊急時に備えて、工場出荷時のブータブル メディアを作成し、保存することができます。
- **Acronis プラグインを含む WinPE ベースのメディア**
プレインストール環境では Windows ドライバが使用されているので、プレインストール環境で Acronis True Image 2015 Personal を実行すると、コンピュータのハードウェアとの互換性が向上する場合があります。
Acronis ブータブル レスキュー メディアからコンピュータを起動できなかった場合は、このタイプのメディアを作成することをお勧めします。
このオプションを使用するには、以下のコンポーネントをインストールしておく必要があります。
 - Acronis メディア アドオン。このアドオンは Acronis のウェブサイトからダウンロードできます。
 - 次のいずれかを選択します。
 - Windows Automated Installation Kit (AIK) 。
WinPE 3.0 を作成するにはこのコンポーネントが必要です。
 - Windows Assessment and Deployment Kit (ADK) 。
WinPE 4.0 と WinPE 5.0 を作成するにはこのコンポーネントが必要です。

メモ

- Acronis True Image 2015 Personal をアップグレードするたびに、新たにブータブル メディアを作成することをお勧めします。
- 非光学メディアを使用する場合、メディアのファイル システムは FAT16 または FAT32 でなければなりません。

- Acronis メディア ビルダでは、x86 WinPE 3.0、WinPE 4.0、および WinPE 5.0 のみがサポートされます。この WinPE ディストリビューションは、x64 ハードウェア上でも動作します。
- WinPE 3.0 に基づく PE イメージが動作するには、256 MB 以上の RAM が必要です。WinPE 4.0 と WinPE 5.0 の場合は、512 MB 以上の RAM が必要です。
- Acronis メディア ビルダが USB フラッシュ ドライブを認識しない場合は、Acronis ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.acronis.com/content/1526>) で説明されている手順を試してください。
- ブータブル メディアから起動する場合は、Ext2/Ext3/Ext4、ReiserFS、Linux SWAP ファイル システムが採用されているディスクやパーティションへのバックアップを行うことはできません。
- レスキュー メディアから起動していてスタンドアロン版の Acronis True Image 2015 Personal を使用している場合は、Windows XP 以降のオペレーティング システムの暗号化機能で暗号化されたファイルやフォルダをリカバリすることはできません。詳細については、「バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定 『32ページ』」を参照してください。これに対し、Acronis True Image 2015 Personal の暗号化機能を使用して暗号化されたバックアップはリカバリすることができます。

5.2.1.1 ブータブル メディアの作成

ブータブル メディアを作成する手順は、次のとおりです。

1. USB フラッシュ ドライブを差し込むか、空の CD または DVD を挿入します。
2. Acronis True Image 2015 Personal を起動します。
3. [ツール] セクションの [レスキュー メディア ビルダ] をクリックします。
4. 作成するメディア タイプを選択します。詳細については、「Acronis メディア ビルダ」を参照してください。
5. メディアの作成先を選択します。
 - **CD**
 - **DVD**
 - **USB フラッシュ ドライブ** (Acronis ブータブル レスキュー メディアの場合のみ選択可能)

サポートされていないファイル システムがドライブにある場合、Acronis True Image によって FAT ファイル システムへのフォーマットが自動的に選択されます。

警告 完全にフォーマットすると、ディスク上のデータはすべて消去されます。

 - **ISO イメージ ファイル**

.iso ファイルの名前とターゲット フォルダを指定する必要があります。

.iso ファイルが作成されたら、CD または DVD に書き込むことができます。たとえば、Windows 7 以降では、内蔵の書き込みツールでこの操作を実行できます。Windows エクスプローラで、作成した ISO イメージ ファイルをダブルクリックし、[書き込み] をクリックします。
 - **WIM イメージ ファイル** (WinPE ベースのメディアの場合のみ選択可能)

Acronis True Image によって、Acronis プラグインが Windows AIK または Windows ADK から .wim ファイルに追加されます。新しい .wim ファイルの名前とターゲットフォルダを指定する必要があります。

.wim ファイルを使用してブータブル メディアを作成するには、まずそのファイルを .iso ファイルに変換しておく必要があります。詳細については、「.wim ファイルからの .iso ファイルの作成 『68ページ』」を参照してください。

6. **[実行]** をクリックします。

5.2.1.2 ブータブル メディアの起動パラメータ

ブータブル メディアの起動パラメータを設定することにより、ブータブル メディアの起動オプションを構成し、さまざまなハードウェアとの互換性を向上させることができます。

nousb、nomouse、noapic などのオプションが利用できます。上級ユーザー向けに用意されているパラメータです。ブータブル メディアからの起動をテスト中にハードウェアの互換性の問題が発生した場合は、製品のサポート センターにお問い合わせください。

起動パラメータを追加する手順は、次のとおりです。

- **[パラメータ]** フィールドにコマンドを入力します。
- 起動パラメータを指定したら、**[次へ]** をクリックして先に進みます。

Linux カーネルを起動する前に適用できる追加パラメータ

説明

次のパラメータを使用すると、Linux カーネルを特殊モードで読み込むことができます。

- **acpi=off**

ACPI を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **noapic**

APIC (Advanced Programmable Interrupt Controller) を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **nousb**

USB モジュールの読み込みを無効にします。

- **nousb2**

USB 2.0 のサポートを無効にします。このオプションを指定しても、USB 1.1 デバイスは動作します。このオプションを指定すると、USB 2.0 モードでは動作しない一部の USB ドライブを USB 1.1 モードで使用できます。

- **quiet**

このパラメータはデフォルトで有効になっており、起動メッセージは表示されません。このパラメータを削除すると、Linux カーネルが読み込まれるときに起動メッセージが表示されるようになり、Acronis プログラムが実行される前にコマンド シェルが提供されます。

- **nodma**

すべての IDE ディスク ドライブの DMA を無効にします。カーネルが一部のハードウェアでフリーズするのを防ぎます。

- **nofw**

FireWire (IEEE1394) のサポートを無効にします。

- **nopcmcia**

PCMCIA ハードウェアの検出を無効にします。

- **nomouse**

マウスのサポートを無効にします。

- **[モジュール名]=off**

モジュールを無効にします (例: **sata_sis=off**) 。

- **pci=bios**

PCI BIOS の使用を強制し、ハードウェア デバイスには直接アクセスしません。たとえば、コンピュータが標準以外の PCI ホスト ブリッジを備えているような場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=nobios**

PCI BIOS の使用を無効にします。ハードウェアへの直接アクセスのみを許可します。たとえば、BIOS が原因で起動時にクラッシュが発生すると考えられる場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=biosirq**

PCI BIOS の呼び出しを使用して、割り込みルーティング テーブルを取得します。これらの呼び出しは、一部のコンピュータではバグがあり、使用するとコンピュータがフリーズしますが、他のコンピュータでは、割り込みルーティング テーブルを取得する唯一の方法です。カーネルが IRQ を割り当てることができない場合、またはマザーボード上のセカンダリ PCI バスを検出できない場合は、このオプションを試してください。

- **vga=ask**

現在のビデオ カードで使用できるビデオ モードの一覧を取得し、ビデオ カードとモニタに最適なビデオ モードを選択できるようにします。自動的に選択されたビデオ モードがお使いのハードウェアに適合しない場合は、このオプションを試してください。

5.2.1.3 ドライバを含むカスタム WinPE 3.0 ISO の作成

Acronis プラグインを含む基本的な WinPE ディスクに、ストレージ デバイス コントローラ などのお使いのハードウェアのドライバが含まれていないことがあります。Windows 7 のユーザーは、そのようなドライバを基本的な WinPE 3.0 イメージ(WIM)に追加してから、Acronis プラグインを含む ISO ファイルを作成することができます。

注意.inf ファイル拡張子が付いたドライバのみを追加できます。

次の手順は、[http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/dd799244\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/dd799244(WS.10).aspx) にある MSDN の記事を基にしています。

カスタム Windows PE イメージを作成するには、次の手順に従います。

1. [スタート] メニューで、[Microsoft Windows AIK] をクリックして、次に [Deployment ツールのコマンド プロンプト] を右クリックして [管理者として実行] を選択します。

2. **copype.cmd** スクリプトを実行し、Windows PE ファイルが格納されたフォルダを作成します。たとえば、コマンド プロンプトから次のように入力します。

```
copype x86 C:\winpe_x86
```

3. DISM ツールを使用して基本イメージをローカル ディレクトリにマウントします。たとえば、次のようになります。

```
Dism /Mount-Wim /WimFile:C:\winpe_x86\winpe.wim /index:1  
/MountDir:C:\winpe_x86\mount
```

4. Dism コマンドと /Add-Driver オプションを使用してハードウェア ドライバを追加します。たとえば、次のような場合が考えられます。

```
Dism /image:C:\winpe_x86\mount /Add-Driver /driver:C:\drivers\mydriver.inf
```

5. 追加する必要がある他のすべてのドライバについて手順 4 を繰り返します。
6. Dism コマンドと /Unmount-Wim /Commit オプションを使用して変更をコミットします。

```
Dism /Unmount-Wim /MountDir:C:\winpe_x86\mount /Commit
```

コマンド プロンプトは終了しません。

7. Acronis メディア ビルダを起動して、カスタム .wim ファイルに Acronis プラグインを追加します。詳細については、「ブータブル メディアの作成 『65ページ』」を参照してください。
8. 生成された .wim ファイルから PE イメージ (.iso ファイル) を作成します。詳細については、「.wim ファイルからの .iso ファイルの作成」を参照してください。

5.2.1.4 .wim ファイルからの .iso ファイルの作成

.wim ファイルを使用してブータブル メディアを作成するには、まずそのファイルを .iso ファイルに変換しておく必要があります。

生成された .wim ファイルから PE イメージ (.iso ファイル) を作成する手順は、次のとおりです。

1. [スタート] メニューから、[Microsoft Windows AIK] → [Windows PE ツールのコマンド プロンプト] を選択します。

Windows 7 の環境の場合は、[スタート] メニューから、[Microsoft Windows AIK] → [Deployment ツールのコマンド プロンプト] を選択します。

WinPE 4.0 ISO を作成する場合は、[スタート] メニューから [Windows キット] → [Windows ADK] → [展開およびイメージング ツール環境] を選択します。

2. **copype.cmd** スクリプトを実行し、Windows PE ファイルが格納されたフォルダを作成します。たとえば、コマンド プロンプトから次のように入力します。

```
copype x86 c:\winpe_x86
```

3. Windows PE フォルダ内のデフォルトの boot.wim ファイルを、新しく作成した .wim ファイル (たとえば、AcronisMedia.wim) に置き換えます。AcronisMedia.wim ファイルが c:¥ にある場合は、次のように入力します。

WinPE 3.0 の場合

```
copy c:\AcronisMedia.wim c:\winpe_x86\ISO\sources\boot.wim
```

WinPE 4.0 または WinPE 5.0 の場合

```
copy "c:\AcronisMedia.wim" c:\winpe_x86\media\sources\boot.wim
```

4. **Oscdimg** ツールを使用します。.iso ファイルを作成するには、次のように入力します。

```
oscdimg -n -bc:\winpe_x86\etfsboot.com c:\winpe_x86\ISO  
c:\winpe_x86\winpe_x86.iso
```

5. サードパーティのツール（Nero など）を使用して .iso ファイルを CD に書き込むと、Acronis True Image 2015 Personal が格納されたブータブル Windows PE ディスクが作成されます。

5.2.2 必要なときにレスキュー メディアを確実に使用できるようにする

コンピュータを正常にリカバリできるように、レスキュー メディアからコンピュータを起動できることをテストしておく必要があります。また、レスキュー メディアがコンピュータのデバイス（ハード ドライブ、マウス、キーボード、ネットワーク アダプタなど）をすべて認識することを確認する必要があります。

ブータブル CD を含むパッケージ版の製品を購入された場合は、その CD をテストしてください。

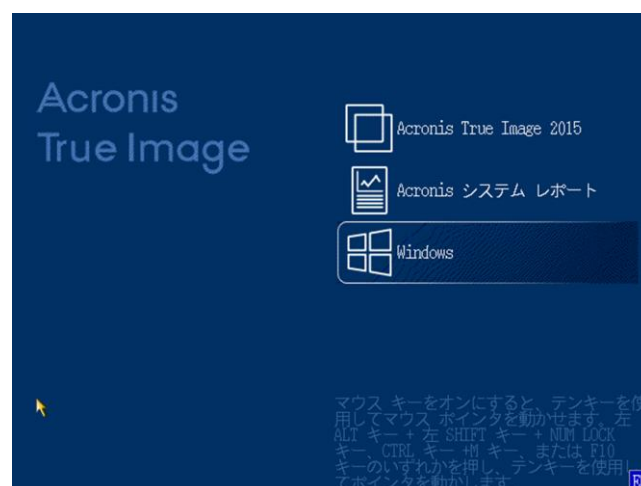
レスキュー メディアをテストするには、次の手順を実行します。

バックアップの保存に外付けドライブを使用する場合、レスキュー CD から起動する前にそのドライブを接続しておく必要があります。接続されていないと、ドライブが検出されない場合があります。

1. レスキュー メディアから起動できるように、コンピュータを設定します。次に、レスキュー メディア デバイス（CD-ROM/DVD-ROM ドライブまたは USB スティック）が最初のブート デバイスになっていることを確認します。「BIOS での起動順の並び替え」を参照してください。
2. レスキュー CD がある場合は、「Press any key to boot from CD」というプロンプトが表示されたらすぐに任意のキーを押して CD からの起動を開始します。5 秒以内にキーを押さなかった場合は、コンピュータを再起動する必要があります。
3. ブート メニューが表示されたら、**True Image** を選択します。

ワイヤレス マウスが動作しない場合は、有線のマウスに交換してみてください。キーボードについても、同様です。

予備のマウスやキーボードがない場合は、Acronis サポートにご連絡ください。ご利用のマウスとキーボードのモデルに対応したドライブを含むカスタム レスキュー CD を作成します。適切なドライブを見つけてカスタム レスキュー CD を作成するには、ある程度の時間がかかることをご了承ください。また、一部のモデルには、対応できないことがあります。



4. プログラムが開始されたら、バックアップからいくつかのファイルをリカバリしていただくことをお勧めします。リカバリをテストすることによって、そのレスキュー CD をリカバリに使用できることを確認することができます。さらに、システムのすべてのハードディスク ドライブが検出されているかどうかを確認できます。

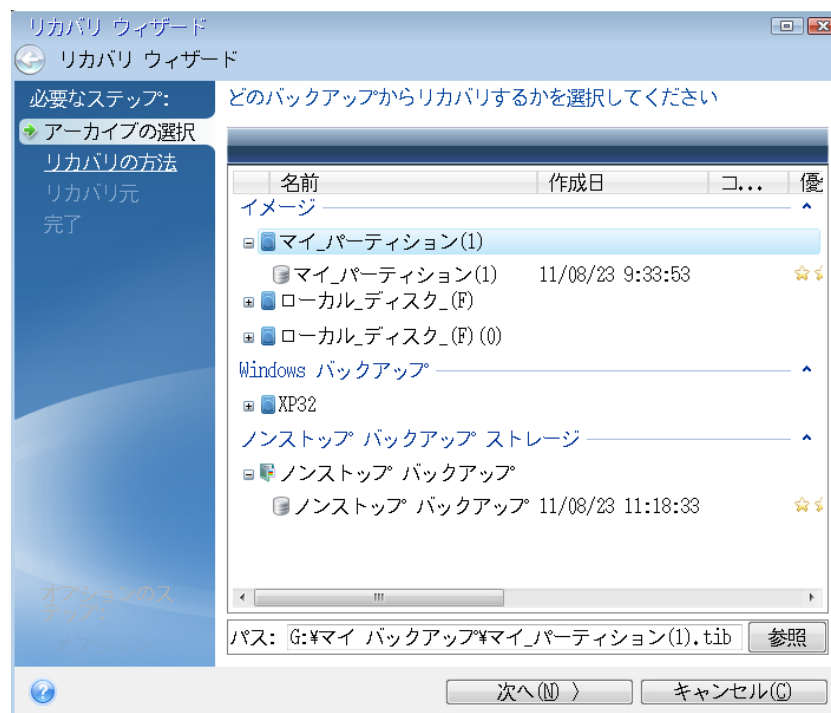
予備のハードディスク ドライブがある場合は、このハードディスク ドライブにシステム パーティションをリカバリできるかどうかをテストすることを強くお勧めします。

リカバリをテストし、同時にドライブとネットワーク アダプタをチェックするには、次の手順を実行します。

1. ファイルのバックアップがある場合、ツールバーで **[リカバリ]** -> **[ファイルのリカバリ]** をクリックして、リカバリ ウィザードを起動します。

ディスクとパーティションのバックアップだけがある場合でも、リカバリ ウィザードを開始して同様の手順を実行します。その場合、**[リカバリの方法]** のステップで **[指定したファイルおよびフォルダをリカバリする]** を選択してください。

2. **[アーカイブのロケーション]** のステップでバックアップを選択し、**[次へ]** をクリックします。

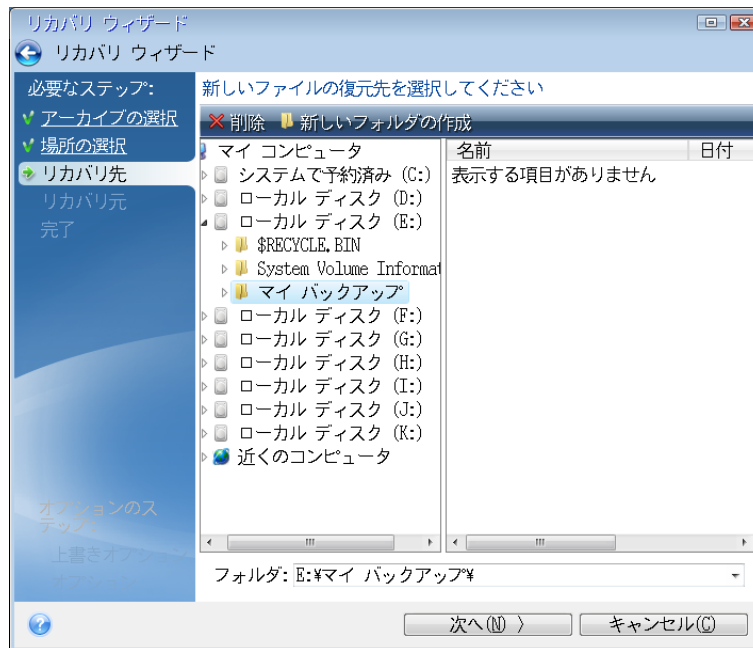


3. レスキュー CD でファイルをリカバリする場合、リカバリされるファイルには新しいロケーションしか選択できません。したがって、**[ロケーションの選択]** ステップでは **[次へ]** をクリックするのみの作業になります。
4. **[リカバリ先]** ウィンドウが開いたら、**[マイ コンピュータ]** の下にすべてのドライブが表示されていることを確認します。

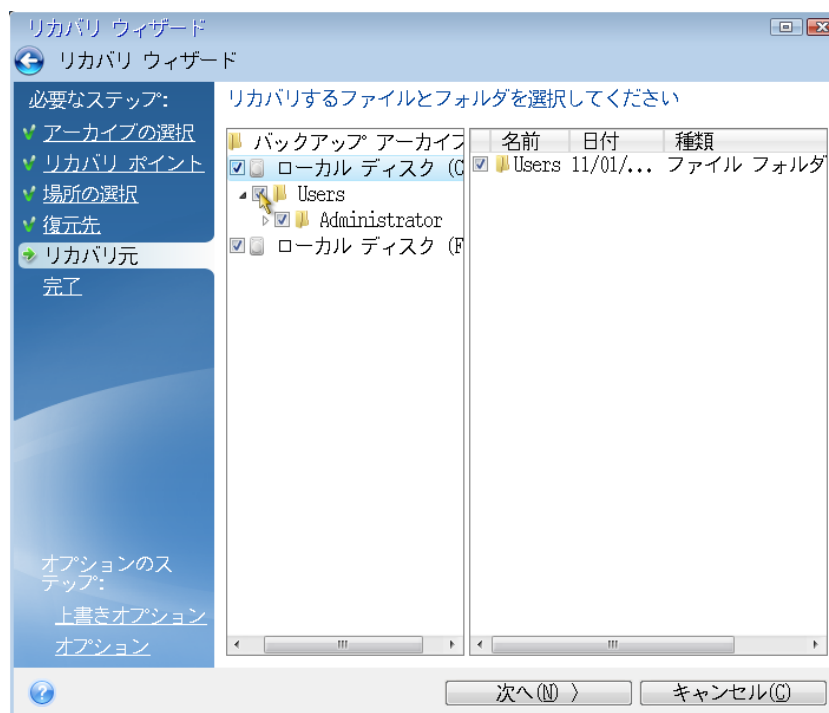
バックアップをネットワークに保存する場合は、ネットワークにアクセスできることも確認してください。

ネットワークにコンピュータがまったく表示されないが **[マイ コンピュータ]** の下に **[近くのコンピュータ]** アイコンが表示されている場合は、ネットワーク設定を手動で指定します。手動で指定するには、**[ツールとユーティリティ]** -> **[オプション]** -> **[ネットワーク アダプタ]** で使用できるウィンドウを開きます。

[マイ コンピュータ] で [近くのコンピュータ] アイコンが表示されない場合は、ネットワーク カードまたは Acronis True Image 2015 Personal に付属しているカード ドライブに問題がある可能性があります。



5. ファイルの保存場所を選択して、[次へ] をクリックします。
6. リカバリするファイルのチェック ボックスをいくつかオンにして、[次へ] をクリックします。



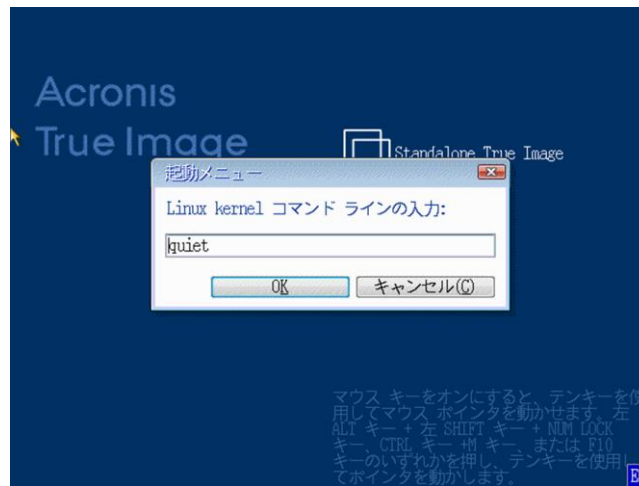
7. [概要] ウィンドウの [実行] をクリックして、リカバリを開始します。
8. リカバリが終了したら、スタンドアロンの Acronis True Image 2015 Personal を終了します。

これで、必要な場合にレスキュー CD が役に立つことがお分かりかと思います。

5.2.2.1 レスキュー メディアからの起動時におけるビデオ モードの選択

レスキュー メディアからの起動時には、ビデオ カードおよびモニタの仕様に応じて最適なビデオ モードが自動で選択されます。ただし、使用しているハードウェアに適していないビデオ モードが選択される場合もあります。このような場合は、次の手順で適したビデオ モードを選択できます。

1. レスキュー メディアからの起動を開始します。ブート メニューが表示されたら、**True Image** の項目にマウス ポインタを置いて **F11** キーを押します。
2. コマンド ラインが表示されたら、「vga=ask」と入力して **[OK]** をクリックします。



3. ブート メニューで **True Image** を選択してレスキュー メディアからの起動を続けます。使用できるビデオ モードを表示するには、該当するメッセージが表示されたら **Enter** キーを押します。
4. 使用しているモニタに最適なビデオ モードを選択し、その番号をコマンド ラインに入力します。たとえば、**338** と入力すると **1600x1200x16** のビデオ モードが選択されます（下図参照）。

```
333 1024x768x16 VESA      334 1152x864x16 VESA      335 1280x960x16 VESA
336 1280x1024x16 VESA    337 1400x1050x16 VESA    338 1600x1200x16 VESA
339 1792x1344x16 VESA    33A 1856x1392x16 VESA    33B 1920x1440x16 VESA
33C 320x200x32 VESA      33D 320x400x32 VESA      33E 640x400x32 VESA
33F 640x480x32 VESA      340 800x600x32 VESA      341 1024x768x32 VESA
342 1152x864x32 VESA    343 1280x960x32 VESA    344 1280x1024x32 VESA
345 1400x1050x32 VESA    346 1600x1200x32 VESA    347 1792x1344x32 VESA
348 1856x1392x32 VESA    349 1920x1440x32 VESA    34A 1366x768x8 VESA
34B 1366x768x16 VESA     34C 1366x768x32 VESA     34D 1680x1050x8 VESA
34E 1680x1050x16 VESA    34F 1680x1050x32 VESA    350 1920x1200x8 VESA
351 1920x1200x16 VESA    352 1920x1200x32 VESA    353 2048x1536x8 VESA
354 2048x1536x16 VESA    355 2048x1536x32 VESA    356 320x240x8 VESA
357 320x240x16 VESA      358 320x240x32 VESA      359 400x300x8 VESA
35A 400x300x16 VESA      35B 400x300x32 VESA      35C 512x384x8 VESA
35D 512x384x16 VESA      35E 512x384x32 VESA      35F 854x480x8 VESA
360 854x480x16 VESA      361 854x480x32 VESA      362 1280x720x8 VESA
363 1280x720x16 VESA     364 1280x720x32 VESA     365 1920x1080x8 VESA
366 1920x1080x16 VESA    367 1920x1080x32 VESA    368 1280x800x8 VESA
369 1280x800x16 VESA     36A 1280x800x32 VESA     36B 1440x900x8 VESA
36C 1440x900x16 VESA     36D 1440x900x32 VESA     36E 720x480x8 VESA
36F 720x480x16 VESA      370 720x480x32 VESA      371 720x576x8 VESA
372 720x576x16 VESA      373 720x576x32 VESA      374 800x480x8 VESA
375 800x480x16 VESA      376 800x480x32 VESA      377 1280x768x8 VESA
378 1280x768x16 VESA     379 1280x768x32 VESA

Enter a video mode or "scan" to scan for additional modes: _
```


5. Acronis True Image 2015 Personal が起動するまで待ってから、モニタ上の [ようこそ] 画面の表示状態が適していることを確認します。

他のビデオ モードをテストするには、Acronis True Image 2015 Personal を閉じてから上記の手順を繰り返してください。

ハードウェアに最適なビデオ モードを見つけたら、そのビデオ モードを自動的に選択する新しいブータブル レスキュー メディアを作成できます。

これを行うには、Acronis メディア ビルダを起動して目的のメディア コンポーネントを選択し、[ブータブル メディアの起動パラメータ] のステップにおいてコマンド ラインに接頭辞「0x」を付加してモードの番号を入力（この例では「0x338」）してから、通常通りにメディアを作成します。

5.3 新しいハードディスクの追加

注意: ご使用の Acronis True Image 2015 Personal エディションではこの機能は提供されていないことがあります。

ハードディスクにデータ（家族の写真や動画など）を保存するための十分な空き領域が存在しない場合は、古いハードディスクを新しい大容量のハードディスクに交換するか（新しいディスクへのデータ転送については前章で説明しています）、古いハードディスクをシステム用として残し、データ保存専用の新しいハードディスクを追加します。コンピュータに別のハードディスクを追加する空きベイが存在する場合は、ハードディスク ドライブを追加する方が、ハードディスクのクローンを作成するよりも簡単です。

新しいハードディスクを追加するには、まずコンピュータにハードディスクを取り付ける必要があります。

新しいハードディスクを追加する手順は、次のとおりです。

- [ツールとユーティリティ] タブをクリックし、[新しいディスクの追加] をクリックします。
- 新しいディスクの追加ウィザードのステップに従います。

32 ビット バージョンの Windows XP を使用している場合、このオペレーティング システムでは GPT ディスクがサポートされないため、ウィザードには [初期化オプション] のステップが表示されません。

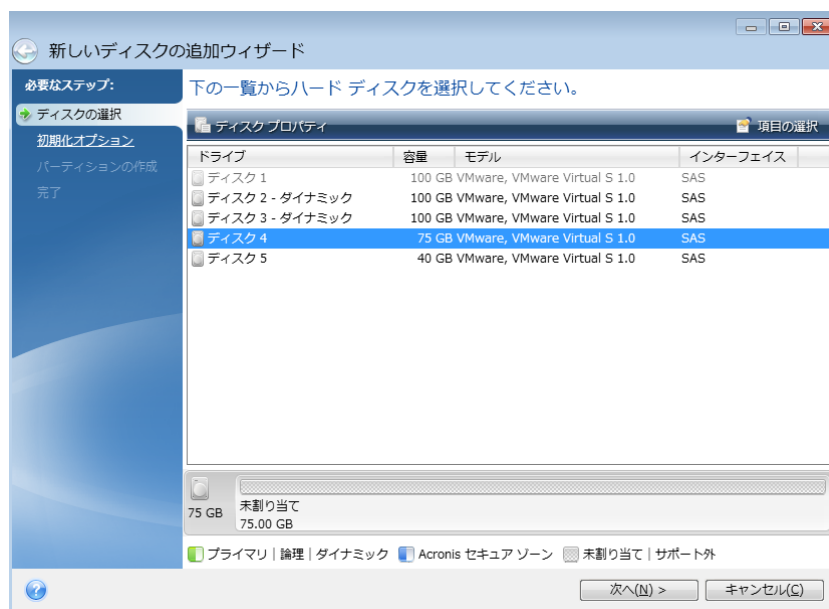
セクションの内容

ハードディスクの選択.....	73
初期化方法の選択.....	74
新しいパーティションの作成.....	75

5.3.1 ハードディスクの選択

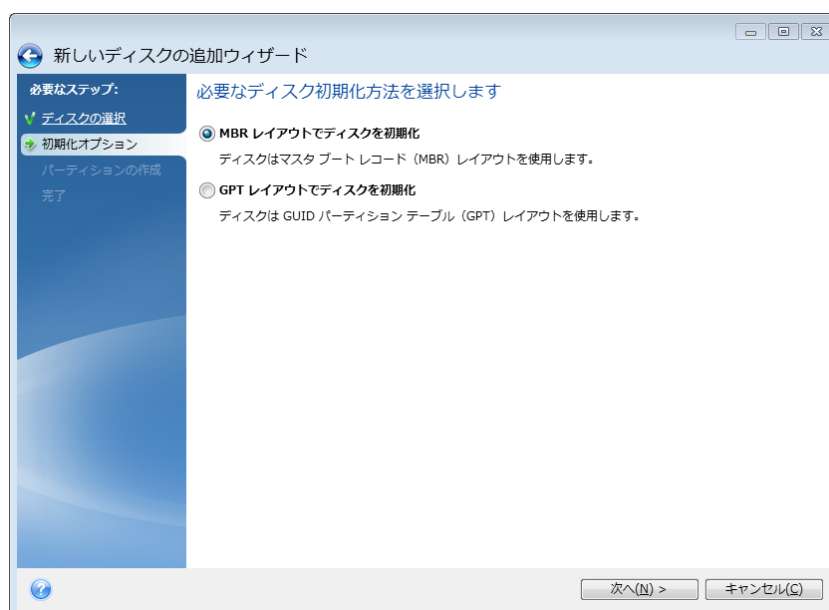
コンピュータに追加したハードディスクを選択します。複数のハード ディスクを追加した場合は、そのうちの 1 台を選択し、[次へ] をクリックして先に進みます。後で、新しいディスクの追加ウィザードを起動し、別のディスクを追加することもできます。

新しいディスクにパーティションがあると、これらのパーティションは削除されるという警告メッセージが Acronis True Image 2015 Personal に表示されます。



5.3.2 初期化方法の選択

Acronis True Image 2015 Personal は MBR と GPT の両方のパーティショニングに対応しています。GUID パーティション テーブル (GPT) は、ハード ディスクの新しいパーティショニング方法であり、従来の MBR よりもパーティショニング方法として優れています。オペレーティング システムが GPT ディスクをサポートする場合、新しいディスクを GPT ディスクとして初期化することを選択できます。



- GPT ディスクを追加するには、**[GPT レイアウトでディスクを初期化する]** をクリックします。

- MBR ディスクを追加するには、**[MBR レイアウトでディスクを初期化する]** をクリックします。

32 ビットバージョンの Windows XP を使用している場合、初期化方法として GPT を使用できないため、**初期化オプション**の手順は表示されません。

該当の初期化方法を選択したら、**[次へ]** をクリックします。

5.3.3 新しいパーティションの作成

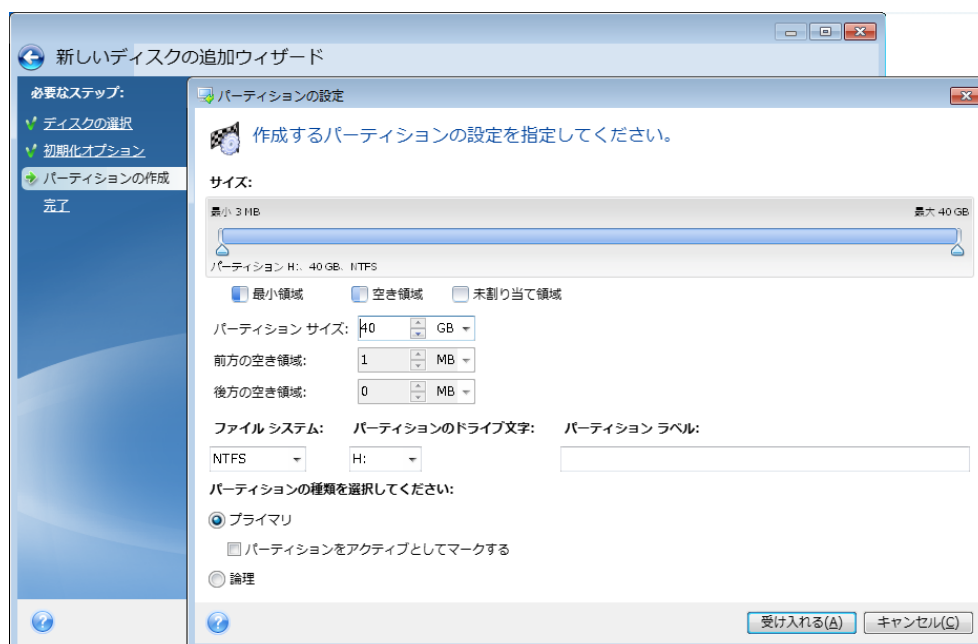
ハードディスクの空き領域を使用するには、パーティションが作成されている必要があります。パーティショニングは、ハードディスクの空き領域を、パーティションと呼ばれる論理領域に分割する処理です。パーティションごとに、ドライブ文字を割り当てたり、独自のファイルシステムをインストールしたりして、別々のディスクとして利用することができます。

新しいパーティションを作成する手順は、次のとおりです。

1. ウィザードの **[パーティションの作成]** で未割り当て領域を選択してから、**[新しいパーティションを作成する]** をクリックします。
2. 作成するパーティションについて、以下の設定を指定します。
 - サイズと位置
 - ファイルシステム
 - パーティションの種類（MBR ディスクでのみ使用可能）
 - パーティションのドライブ文字とラベル

詳細については、「パーティションの設定 『76ページ』」を参照してください。

3. **[確定]** をクリックします。



5.3.3.1 パーティションの設定

サイズ

パーティションのサイズを変更するには、以下のいずれかを実行します。

- パーティションの境界にマウス カーソルを置きます。カーソルが二重矢印になったら、この二重矢印をドラッグしてパーティションのサイズを拡大または縮小します。
- 希望するパーティションのサイズを **[パーティション サイズ]** フィールドに入力します。

パーティションを移動するには、以下のいずれかを実行します。

- パーティションを新しい位置までドラッグします。
- 希望するサイズを **[前方の空き領域]** フィールドまたは **[後方の空き領域]** フィールドに入力します。

パーティションを作成する場合は、作成パーティションの前にシステムのニーズに合わせて未割り当て領域が予約されることがあります。

ファイル システム

パーティションをフォーマットしないままにするか、または次のファイル システムの種類から選択することができます。

- **[NTFS]** は、Windows NT、Windows 2000、Windows XP、Windows Vista、Windows 7 のネイティブのファイル システムです。これらのオペレーティング システムを使用している場合に選択してください。Windows 95/98/Me および DOS からは、NTFS パーティションにアクセスできないことに注意してください。
- **[FAT32]** は、FAT ファイル システムの 32 ビット版で、最大 2 TB のボリュームをサポートします。
- **[FAT 16]** は、DOS ネイティブのファイル システムです。ほとんどのオペレーティング システムはこのファイル システムを認識します。ただし、ディスク ドライブのサイズが 4 GB を超える場合は、FAT16 でフォーマットすることはできません。
- **[Ext2]** は、Linux ネイティブのファイル システムです。十分に高速ですが、ジャーナリング ファイル システムではありません。
- **[Ext3]** は、Red Hat Linux Version 7.2 で正式に導入された、Linux のジャーナリング ファイル システムです。Ext2 との上位および下位互換性があります。複数のジャーナリング モードを備え、32 ビットおよび 64 ビット アーキテクチャの双方で、プラットフォームに依存しない幅広い互換性を実現します。
- **[Ext4]** は、Linux の新しいファイル システムです。このシステムでは、ext3 よりも機能が拡張されています。このシステムでは、ext2 および ext3 に対する下位互換性が完全に維持されています。ただし、ext3 の ext4 に対する上位互換性は限定的です。
- **[ReiserFS]** は、Linux のジャーナリング ファイル システムです。一般的に Ext2 より信頼性が高く高速です。Linux のデータ パーティションにはこれを選択します。
- **[Linux Swap]** は、Linux 用のスワップ パーティションです。Linux 用のスワップ領域を広げる必要がある場合に選択してください。

ドライブ文字

パーティションに割り当てるドライブ文字を選択します。**[自動]** を選択すると、アルファベット順で最初の未使用のドライブ文字が割り当てられます。

パーティション ラベル

パーティション ラベルは、パーティションを簡単に識別できるように割り当てる名前です。たとえば、オペレーティング システムがインストールされているパーティションは **System**、データが保存されているパーティションは **Data**、などのように名前を付けます。パーティション ラベルはオプションの属性です。

パーティションの種類（これらの設定は、MBR ディスクのみで利用できます）

新しいパーティションの種類を「プライマリ」または「論理」として指定することができます。

- **プライマリ**: このパーティションからコンピュータを起動できるようにする場合は、このパラメータを選択します。それ以外の場合は、論理ドライブとして作成することをお勧めします。各ドライブを、4 つのプライマリ パーティションだけにするか、または 3 つのプライマリ パーティションと 1 つの拡張パーティションにすることができます。

注意: 複数のプライマリ パーティションがある場合に、アクティブになるのは一度に 1 つだけです。他のプライマリ パーティションは隠しパーティションとなり、オペレーティング システムからはアクセスできなくなります。

- **パーティションをアクティブとしてマークする**: このパーティションにオペレーティング システムをインストールする予定の場合は、このチェック ボックスをオンにします。
- **[論理]**: このパーティションにオペレーティング システムをインストールして起動する予定がない場合は、このパラメータを選択します。論理ドライブは、パーティション分割されて独立した単位として割り当てられた物理ディスクの一部ですが、それぞれ別のドライブとして機能します。

5.4 Acronis 容量拡張マネージャ

Acronis 容量拡張マネージャ (ECM) を使用すると、オペレーティング システム (OS) で MBR パーティション スタイルによる大容量のディスクをサポートできるようになります。2 TB を超えるディスク領域を使用できます。この空き領域は、異なるディスクとして認識され、オペレーティング システムおよびアプリケーションから、通常の物理ハード ディスクと同様に取り扱えるようになります。

必要な場合

2 TB を超えるハード ディスクがあり、OS でディスク領域全体が認識されない場合、以下のいずれかのオプションによりこの問題を解決できます。

- 容量拡張マネージャを使用します。大容量ディスクのデータを削除しないため、このツールはすべての場合に使用できます。そのため、大容量ディスクにオペレーティング システムや有用なデータが格納されている場合は、このツールを使用することをお勧めします。詳細については以下を参照してください。
- MBR ディスクを GPT ディスクに変換します。これを実行する最も簡単な方法は、Windows 内蔵の**ディスク管理**ユーティリティを使用することです。このユーティリティでは、ディスクのすべてのデータが GPT に変換するときに消去されることに注意してください。

下の表は選択するオプションを見つけるために役立ちます。この表は容量が 2 TB より大きいディスクにのみ該当します。

	OS またはデータを含む MBR ディスク	OS またはデータのない MBR ディスクをクリア
Windows XP (x32)	ECM を使用	ECM を使用
Windows XP (x64)	ECM を使用	GPT への変換
Windows Vista	ECM を使用	GPT への変換
Windows 7	ECM を使用	GPT への変換
Windows 8	ECM を使用	GPT への変換

動作

Acronis 容量拡張マネージャ ウィザードには、2 TB を超える（未割り当てまたは MBR パーティション スタイルの）すべてのハード ディスクが表示されます。Windows によって認識され割り当てられたディスク領域を確認できます。この領域は、ウィザードでは [Windows ネイティブ容量] と呼ばれます。

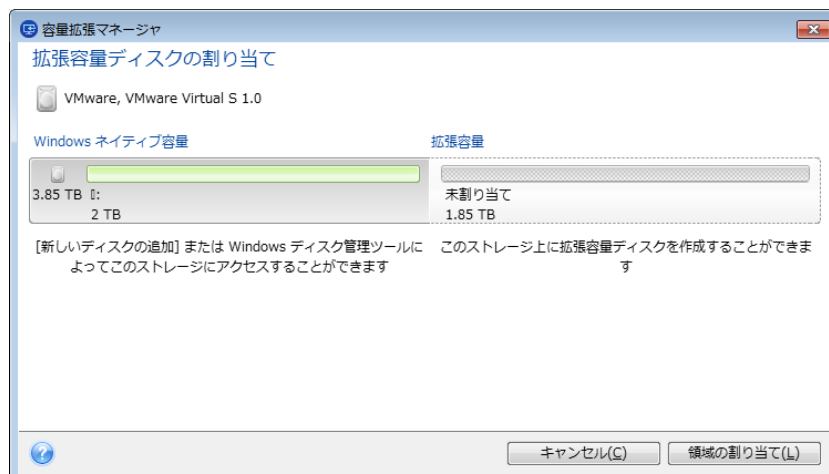
2 TB を超える領域は、[拡張容量] と表示されます。容量拡張ディスクを有効にすることができます。一度有効にすると、この領域がオペレーティング システムに認識されるようになり、ディスク管理処理の対象となります。

使用方法

1. Acronis 容量拡張マネージャを起動するには、[ツール] タブを選択し、[その他のツール] をクリックして、[Acronis 容量拡張マネージャ] をクリックします。

2 TB を超える容量のある MBR ディスクが検出されない場合は、ディスク領域全体にアクセスでき、Acronis 容量拡張マネージャを使用する必要がないことを示すメッセージが表示されます。

2. Acronis 容量拡張マネージャに、割り当て可能な容量拡張が示されます。



3. [領域の割り当て] をクリックすると、次のステップで割り当てることができるディスク領域が表示されます。

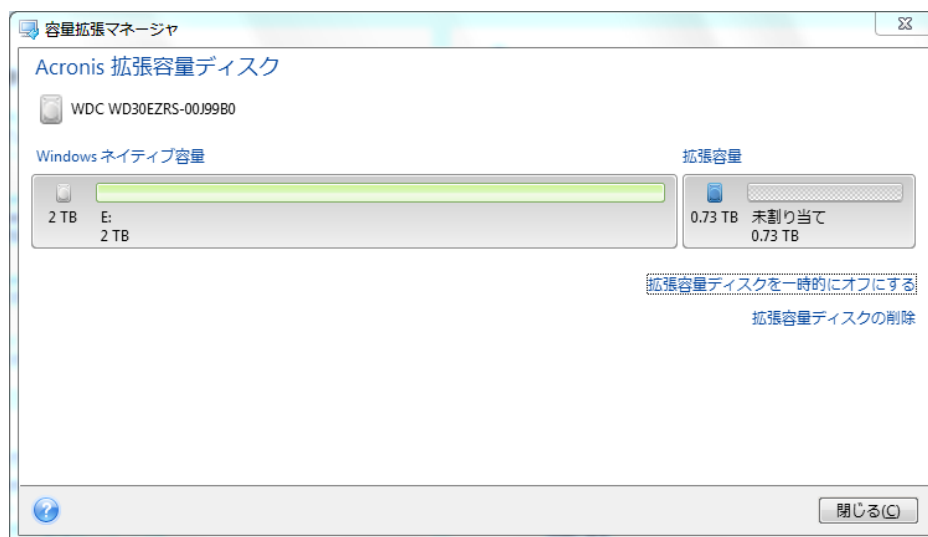
[適用] ボタンをクリックすると、容量拡張ディスクが物理ディスク上にエミュレートされます。物理ディスクの容量が 4 TB を超える場合は、オペレーティング システムは GPT パーティション スタイルをサポートしていないため、複数の MBR 容量拡張ディスクが作成されます。

容量拡張ディスクのほとんどのプロパティは物理ディスクと同様ですが、容量拡張ディスクはブータブル ディスクではありません。

4. **[閉じる]** をクリックして、Acronis 容量拡張マネージャを終了します。

他に可能な対応

領域の割り当て後に、**[容量拡張ディスクを一時的にオフに切り替える]** をクリックして、容量拡張ディスクを一時的にオフに切り替えることができます。この操作によって、容量拡張ディスクがディスク管理ツールに認識されなくなりますが、このディスク領域の割り当て状態が維持され、後でこれらのパーティションが認識されるよう再設定できます。その場合は、Acronis 容量拡張マネージャを起動し、**[領域の割り当て]** をクリックします。



容量拡張ディスクを削除するには、**[容量拡張ディスクの削除]** をクリックし、次のステップで **[適用]** をクリックします。容量拡張ディスクがシステムから削除され、2 TB を超えるディスク領域にアクセスできなくなります。この領域を後で割り当てるには、容量拡張マネージャをもう一度起動し、ウィザードの手順を繰り返す必要があります。

Acronis True Image 2015 Personal のアンインストール後でも、容量拡張ディスクを使用し続けることができます。アンインストール時に、容量拡張ディスクを削除するかどうかの確認を求められます。ディスクを削除しないよう選択した場合は、ディスクは引き続き使用可能です。

5.5 イメージのマウント

イメージを仮想ドライブとしてマウントすると、物理ドライブと同じようにアクセスすることができます。これにより、次のことが可能になります。

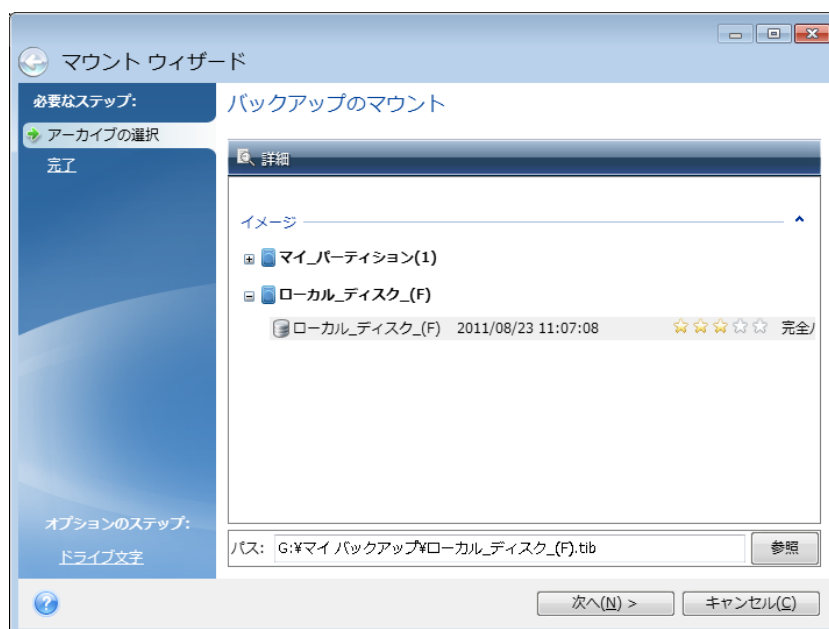
- 新しいディスクがシステムに表示される。
- Windows エクスプローラやその他のファイル マネージャでイメージの内容を確認できる。

このセクションで説明した処理は、FAT および NTFS でファイル システムでのみサポートされます。
ディスク バックアップが FTP サーバーに保存されている場合には、マウントできません。

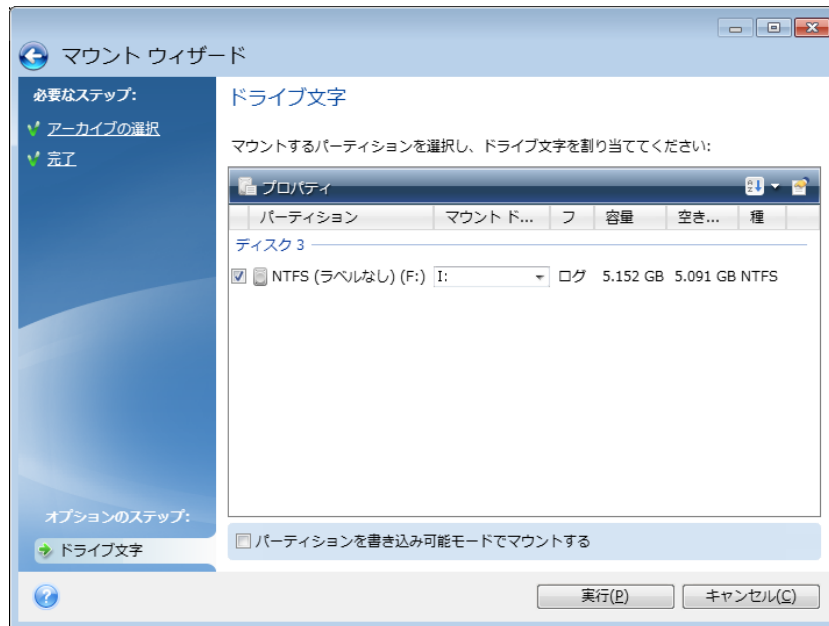
イメージのマウント方法

1. Windows エクスプローラーで、マウントするバージョンのファイルを右クリックし、**[イメージのマウント]** を選択します。
マウント ウィザードが開きます。
2. 作成日時に基づいてマウント対象のバックアップを選択します。これにより、特定時点のデータの状態を参照できます。

ディスクが 1 つのパーティションで構成されている場合を除き、ディスク全体のイメージをマウントすることはできません。



3. (オプションの手順) **[ドライブ文字]** で、仮想ディスクに割り当てる文字を **[マウント ドライブ文字]** ドロップダウン リストから選択します。パーティションをマウントしない場合は、ドロップダウン リストから **[マウントしない]** を選択するか、該当するパーティションのチェックボックスをオフにします。



4. **[実行]** をクリックします。
5. イメージが接続されると、**Windows** エクスプローラが起動し、仮想ディスクの内容が表示されます。

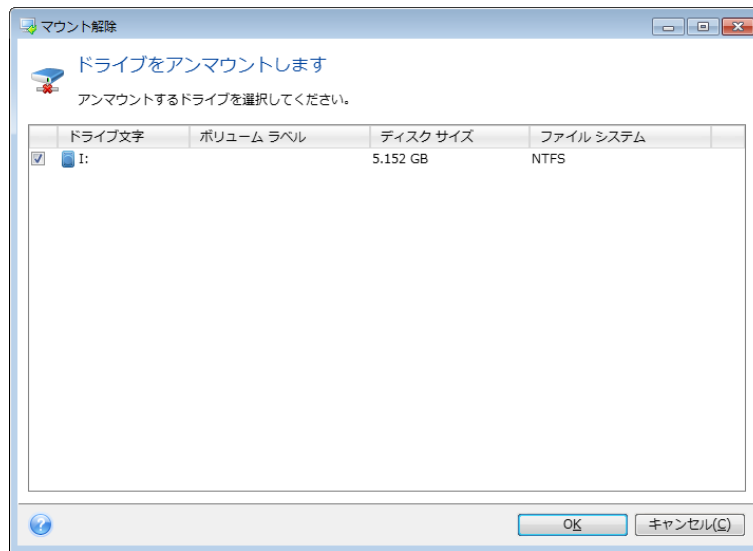
5.6 イメージのアンマウント

仮想ディスクの維持にはかなりのシステム リソースが消費されるため、必要な操作がすべて終了したら、仮想ディスクをマウント解除することをお勧めします。

イメージのマウント解除を行うには、以下のいずれかを実行します。

- **Windows** エクスプローラで、ディスク アイコンを右クリックして、**[マウント解除]** を選択します。

- コンピュータを再起動するかシャットダウンします。



6 トラブルシューティング

セクションの内容

Acronis システム レポート.....	83
Acronis スマート エラー レポート.....	84
カスタム レスキュー CD の作成.....	85
Acronis カスタム エクスペリエンス プログラム.....	86

6.1 Acronis システム レポート

製品のサポート センターへのお問い合わせの際には、通常、問題を解決するためにご使用のシステムに関する情報が必要になります。この情報を取得する処理は、簡単に実行できない場合や時間がかかる場合があります。システム レポートの生成ツールを利用すれば、この手順を簡素化できます。ツールを使うと必要なすべての技術情報を含むシステム レポートが生成されます。この情報をファイルに保存し、必要に応じて、作成したファイルを問題の報告に添付して製品のサポート センターに送信することができます。このようにツールを使えば、問題解決の手順を簡素化し、解決に要する時間を短縮することができます。

システム レポートを生成するには、以下のいずれかを実行します。

- メイン プログラム ウィンドウで疑問符をクリックして **[システム レポートを生成する]** を選択します。
- Windows の **[スタート]** メニューで、**[すべてのプログラム]** → **[Acronis]** → **[Acronis Essential Backup]** → **[ツールとユーティリティ]** → **[Acronis システム レポート]** の順にクリックします。
- **Ctrl+F7** キーを押します。このキーの組み合わせは、Acronis True Image 2015 Personal が他の処理を実行中であっても、使用できます。

レポート生成後に、次の操作を行います。

- 生成されたシステム レポートをファイルに保存するには、**[保存]** をクリックし、表示されたウィンドウで、作成されるファイルを保存する場所を指定します。
- レポートを保存せずにメイン プログラム ウィンドウを終了するには、**[キャンセル]** をクリックします。

コンピュータが起動しないときにシステム レポートを生成するための個別のコンポーネントとして、このツールをブータブル レスキュー メディアに含めることができます。メディアから起動後、Acronis True Image 2015 Personal を実行せずにレポートを生成できます。USB フラッシュ ドライブを接続し、**[Acronis システム レポート]** アイコンをクリックします。生成されたレポートは USB フラッシュ ドライブに保存されます。

Acronis システム レポート ツールをブータブル レスキュー メディアに含める手順は、次のとおりです。

- **Acronis メディア ビルダ** ウィザードの **[レスキュー メディアに追加するコンポーネントの選択]** ページで、**[Acronis システム レポート]** チェックボックスをオンにします。
- 続行するには、**[次へ]** をクリックしてください。

コマンド プロンプトからのシステム レポートの作成

1. 管理者として Windows コマンド プロセッサ (cmd.exe) を実行します。
2. 現在のディレクトリを Acronis True Image 2015 Personal インストール フォルダに変更します。次のコマンドを入力します。

```
cd C:\Program Files (x86)\Acronis\TrueImageHome
```

3. システム レポート ファイルを作成するには、次のコマンドを入力します。

```
SystemReport
```

SystemReport.zip ファイルが現在のフォルダに作成されます。

別の名前でレポート ファイルを作成する場合は、<file name> の代わりに新しい名前を入力します。

```
SystemReport.exe /filename:<file name>
```

6.2 Acronis スマート エラー レポート

プログラム処理に関するエラーの問題が発生すると、Acronis True Image 2015 Personal では、対応するエラー メッセージが表示されます。エラー メッセージには、イベント コードと、エラーの簡単な説明が含まれています。



インターネットに接続できる場合

エラーを修正するための解決策が掲載されている Acronis ナレッジ ベースを表示するには、**[ナレッジ ベース]** ボタンをクリックします。

確認ウィンドウが開きます。このウィンドウには、インターネットを介して Acronis ナレッジ ベースに送信される情報が一覧表示されます。**[OK]** をクリックして、情報の送信を許可します。

以降は確認なしで情報を送信したい場合、**[常に確認なしで送信する]** チェックボックスをオンにします。

インターネットに接続できない場合

1. エラー メッセージ ウィンドウで、**[詳細]** をクリックし、イベント コードを書き留めてください。コードは次のようになります。
 - 0x000101F6 - 通常のイベント コードの例です。

- 0x00970007+0x00970016+0x00970002 - 複合的なイベント コードの例です。この種のコードは、下位レベルのプログラム モジュールで発生したエラーが上位レベルのモジュールに影響した場合には表示されることがあります。
1. インターネットに接続している場合や、インターネット接続を利用できる別のコンピュータを利用できる場合は、<http://kb.acronis.com/errorcode/> でイベント コードを入力してください。

6.3 カスタム レスキュー CD の作成

多くの場合は、Acronis メディア ビルダによって作成された標準レスキュー CD を使用できます。詳細については、「ブータブル レスキュー メディアの作成」を参照してください。

リカバリ環境で一部のハードディスク ドライブ、ネットワーク アダプタ、マウス、またはキーボードが検出されない場合、通常はドライバに問題があります。このため、使用しているハードウェア ドライバのいくつかが標準的なレスキュー CD に含まれていない場合は、カスタム レスキュー メディアを作成する必要があります。


アクロニス製品で使用される Linux ベースのリカバリ環境では、新しいドライバを追加できません。このため、必要なすべてのドライバを含むカスタム レスキュー CD を作成するには、製品のサポート センターに依頼する必要があります。

依頼する前に、システムに関する情報を収集します。これを行うには、ブータブル メディアから、システム レポートを作成する必要があります。

システム レポートを生成するには、次のいずれかの操作を行います。

1. Acronis ブータブル レスキュー メディアがない場合は、作成します。詳細については、「Acronis メディア ビルダ」を参照してください。
2. BIOS で起動順序を設定して、レスキュー メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並べ替え 『52ページ』」を参照してください。
3. レスキュー メディアから起動して、**[True Image]** を選択します。

[True Image] をクリックする代わりに、**USB フラッシュ ドライブを接続し、[Acronis システム レポート]** をクリックすることができます。この場合、レポートが生成され、フラッシュ ドライブに自動的に保存されます。

4. [ヘルプ] アイコン () の隣の矢印をクリックして、**[システム レポートの生成]** を選択します。
5. レポート生成後は、**[保存]** をクリックし、表示されたウィンドウで、作成されたファイルを保存するロケーションを指定します。
レポートは ZIP ファイルにアーカイブされます。

このファイルを Acronis のカスタマー サービスに送信します。カスタマー サービス部門は、コンピュータのハードウェアと互換性があるカスタム レスキュー メディアの ISO イメージを作成し、ISO ファイルをお客様に送信します。Nero など、ISO ファイルを処理できるプログラムを使用して、このファイルを CD や DVD に書き込みます。

適切なドライバを見つけてカスタム レスキュー メディアを作成するには、ある程度の時間がかかることをご了承ください。また、場合によっては適切なドライバが見つからないこともあります。

カスタム レスキュー CD を作成したら、コンピュータのすべてのハードウェアがリカバリ環境で検出されるかどうかをテストします。

6.4 Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム

Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム (CEP) は、Acronis のお客様が、Acronis 製品の機能、設計、および開発に貢献できる新しい手段です。このプログラムにより、お客様は、ホスト コンピュータや仮想マシンのハードウェア構成、使用頻度が最も多い（および少ない）機能、発生する問題の性質に関する情報など、さまざまな情報を提供できます。この情報を基にして、お客様が頻繁に使用する Acronis 製品と機能を向上させることができます。

いずれかを選択してください。

1. サイドバーの **[ヘルプ]** をクリックして、**[Acronis True Image のバージョン情報]** をクリックします。
2. プログラムへの参加をやめるには、**[Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラムに参加する]** をオフにします。

このプログラムへの参加を選択された場合、技術的な情報が 90 日ごとに自動的に収集されます。氏名、住所、電話番号、キーボード入力などの個人データは収集されません。CEP への参加は任意ですが、お客様のニーズをいっそう満たすために、ソフトウェアの改善と拡張された機能を提供することを最終的な目的としています。

著作権情報

Copyright © Acronis International GmbH, 2002-2015.All rights reserved.

Acronis、Acronis Compute with Confidence、Acronis リカバリ マネージャ、Acronis セキュアゾーン、Acronis True Image、Acronis Try&Decide、および Acronis ロゴは、Acronis International GmbH の商標です。

Linux は、Linus Torvalds の登録商標です。

VMware および VMware Ready は、VMware, Inc. の米国ならびにその他の地域における商標または登録商標です。

Windows および MS-DOS は、Microsoft Corporation の登録商標です。

ここに記載されているその他すべての商標および著作権は、それぞれの権利所有者に帰属します。

著作権所有者の明示的な許可なく本ドキュメントの実質的な修正版を配布することは禁止されています。

著作権所有者からの事前の許可がない限り、いかなる形態（紙媒体など）であっても商業目的で本ドキュメントまたはその派生物を配布することは禁止されています。

ドキュメントは、「現状のまま」で提供され、商品性に対する黙示的保証、特定の目的に対する適合性、権利を侵害していないことなどを含む明示的または黙示的な条件、言明、および保証に関する責任を負いません（免責条項の範囲が法的に無効と見なす場合を除く）。

本ソフトウェアまたはサービスにサードパーティのコードが付属している場合があります。サードパーティのライセンス条項の詳細については、ルート インストール ディレクトリにある `license.txt` ファイルをご参照ください。本ソフトウェアまたはサービスと共に使用するサードパーティ コードおよび関連するライセンス条項の最新の一覧については、<http://kb.acronis.com/content/7696> をご参照ください。

Acronis の特許取得済みの技術

この製品で使用されているテクノロジーは、1 つ以上の米国特許番号（7,047,380、7,275,139、7,281,104、7,318,135、7,353,355、7,366,859、7,475,282、7,603,533、7,636,824、7,650,473、7,721,138、7,779,221、7,831,789、7,886,120、7,895,403、7,934,064、7,937,612、7,949,635、7,953,948、7,979,690、8,005,797、8,051,044、8,069,320、8,073,815、8,074,035、8,145,607、8,180,984、8,225,133、8,261,035、8,296,264、8,312,259、8,347,137、8,484,427、8,645,748、8,732,121 および特許出願中）の対象として保護されています。

7 用語集

A

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ

起動時に F11 キーを押すことでスタンドアロン版の Acronis True Image 2015 Personal を開始できるようにする保護ツールです。Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用すると、レスキューメディアは不要となります。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャは、特にモバイル ユーザーにとって便利です。障害が発生したら、ユーザーはコンピュータを再起動し、「F11 キーを押して Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを実行します...」というプロンプトが表示されたら F11 キーを押し、通常のブータブル メディアと同じ方法でデータ リカバリを実行します。

制限事項: ダイナミック ディスク上に作成することはできません。LILO や GRUB などのブート ロードラーを手動で設定する必要があります。サードパーティ製のロードラーを再アクティブ化する必要があります。

Acronis セキュア ゾーン

セキュリティで保護されている、ハードディスク上のバックアップ 『89ページ』保存用のパーティションです。次の利点があります。

- 同じディスクに保存したバックアップからディスクをリカバリすることができます。
- ソフトウェアの誤動作、ウィルス攻撃、オペレータによるエラーからデータ保護するためのコスト効率のよい便利な方法を提供する。
- データをバックアップまたはリカバリするための別のメディアやネットワーク接続が不要になる。

制限事項:

- 1) Acronis セキュア ゾーンはダイナミック ディスクに作成できません。
- 2) ブータブル レスキュー メディアや Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用して Acronis True Image 2015 Personal を開始する場合、リカバリ環境内で Acronis セキュア ゾーンをバックアップの場所として使用することはできません。

イメージ

ディスク バックアップ 『88ページ』と同じです。

オンライン バックアップ

オンライン バックアップ: Acronis オンラインバックアップを使用して作成されるバックアップです。オンライン バックアップはオンライン ストレージと呼ばれる特別なストレージに保存され、インターネット経由でアクセスできます。オンライン バックアップの主な利点は、すべてのバックアップがリモートの場所に保存されることです。これにより、ユーザーのローカルなストレージとは関係なく、すべてのバックアップ データの安全が保証されます。オンライン ストレージの使用を開始するには、サービスを申し込む必要があります。オンライン バックアップは日本では提供されておりませんのでご了承ください。

ディスク バックアップ (イメージ)

ディスクまたはパーティションのセクタベースのコピーをパッケージした形式のバックアップ 『89ページ』です。通常は、データを含むセクタのみコピーされます。Acronis True Image 2015 Personal では、すべてのディスク セクタをそのままコピーするオプションが用意されています。これにより、サポートされていないフ

ファイル システムのイメージ作成が可能です。
なります。

ノンストップ バックアップ

注意 この製品エディションでは、ノンストップ バックアップは利用できません。この機能にアクセスするには、製品版にアップグレードしてください。

ノンストップ バックアップとは実際には、Acronis ノンストップ バックアップ機能を使用して作成されたディスク/パーティションまたはファイル バックアップです。これは、1 つの完全バックアップ バージョン 『90ページ』と、短い間隔で作成された一連の増分バックアップ バージョン 『91ページ』の組み合わせです。ほぼ連続したデータの保護を実現し、必要に応じて任意の復元ポイントにおける以前のデータの状態にリカバリできます。

ノンストップ プロテクション

注意 この製品エディションでは、ノンストップ バックアップは利用できません。この機能にアクセスするには、製品版にアップグレードしてください。

ノンストップ プロテクション: 有効にするとノンストップ バックアップが実行される処理です。

バックアップ

1. バックアップ処理 『89ページ』と同じです。
2. バックアップ設定を使用して作成、管理するバックアップ バージョンのセットです。バックアップには、完全 『90ページ』バックアップと増分 『90ページ』バックアップの両方の方法で作成された複数のバックアップ バージョンが含まれる場合があります。同じバックアップに属するバックアップ バージョンは、通常同じ場所に保存されます。

バックアップ バージョン

単一のバックアップ処理 『89ページ』の結果。物理的には、特定の日時にバックアップされたデータのコピーを含む単独または一連のファイルです。Acronis True Image 2015 Personal によって作成されたバックアップ バージョン ファイルの拡張子は TIB です。バックアップ バージョンの統合による TIB ファイルもバックアップ バージョンと呼ばれます。

バックアップ バージョン チェーン

最初の完全バックアップ バージョンと、後続の 1 つまたは複数の増分バックアップ バージョンから構成される、最低 2 つのバックアップ バージョン 『89ページ』からなる一連のバックアップ バージョンです。バックアップ バージョン チェーンは、次の完全バックアップ バージョン (存在する場合) まで続きます。

バックアップ処理

データを特定の日時の状態に戻すため、コンピュータのハード ディスクに存在しているデータのコピーを作成する処理。

バックアップ設定

新しいバックアップの作成時にユーザーが設定するルールのセットです。このルールによって、バックアップ処理を制御します。後でバックアップ設定を編集し、バックアップ処理を変更または最適化することができます。

ブータブル メディア

Acronis True Image 2015 Personal のスタンドアロン バージョンを含む物理的なメディア (CD、DVD、USB フラッシュ ドライブ、またはコンピュータの BIOS によってブート デバイスとしてサポートされるその他のメディア)。

ブータブル メディアは次の操作に最もよく使用されます。

- 起動できないオペレーティング システムのリカバリ
- 破損したシステムで壊れずに残ったデータへのアクセスとバックアップ
- ベア メタル上のオペレーティング システムの配置
- サポートされていないファイル システムを持つディスクのセクタ単位のバックアップ

ベリファイ

特定のバックアップ バージョン 『89ページ』からデータをリカバリできるかどうかを確認する処理です。

何をベリファイするかにより、次のようになります。

- 完全バックアップ バージョン 『90ページ』: 完全バックアップ バージョンのみがベリファイされます。
- 増分バックアップ バージョン 『91ページ』: 最初の完全バックアップ バージョン、選択された増分バックアップ バージョン、および選択された増分バックアップ バージョンまでのバックアップ バージョンのチェーン全体（ある場合）がベリファイされます。

リカバリ

リカバリとは、壊れたデータをバックアップ 『89ページ』に保存されている以前の正常な状態に戻す処理のことです。

漢字

完全バックアップ

1. バックアップ対象として選択されたすべてのデータを保存するために使用されるバックアップ方法。
2. 完全バックアップ バージョン 『90ページ』を作成するバックアップ処理。

完全バックアップ バージョン

バックアップ対象として選択されたすべてのデータを含む、それ自体で完結するバックアップ バージョン 『89ページ』。完全バックアップ バージョンからデータをリカバリする場合は、他のバックアップ バージョンにアクセスする必要はありません。

差分バックアップ

注意: この製品のエディションでは、差分バックアップは使用できません。この機能にアクセスするには、製品版にアップグレードしてください。

1. バックアップ内で直近の完全バックアップ バージョン 『90ページ』が作成されてから変更されたデータの保存に使用されるバックアップ方法。
2. 差分バックアップ バージョン 『90ページ』を作成するバックアップ処理。

差分バックアップ バージョン

注意: この製品のエディションでは、差分バックアップは使用できません。この機能にアクセスするには、製品版にアップグレードしてください。

差分バックアップ バージョンには、前回の完全バックアップ バージョン 『90ページ』に対するデータの変更点が保存されます。差分バックアップ バージョンからデータをリカバリするには、対応する完全バックアップ バージョンにアクセスする必要があります。

増分バックアップ

注意: この製品のエディションでは、増分バックアップは使用できません。この機能にアクセスするには、製品版にアップグレードしてください。

1. バックアップ内で直近のバックアップ バージョン 『89ページ』（すべての種類）が作成されてから変更されたデータを保存するために使用されるバックアップ方法。

2. 増分バックアップ バージョン 『91ページ』を作成するバックアップ処理。

増分バックアップ バージョン

注意: この製品のエディションでは、増分バックアップは使用できません。この機能にアクセスするには、製品版にアップグレードしてください。

前回のバックアップ バージョンに対するデータの変更点が保存されるバックアップ バージョン 『89ページ』。増分バックアップ バージョンからデータをリカバリするには、同じバックアップ 『89ページ』から他のバックアップ バージョンにアクセスする必要があります。